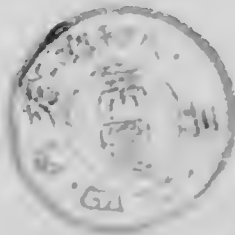
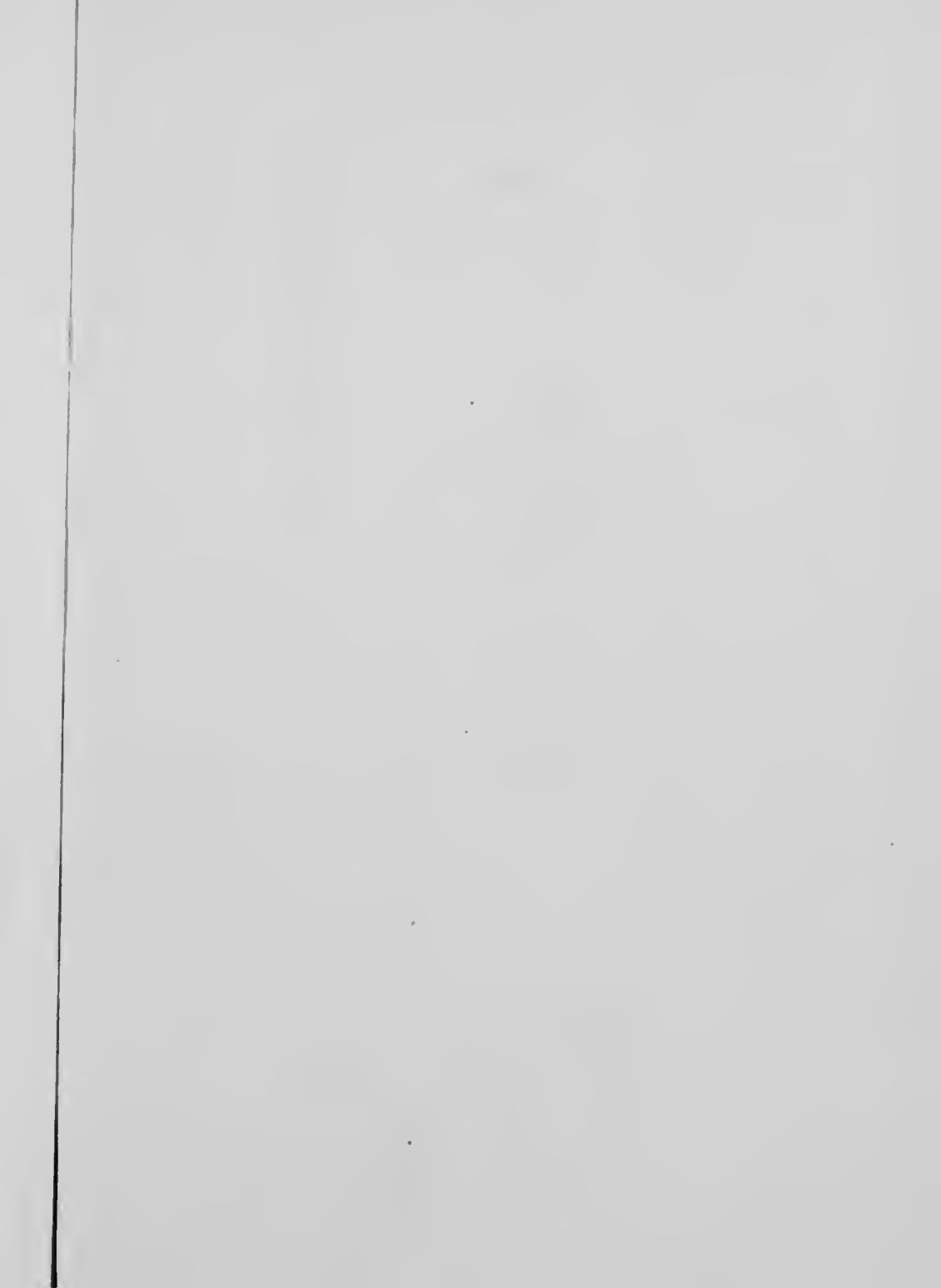


津田光造 著

皇道樂土の建設

東京 軍事教育社 刊





# 皇道樂土の建設

## 目次

### (一) 世界のファツシヨ的氣

### 流と國際間の對立潮流

### 1 世界二大文明の對立……………一

——農業文明と商工文明——

一	ファツシヨの辯……………二
二	農業文明と商工文明の對立……………五
三	農業文明國においては何故に無私を立てねばならないか？……………八
四	近代主義者の謳歌する西洋の商工文明の正體はどんなものか？……………三

2 帝國主義と國際主義の對立……………二七

——世界戦争と國際聯盟——

一 帝國主義の辯……………二七

二 帝國主義は戦争を呼ぶ……………三

三 國際平和主義の擡頭……………六

3 國際聯盟とインターナショナル

……………三〇

——自由主義と社會主義——

4 國際主義と國民主義の對立……………三五

——國際の經濟的壓迫と國內の經濟的

自給——

(二) 日本ファツシヨ運動の

現狀

1 日本ファツシヨの特徴……………四三

——東洋流と西洋流と——

2 東洋的立場を取るもの……………四九

一 玄洋社、浪人會、黑龍會、生産黨

二 國本社、行地社、神武會、日協

3 西洋的立場を取るもの……………七〇

一 國家社會主義的なもの……………七〇

(北一輝氏の「日本改造法案大綱」から高  
島素之氏の大衆社まで)

二 國民社會主義政治運動の勃興……………八〇

(愛國勤勞黨と國家社會黨と新日本國民同盟)

4 農本的立場を取るもの……………九一

一 日本村治派同盟の誕生……………九二

二 日本村治派同盟の運動……………九四

三 村治派と民主的農本主義……………九六



(三) 農本的民族文化史觀の

勝利

1 農本的民族協同體組織原理 一〇四

一 皇道日本の再建……………一〇四

二 皇道的アジア聯邦の實現……………一二四

三 皇道即新世界の創成……………一二五

2 西洋對東洋の文化抗爭……………一三三

一 東洋文化據頭の必然性……………一三三

一 機械工業の擡取性……………一四〇

三 維新前後の民族史觀……………一四七

四 國際的日本の雷同性……………一五五

3 農本的民族協同體建設要綱

A 文化……………一五六

皇道樂土の建設目次

終

一 都市文明の超脱  
二 農本文化の建設  
三 學校の村落還元

(總括的説明)

民族的團結組織の基本としての村落運動

B 政治……………一七〇

一 自由主義的黨派政治の絶滅

二 社會主義的階級支配の掃蕩

三 一君萬民の皇道政治の實現

(總括的説明)

互助協同體組織運動發展形態

C 經濟……………一七七

一 貨幣搾取經濟の驅逐、利用厚生經濟の確立

二 村落自給、一村一家主義の徹底

三 產業大權による經濟の國家統制

(總括的説明)

互助厚生の經濟組織建設形態

4 結語……………一八六

——アジア消費組合の確立——



# 皇道樂土の建設

津田光造 著

## (一) 世界のフツツヨ氣的潮流と

### 國際間の對立潮流、

#### 1 世界二大文明の對立

——農業文明と商工文明——

## 一 ファツシヨの癖

「ファツシヨは輸出品に非ず」とはファツシヨの元祖ムツソリニの有名な揚言である。それにも拘らず目先の利く日本のジャーナリストは、日本にもイタリーのファツシヨまがひな運動が起つたといふので、あれもファツシヨ、これもファツシヨといふ風に、ファツシヨ〜と云ひ腐らしてしまつた。

ファツシヨといふ言葉の語呂は、日本人にはワツシヨ〜と響くので、何となくお祭り騒ぎ、戦争氣分の調子があり、それが昨今の不安な社會狀勢や、深刻な不景氣風と交響する所に、かてゝ加へて、ブルジョア政府の、物狂はしい彈壓の嵐で、一層殺氣立つて來た共產黨の銀行ギャングなどといふ赤色テロが伴奏となる所に、崩壞の過程を辿るブルジョア社會の、恐怖に満された非常時の昂奮と、物情騒然たる世相の閃きがある。

そんな所に、ファツシヨといふ言葉には、一種の日本語的魅力があるので、ムツソリニが輸出品でないと云つてゐる事にはお構ひなしに、何時か日本語として活用される様になつてしま

つた。

一體、日本人ぐらひ、國際的に雷同性の富んだ國民は世界廣しと雖も尠い様だ。外國語ばかりではなく、外國人の考へ出した文明を、ラヂオでも、スポーツでも、一通り模倣して、それを自分のものにしてしまはなくては氣がすまないらしい。氣の早い猿真似民族である。地震國である所爲もあるだらう。よく云へば實行力に富んだ民族である。わるく云へば自國の文化を愛しないオツチヨコチヨイな民族である。その點日本人には愛國心といふものがあるのやらないのやら分らない。愛國運動まで外國製を模倣したがる民族なのである。

そこへ行くと支那人などの方がよつほど愛國的であつて、決して外來語をそのまゝには受け入れようとはしない。必ず自國の言葉に一度焼き直してから使ふ。自國の言葉や文字といふもの——即ち自國の文明といふものに對して、それだけ自尊心をもつてゐるわけだ。頑固だ、保守的だと云へばさうだが、さういふ意味で、自國の文化に對して強い尊敬の念を持つてゐるといふ點では、イギリスもフランスもドイツもイタリーも同様だ。その愛國心なるものが、抑もファッショ運動を生むに至つた要因だ。

ドイツのヒットラーを中心とする愛國運動においては、ムツソリニの愛國運動即ちファツシヨ運動と同じ様な形態を取つてはゐるが、ヒットラー自身は決してそれをファツシヨとは呼ばない。やはり自國語で、「ナチス」と稱してゐる。日本の愛國運動も、日本固有の文化に對する尊敬の念を本として生れたものであるならば、それには日本独自の名稱がなければならぬ筈だ。尊皇運動とか呼ぶやうにしたらよさうなものだ。ムツソリニがファツシヨは輸出品ではないと云つてゐるのもその意味だらう。

ファツシヨといふ言葉は、その運動の内容から説明すれば、「民族的團結」とか「國民的團結」とかいふ日本語に當てはまると思ふ。それは現代資本主義崩壞期にあたつて、次の文明、次の社會を背負つて立つものが、プロレタリアートの「階級的團結」の力であるとするマルクス流第三インターナショナルの運動とは、互に相對立する運動形態である。その點は世界的にさうであると共に、日本に於いても亦然りである。故に日本のマルクス主義者に云はせれば、階級的團結によらない外の一切の新興運動はファツシヨであり、或は反動である。

それでは、斯うした二つの相對立する運動が、資本主義文明からどうして起る様になつた

か？

## 二 農業文明と商工文明の對立

フアツシヨカマルクスかの對立を説く前に、現代の多くの文明批評家によつて見落されてゐる世界の二大文明の對立について、その大要を明かにする必要がある。

世界の二大文明とは、農業文明と商工文明のことである。農業文明とは東洋文明のことであり、商工文明とは西洋文明のことである。どうしてこの二つの文明が對立するかと云ふに、文明の性質の根本的相違によるのである。

先づ農業文明だが、此の文明は、印度、支那、日本等、概して東洋に於いて最も優れた發達を見た文明である。之等東洋の諸國は農業を以つて立つ農業國である。農業國の常として、農業を経営する基礎條件が、個人或は個人の集團の力によるものではなく、家族といふ血族的生命の結合した力によらなければならない。先づ二人の男女があつて、それが夫婦になる。生活の必要から、食糧を得べく若干の土地を得て耕作する。即ち夫婦相和する結合力が、此の農業

社會の生産形態の基礎條件である。夫婦の間に子が生れる。夫婦は生産に従事しつゝ子供を養育し、自給自足の生活を勵行する。子供は次第に成長する。家の後を繼ぐものは嫁を迎へて夫婦になる。分家する者は又若干の土地を得て嫁を迎へ、夫婦になつて別に家を構へる。

さういふ風にして子孫が繁榮して行く間に、本家の方では、最初に家を建てた夫婦は年寄りになり、働けなくなる。働ける子供夫婦に家を譲り、自分達は隠居する。隠居すると云つても別に家を建てる力がないとか、その必要がない限りは、初め自分達の建てた家だから、子供達夫婦の家にゐて、同居生活をする。子供達夫婦に子供が出来る。その子供が大きくなれば又嫁を迎へて、茲に新婚の若夫婦ができる。といふ具合になるから、此の一家には二代、三代乃至四代の夫婦が同居生活をする様になる。

斯ういふ風に、幾代もの血縁關係の者同志が一家に同居して、獨立した一國の經濟生活を營んで行くのを家族生活といふ。

農業文明國においては、此の家族生活といふものが、社會の一つの獨立した生活體、即ち社會の經濟單位と成てゐるのである。之れが農業經濟における最も重大な特長なのであつて、此



の家族的自給自足の社會形態に本づいて、そこに工業が起り、商業が營まれ、而して此の家族社會を幸福ならしめ、可能ならしめ、豊富ならしめ、且つ之れを無窮に存在發展せしめんとする要求と願望と工夫とから、そこに様々な人生觀が、世界觀が、哲學が、藝術が、道德が、教育が宗教が、政治が生れたのである。

此の農業國家家族社會の文化を通じて、最も特色ある一事は「無私」といふ指導精神である。日本に生れた神道にせよ、支那に生れた儒教にせよ、その國民の指導精神の根柢とする所のものは、無私の精神である。此の無私の精神が東洋文明に一貫した一大特質である。此の特質なしには、東洋文明といふものは考へられない。然るに、西洋文明即ち近代文明は個人をその文明の基調として發達した個人主義の文明である。東洋の文明即ち農業文明は、私を立てない文明であるに對して、西洋の文明即ち商工文明は私を立てる文明である。此の二つの文明は互に相對立して兩立しないのである。

それでは、何故、東洋の農業國では、かくの如き無私の文明を長養し、尊重して來たのか？此の因縁について少しく考察を加へる必要がある。蓋し、此の點がよく呑みこめてゐないと之

れから述べようとする日本ファツシヨ運動即ち尊皇運動の意味が分らないであらうから。

### 三 農業文明においては何故に

無私を立てねばならないか？

農業立國の社會においては、家族がその經濟單位であつて、個人といふものは、社會の經濟單位を成さぬものである。家族には家長といふものがあるが、その家長は社會的には家族の代表者であつて、個人ではないのである。従つてそこでは、家族主義が社會の基調をなし、個人主義は成立しない。個人といふものは、そこでは社會的關係において獨立的生活體ではなく家族といふ獨立的生活體、即ち經濟單位の部分的存在若しくはその家族的生活體全員の代表的存在としてしか成立しない。そこでは家族の内部においては勿論、その外部においても「私」なるものゝ獨立的存在は認められず、又許されぬのである。

此の關係をもう一步立ち入つて、深く掘り下げると、そこに一つの生命觀——生命哲學が生れるのである。即ち「身體髮膚之れを父母に受く」といふ思想である。吾々の生命は、之れを

父母より與へられたものである。之れは誰にでも肯ける考へであり、又、どの國の人間にも分る考へであらうが、實をいふと、近代文明の基調をなす所の個人主義には、かくの如き報本反始の生命觀がないのである。だから、「父母の恩」といふものが、近代社會の道德の基調にはならぬのである。故に「敢て之れを毀傷せざるは孝の始めなり」といふ「孝」の考へもない。

此の孝の考へは、父母から貰ひ受けた此の生命であるから、それは必要とあらば父母へ返さなければならぬものであるといふ考へなのである。もつと分り易く云へば此の生命は父母からの借物であつて、本來自分のものでない——つまり、自分といふものは本來存在しないと考へるのである。即ち個人といふものは、本來無私なのである。自分のものでない借物の生命だから——先方の必要に應じて、何時でもお返し申し上げなければならぬ物だから、毀を付けては申し譯がないと考へるのが、孝の始めだといふのである。

此の考へは、人間の生命觀として、最も素直な、最も自然な考へだと考へられるのだが、近代の個人主義は、敢て之れを歪曲して、此の生命は父母が勝手に産んだもので、自分が頼んで

産んで貰つたのではない、返すには及ばないと、啖呵を切つて居るのだ。そして一人前に育てゝ貰つた父母の恩は忘れて、自分は自分で獨立して生活を立てゝ行きさへすれば好いのだといふ考へになる。

成る程都市の生活——工業社會の生活といふものは、手に何等かの職さへあれば、個人として獨立した生計が得られない事はない。それが得られる様に出來てゐる。だから個人主義で生活は成り立つ。併しながら農業社會においては、耕作地を持たない限り、腕一本で生活する原原則として生活は成り立たない。腕一本で生活するには、勢ひ耕作地所有者の家に住み込み、その作男か下婢でもなる外はない。さうすれば、それは獨立した生活體ではない。さうなれば、それは獨立した生活體ではなく、その家族の一員即ち一部分である。そして苟も家族の一部分たる以上は、主人の命令には絶體服従の態度をとり、それに對して對立的な行動を取ることは許されない。

之れは家族生活といふものは、孝道によつて成立するものだといふことを語る以外の何物でもない。孝道といふものは、前にも述べたやうに、無私の道である、即ち家族生活といふもの

は、孝道かうだうによる無私むしの團結だんけつ體である。個人こじんは家族かぞくといふ全體ぜんたいの一部分である。そこではその家族かぞく全員の誰たれもが「私わたくし」といふものを立てる事は許ゆるされない。そこでは、家族かぞくの全員ぜんかんは、家族かぞくといふ全體ぜんたいの爲ために圖あやり、家族かぞく全員の幸福きふくと繁榮はんえいとを目的もくてきとして働く事あるのみである。家族かぞく全員の幸福きふくが取りも直なさず、自分の幸福きふくなのである。家族かぞく一員の不幸ふかうは、全家族ぜんかぞくの不幸ふかうなのである。従したがつて、もしそこに、私一個わたくしの幸福きふくだけを念をんじ、他の家族部員かぞくぶいんの幸福きふくを犠牲ぎせいにし、或は之これを蹂躪じゆりんする様な横着わうちゃくな行動こうどうを取る者があれば、その家族かぞくの平和へいわは亂れ、所謂いふゆるお家騒動かそうどうとなる。お家騒動かそうどうは家族かぞくの安榮あんえいを破壊はくわいする。

それ故ゆゑに、家族制度かぞくせいどによつて立つ農業社會のうぎやうしやかいにおいては、家族かぞくの安榮あんえいを持久ちきうせんが爲ために、家族的團結かぞくてんけつをもつて社會制度しやかいせいどの基礎きそとする。而してその家族的團結かぞくてんけつを鞏固かうこにし、之これを持久的ちきうてきたらしめんが爲ためには孝道かうだうを以もつてその道德たうてきの基本きほんとする。晉しんに道德たうてきの基本きほんたるのみならず、孝道かうだうは亦經濟またけいぎの政治せいぢの宗教しうけうの教育けういくの一切いっけつの藝術げいじゆつの基調きてうとなり、茲こゝに、東洋農業國とうやうのうぎやうこくに特有とくゆうなる精神せいしん文化ぶんかが發達はつたつしたのである。

東洋農業國とうやうのうぎやうこくに花咲ける斯様な文化的特徵ぶんくわてきしやうから、吾等われらは之これに對して、孝道文化かうだうぶんかと名づける事

が出来やう。此の孝道文化は無私の文化であり、與へる文化であり、報恩の文化である。而して最も通俗的には、義理人情の文化である。此の義理人情の情義文化——之れを調子を高める  
と仁愛文化——は、近代主義者達から封建文化として、いたく無價值なるものゝ如く見做され  
つゝある所である。

果してそれは無價值な文化であらうか？

#### 四 近代主義者の謳歌する西洋の

#### 商工文明の正體はどんなものか？

西洋に發達した近代文明は、即ち都市を母胎として發達した商工文明である。都市商工業者の生活の必須條件とする所は、農業者の如く土ではなく、土とは全く反對の金である。或はその生産手段（いはんよりは寧ろ搾取の手段）としての機械である。金を儲け、機械を發明することが、彼等の生活を豊富ならしめる所以である。而して金を儲け、機械を發明するには、必ずしも家族的團結の協力を要しない。個人の聰明と才能とが、之れを能くし得るのである。家

族的團結の如きは、寧ろ此の個人の聰明と才能の發展にとつて桎梏となる。故に商工業者の立場からすれば、個人主義がその生活の基調となるのは當然である。そして此の個人主義は、家族的桎梏から解放されようとして、絶えず家族に反撥する。

近代の資本主義は、かくの如き個人主義の商工業的發展の產物である。その源流を遠くフェニキアに發し、古代ギリシャに於いてその文明の形態を完成し、ローマにおいてその世界征服の發展の基礎を成就した。地中海はその搖籃の地として撰まれた。而してその發展の中心地點は、フェニキアに於てはその都市シドン或はチイルであり、ギリシャにあつてはアテネである。

それがアレクサンドリアに遷り、ローマに至り、更にゼノア、ヴェニス等に榮え、やがて地中海を出でて、リスボン、マドリットに、次いでアムステルダムを経て終にロンドンに達し、茲に資本主義最後の繁榮を見るに至つたのである。

此の間、ルネッサンス及び宗教改革を通して、ギリシャ精神の復活を遂げ、東洋的な中世時代を戦ひ抜き、東洋航路の開拓、アメリカ新大陸の發見をもつて、その商工業的發展主義を鮮や

かにし、フランス大革命を経て、その自由主義と個人主義の精神を以て、全く封建的家族主義生活を破壊し盡した。

その山賊海賊の酋長としてイギリスが直り、近代資本主義物質文明の病毒を世界人類に散布した。エリザベス、ヴィクトリアの二女皇こそは、世界海賊史上に特筆さるべき女丈夫である。その巢窟がロンドンであり、その海賊的精神こそは、ロンドンを中心に、ヨーロッパ及びアメリカの都市から都市へと承継され、養ひ育てられた町人根性、市民精神に外ならぬ。その主智的なる、その合理主義的なる、その個人主義的なる、その自由主義的なる、いづれも併し、ギリシヤ市民の持てる傳統的精神に外ならぬ。家族主義的東洋精神とは全く對立的精神と謂はねばならぬ。

畢竟するに、この近代ヨーロッパの物質文明とその精神とは、都市の中に育ち、市民が生んだものであつて、土を離れ、農民のあづからざる處、東洋の關せざる所である、と云はんよりは、それは土を蹂躪し、農民をその搾取の手段と化し、東洋及びその他の農業國に寄生することによつて、始めてその成長を遂げ得た文明である。



例をヨーロッパに取るまでもなく、明治維新以來、開國茲に六十年、この西洋の商工都市文明國即ち農業國寄生文明國を先進文明國と仰ぎ、これに師事追從して、言語動作、風俗、習慣一々師の掣に倣ひ、師の域に達せんことに、一意惟れ専心し來れる日本の現状が、何よりも雄辯にこの事實を證明する。

その結果はどうなつたか？ 都市の異狀なる發展に伴ふ農村の未曾有の疲弊窮乏、これを日本民族全體として觀る時、頭デツカチの尻つぼみな、異常な病態畸形を認めずにはゐられぬだらう。その如く、ヨーロッパに發生した近代都市文明（シヴィリゼイション）は、今や世界人類を恐しく病態畸形化し、都市文明それ自身の破産を、都市文明それ自身の力を以てしては如何ともなし得ない状態にまで立ち到つたのだ。

此の都市文明の破産を救ふものは何か？ ファツシヨか、マルクスか？ 否々、左様な都市的な如何なる勢力の結合でもない事を明白に答へて置く。都市文明は農業に寄生し、或は農業を蹂躪することによつてのみ存在し得るといふ都市文明そのものゝ、内部的、本質的缺陷によつて、自滅の道を辿るより外はない。都市文明はそれが農業國或は農村に寄生することを可

能とされる間は、その繁榮の持續を可能とされる。俚諺にも佛の顔も三度といふ通り、都市文明が農業國或は農村に寄生する事を不可能とされるや否や、それは没落崩壊を餘儀なくされる。

論より證據は、イギリス資本主義没落の現状である。イギリスの資本主義商工文明は、印度その他世界の農業國に寄生することによつて、かの常畫の國といふ世界的繁榮を成就した。けれども、今ではガンディー派の國民的獨立運動によつて、だんぐと印度（及び他の殖民地農業國）に寄生することができなくなつた。そこでイギリスは没落しはじめたのである。

フランスの資本主義が、同じヨーロッパでも案外シツカリと持ちこたへてゐるのは、單に銀行と銀行との間の商業的技巧とか、ブリアン外交の技術がどうかいふ商才的な枝葉末節の問題ではなく、實にフランスの國內に於ける農業の支持によるのである。

以上の歴史的事實を透して、炯眼なる讀者には、資本主義商業文明の破産を救ふものが何であるかと讀めたであらうと思ふ。資本主義を繁榮ならしめたのは、農業國の支持であつた。そして資本主義を没落に至らしめるものは、農業國（或は農村）が、それを支持しなくなる（或は

支持できなくなる)からだ。

即ち吾等は、資本主義都市商工文明の正體を知ることによつて、次の結論に到達した。資本主義の破産を救ふものは、マルクスでもなく、ファツシヨでもなく、實に東洋農業國民族の團結の力である。

## 2 帝國主義と國際主義の對立

### ——世界戦争と國際聯盟——

#### 一 帝國主義の癍

資本主義商工文明は、世界の農業國に寄生することによつて、はじめて成立し、その繁榮を得た文明である。そこで、世界の資本主義文明國は、イギリスを始めとして、ドイツもフランスもイタリーも、口ではモンロー主義を唱へるアメリカも、そして今の所では日本自身も(實は農業國でありながら、世界資本主義の一環に列坐することによつて、一等國の光榮ある汚名

を得てゐることによつて)その工業生産の資源と同時にその市場販路を世界の他の農業國乃至未開地に求めなければならなくなる。

農業文明國の生産の目的は、家族的或は民族的自給自足にあるのだが、商工文明の生産の特徴は、その産物を他人に或は他國民に賣りつけて、金を儲けることを目的とする所にある。

このマーカンテイリズムが、産業ばかりでなく、その生活及び文化の一切を支配するのが、商工文明の一般的性質である。そしてかくの如き生活様式をとることが、「近代的」であり、

モダンなのである。モダンとは利己中心、金儲け主義の別名である。金儲けになることから、砂利でも石炭でも電気でも人糞でも何でも喰ふ。國家でも政權でも節操でも貞操でも何でも賣り飛ばす。資本主義の大本山といはれるイギリスは、印度を始めとして、バルカン、近東、アフリカ、南洋、オースタトリア、南米、カナダ、太陽の没する際もないまでに、世界の農業國といふ農業國、未開地といふ未開地を、喰つて喰つて喰ひ荒してしまつた。それでもまだ喰ひ足りないといふので、印度を根城に、東洋へ、極東へ、支那へとその貪婪の牙を剥き出して來たのだ。支那には四億の民がある。これは随分喰ひでがあるぜといふわけだ。

これが、資本主義商工文明の植民政策といふ奴である。ブルジョア大學あたりの講義の一  
つには必ず植民政策といふ講座が置いてあるが、大學の講座に置いてあつて、その教授或は  
講師といふ偉い人々に多額の給料を支給し、それを聴きに行く學生又多額の聴講料を拂ひ、  
之れは出舎の親父に拂はせるのだ——こゝにも一つの農村搾取のベテンがある——一通りや二通  
りの手続きでは、一個の平民百姓共の分際には中々拜聴の機會も得られない所の有難い御講義  
であるのだが、その正體はと云へば、こんなものを田舎からわざ／＼月謝を拂つて聴きに行く  
べら棒があるかと云つてやりたい程腹の立つ様な、一片の民族的食婪の化け物なのである。ま  
あ譬へていふなら、狼のやうに食婪な獸が、羊のやうに溫順な農業國民の肉を奪ひ合ひつこす  
ることなのだ。それを大學の先生が、多額の俸給を貰つてゐる手前、いかにも權威ありけな、  
もつともらしい顔をして、いかにも高尚で深遠な學問であるかの如く話して聞かせるといふわ  
けだ。それを聴いて、ノートへ筆記を取らなければならない學生こそ、可哀想に、好い面の皮  
といふものだ。

その植民政策といふものによつて、世界中に、出来るだけ多くの植民地といふものを獲得し

やうといふのが、謂ふ所の資本主義商工文明國の帝國主義といふものである。それだから、帝國主義といふ言葉は、この場合、大日本帝國といふその帝國といふものと同じ意味に取つてしまふと、甚だ穩當でないと云はなければならぬ。何故ならば、大日本帝國の帝國には、左様に利己的な貪慾から他國を侵略したり、乗つ取つたりする様な精神は頭毛ない筈である。ないはずだと云つても、現に日本でもそれをやつてゐるではないかといへばそれまでだが、併し、それはつくづくと考へれば誰にも解ることだが、日本獨自のものではなく、イギリスの眞似なのだ。

日本は、明治維新以來、イギリスを先進文明國として之れに師事し、一から十までイギリスに追ひ付かうと、一生懸命努力して來た。そして實際イギリスの様な國になつてしまつた。併し、よく考へてみれば、大變な國を先生にもつてしまつたものだ。イギリスといふ國は謂はゞ、山賊海賊の親分なのだ。山賊の親分がエンペロアーだから、その眞似をして、日本の天皇もエンペロアーにしようといふことにしてしまつた。併し、日本の天皇は山賊の親分ではない。日本の天皇をエンペロアーにしたのは、實に不覺の坂を通り越して大不敬である

日本の天皇は大慈悲の本體だ。利己的な貪慾から他國を侵略しようなどいふケチな淺ましい御量見は、憚りながら、毛頭御持ち合せないのだ。日本の天皇ほどの内容を持つた言葉は、どこの民族の辭書にもないのだ。

だから、もし日本が帝國なら、イギリスの如きは帝國と呼ぶべきではなく、寧ろ狼國と呼ぶべきである。もしどうしてもイギリスがインピリアルであつて、それを日本語に翻譯すれば帝國だから、イギリスを帝國と呼ぶ外はないといふのなら、日本は「皇國」と稱すべきである。或は一層日本語的には「すめらみくに」と稱すべきである。そしてイギリスやドイツあたりの帝國主義といふものは、峻然區別してしまはなければならぬ。

支那の國民政府の日貨排斥の標語に何と云つてゐるか。「打倒日本帝國主義」といつてゐるではないか。之れなどは、日本が是れまで、皇國本來の大慈悲の旗幟たる皇國主義を以て隣邦に莅まず、イギリスの眞似をして、資本主義商工文明帝國主義を以てした事の失敗を語る以外に何物でもない。

## 二 帝國主義は戰爭を呼ぶ

帝國主義は植民政策の美名の下に、領土擴張の野望を抱擁する。世界の農業國を己が隸屬下に併呑しようとする不敵な野心を持つてゐる。あはよくば、全世界を一手に併呑しようとしてゐる。世界の民族を一民族の旗色で塗り潰さうといふのだ。イギリスが先づその段取りで、世界の要所を植民地として押へ取つた。

併しながら、さういふ野望の上に立つ帝國主義國家は、イギリス一國だけではなかつた。世界の資本主義國は、ドイツもフランスもイタリーもアメリカも、同様に帝國主義の野望の上に立つてゐた。イギリスの如き船頭の成り上り共に世界を征服されて、このカイゼルの虫が納まるかと力みかへつて起ち上つたのがドイツである。ドイツの如き田舎漢が世界を統一するとはしやらくさい。ナポレオンの末裔の名折れだとフランスがいきり立つ。ナポレオンやカイゼルの成り上りものが何を拔すか、こちらは世界の歴史に名だたるローマ帝國の大本山直系だと、イタリーがムキになる。かと思へばロシヤでは、ツアーがそり猛鷲の爪を研ぐ、ギリシヤ



もトルコもスペインも、昔執つた杵柄なら、それ相當の古つはものだ。

かくして商工文明の自由主義は、人間の持つ競争本能を、國內におけると同様、國際間に於いても極度に尖鋭化し、互ひに植民地の奪ひ合ひを、商品市場販路の獲得競争といふ所謂資本主義社會における經濟戰を激化した。ダーウキンが進化論を書いて、此の經濟戰に弱肉強食の油を注いだ。ヘーゲルが國家主義の哲學で、大帝國建設の偉業を讚美し、ニーチエは超人の出現を待望した。ダナンツイオが愛國の詩を歌つて、民族の感情に訴へ、戰爭氣分を湧かした。

資本主義自由競走は經濟戰であり、その限りに於いて平和の戰ひであると云ひ得るのだが、要するに肉の奪ひ合ひである。經濟資源を民族の内部に求めずして、之を外部に求め、天然の物資を一民族において私有獨占しようとする。茲に民族と民族との國際對立は激化され動物の本性を露出して、世界の天物を私しようが、經濟資源を獨占しようが、市場販路を一手に收めてしまはうが、優勝劣敗、適者生存、優者が劣者を征服して、優者が世界を支配するのは、優者に與へられた人類の特權だ、愚圖々々云ふなら腕力で來いと、とう／＼本當の戰爭

——生命のやり取りの戦争といふものを、本氣に戦はうとするまでに逆せ上つてしまつたのがカイゼルである。

近代ヨーロッパ資本主義商工文明の優越。然り、このヨーロッパの白色人種共は、彼等が打ち建てたこの資本主義の商工文明の帝國主義なるものが、世界人類に如何なる慘禍を齎らさなければならぬかに就いて、考へてゐる暇はなかつた。彼等は只、東洋その他の農業文明國を、未開野蠻國と考へ、その文明を文明として認めず、そこに居住する黃黑色の有色民族は、彼等の眼には、擧げて低能劣弱の民族であつた。彼等は東洋の農業文明などは尻眼にかけ、世界唯一の優等民族として鼻を高くし、ブルジョア文明に陶醉してゐたのだ。

イギリス先づ白色民族の優越感に慢心し、有色民族に對して、政治的に經濟的に、傍若無人の振舞に耽り、ドイツ又イギリスに敗けじ劣らじと慢心し、イタリアも慢心し、ロシアも慢心し、アメリカも慢心した。慢心の極まる所、己れ有ることを知つて、他あることを辨へず、優者であるが故に、何を仕出かさうと勝手だといふ氣になつた。彼等は人類に對する謙讓の心を失つた。惻隱の心を持たなかつた。

バルカン近東の弱小國は、彼等が暴慢の心を苛らだたせた。先づイギリスがその世界的覇權の確立のためには、ロシアの、ドイツの、フランスの、イタリーの東洋進出に對して、バルカン近東で喰ひ止めなければならなかつた。同様にロシアが、ドイツが、世界征服の覇權を建てる爲めには、バルカン近東を手中に收める必要があつた。ロシアが、ドイツがバルカンに對してさういふ野望を抱いてゐるから、フランスが、イタリーが、益々この手近かのバルカン近東を手なづけようと焦り出した。

かうしたヨーロッパ帝國主義の猛獸共は、バルカン近東に散在する小羊の肉片を、隙もあらばと、虎視眈眈として睨み合つた。一九一四年、パンカン！とピストルの合圖が鳴つた。バルカンは俺のものだ！ カイゼルがこの肉片を一掴みにすべく躍り出た。イギリスでも、フランスでも、ロシアでも、イタリーでも、手を出しさへすれば、一擲りに擲り飛ばしてしまふといふカイゼルの劍幕だつた。イギリス、フランスは固より、ロシアもイタリーも、スウィーと一時に狂ひ立つた。ウヌー ヨーロッパが爆發した。アフリカもアメリカもアジアも 世界が總立ちになつた。機關銃、飛行機、毒ガス、ヨーロッパの天地は、見る／＼阿修羅の巷と化し

た。

戦争は二年、三年と続いた。幾萬の人命が曠野に屍を曝した。弾は盡き、糧食は缺乏を告げた。交戦諸國は皆疲れ果てた。就中、イギリスは糧食の缺乏に悩んでへたばりかけた。強敵に取り巻かれたドイツの惨状は言語に絶した。より以上頑張るにも頑張れなくなつた。交戦國は互ひに第三國の仲裁を俟つ外はなかつた。

平和だ。戦争はもうこりぐだ。人々は皆心からさう念願する様になつた。

### 三 國際平和主義の擡頭

此の國際戦争、是の世界戦争を一期として世界の空氣は一變した。さすがに強慾飽く所を知らない世界資本主義も、少しは富力集中主義、資源獨占主義、市場爭奪主義の利己本位の立場に就いて、反省しないわけには行かなくなつた。たとへそれが口先きだけの外交的辭令に過ぎぬにもせよ、國際平和を唱えずにはゐられなくなつた。國際平和へ、國際平和へ——。資本主義は逆モーションを取つた。

併しながら、どうすれば一體、國際間が平和に治りがつくか？ 平和攪亂の元兇ドイツに對

して、六百六十億圓といふ天文學的數字の賠償金を課することによつてか？ —— かくしてカ

イゼルの帝國主義を叩き潰しさへすれば、それで世界が平和になる見込みがつくといふのか？  
否々、ドイツの帝國主義を叩き潰すといふ意味は、同時に、他の世界の資本主義列國の帝國主

義を叩き潰すことにならない。先づイギリスはイギリスの帝國主義を、ロシアは

ロシアの、イタリーはイタリーの、アメリカはアメリカの、日本は日本の帝國主義を叩き潰す

ことにしなければならぬ。少くとも國際平和主義の要求はそこまで行かなければ徹底しない。

そこで、時のアメリカ大統領センチメンタリスト、ウヰルソンは、自ら國際平和主義を唱へ

ドイツと聯合國との仲裁の役割まで買つて出た手前、何とか國際間が平和になりさうなスロー

ガンを案出しなければならぬ破目に立つた。その肝煎りで、國際平和會議は開かれ、民族自

決主義の原則の下に、帝國主義による國際間の紛争が除去されるかどうかが提案された。

民族自決——これはモンロー主義を傳統的國策とするアメリカとしては、至極好都合な名案

である。國內のことは國內で、民族の政治は民族の手で。

斯様な原則の下に世界の植民地を解放した所で、アメリカにとつて大した痛痒はないばかりでなく、是れまでイギリスに壓倒されてゐたアメリカの資本主義は、それだけ界世に自由な販路を持ち得るのである。面白くないのはイギリスだが、元々、戦争の起りが植民地の争奪から來てゐるのだから、仲裁たるアメリカの民族自決に對して、正面切つて反對を唱えるわけにも行かない。民族自決の原則の下に、列國は互ひに他の民族の領域を侵し合はない事と云ふ不戰條約の條文に、イギリスは不承認精調印しなければならなかつた。世界に日没を見ない大英帝國の資本主義的發展と、帝國主義的世界統一の擡りが、此の時から戻り始めた。即ち世界資本主義は、世界戦争を一期として所謂第三期の崩壊過程を辿り始めたのである。

喜んだのは、資本主義商工文明の帝國主義的壓力下にある被壓迫民族である。弱小國民である。バルカン諸國、——ギリシヤ、ブルガリア、ルーマニア、ユーゴスラビヤ、アルバニア——である。近東諸國——トルコ、シリヤ、バレンスタイン、ケラク、イラーク、ペルシヤ——である。そして就中、東洋農業諸國は、實に此の時から、民族獨立と文化的解放の曙光を認めたのである。印度も、支那も、アフガンも、夫々民族的擡頭の芽を出し始めた。

併しなから、此の國際平和主義は、固よりブルジョアの國際平和主義であつて、民族自決の原則によつて、世界の資本主義が廢絶されたわけぢやない。資本主義が廢絶されないのだから帝國主義も廢絶されはしない。謂はば、世界の被壓迫民族に對する一時の子供だましの欺瞞的政策たるに過ぎぬ。ウイルソンの提唱によつて、世界の資本主義國は國際聯盟に加盟した。けれどもこのブルジョアの國際聯盟が、世界人類の平和に對して、爾來何を貢獻したか？ ワシントン會議、ロンドン會議において、數々軍備縮小が協議された。併しながら、資本主義列國の誰れが果して心から軍備縮小の可能性を認めてゐるか？

喧嘩することは悪い事で、平和にするのが善い事だといふ事は、敢てセンチメンタリストウイルソンの提唱に俟つまでもなく、凡そ人間たるものは誰でも、學ばずして知り、習はずして覺えてゐる所である。けれども、いかに平和にならうとしても、所詮平和になる根據を持たぬ資本主義文明を維持すべく、平和を約束するといふ事は、全く空ら手形の發行に等しいものである。

戦争が悪いといふのは人を殺すからだ。戦争で人を殺すのが悪いなら、經濟的に人を殺すの

も悪い。資本主義が悪いといふのは、資本主義は資本主義國の民族同志で人を殺し合ふといふからではない。世界のプロレタリア及び弱小民族を經濟的に殺すからだ。

### 3 國際聯盟とインターナショナル

#### ——自由主義と社會主義——

世界戦争の產物として、國際聯盟は民族自決、國際平和の守護神として現れた。けれどもこの國際平和の守護神は、世界のブルジョアジーの平和を守護することしか考へない所の極めて自分勝手な横着な守護神である。その民族自決は、因より弱小民族に對する資本主義的搾取の繩張りを決める一つの命題たるに過ぎず、決して弱小民族の獨立解放を援助するといふ積極的意志は持たない。

かくして世界のブルジョア國は、國際聯盟に據つて、世界の弱小民族及び農業民族に對する搾取の範圍を協定することによつて、その支配的地位を維持しようとするにすぎない。故に此



のブルジョアジーの搾取の支配の下に在る世界の弱小民族及びプロレタリアや農民が、民族自決には賛成しても、國際聯盟が唱へる所の國際平和主義に對して不服な事は、餘りにも當然な事柄である。ブルジョアジーの唱へる平和主義なるものは、要するにブルジョアジーの御都合主義である。戦争が悪いことだから平和を唱へるのではなく、より以上戦争をすることが、お互ひに損であると考へたから、もう成るべくお互ひに戦争をしない事にしようといふ利己本位の自由主義からだ。若し戦争をする事が利益になる事なら、この自由主義は何時でも戦争をしようといふ用意はしてゐるのだ。若し戦争をする事が眞に悪い事だと知つたなら、國際聯盟は軍備全廢を決議するのが當然である。それを決議しないのはこの自由主義が眞に戦争を悪い事だと考へない證據である。現にアメリカ及び日本のブルジョアジーは、世界戦争のおかげで、思ひも寄らぬ大金を儲けた。自分では戦場に出ず、戦地で弾に當つて死ぬ者は、プロレタリア農民、植民地の隷屬民に限つてゐる。危険區域に立たずして、濡れ手で粟の掴み取りが出来る機會は、戦争によつてブルジョアジーに恵まれる。何といふ戦争様々である事か。

戦争を眞に悪い事だと考へたのは、世界の農民、プロレタリア及び植民地の民族である。彼

等は何萬の同胞の生命を戦場で殺したか？ 何の爲めに兄弟同志が命のやり取りをしなれば

ならなかつたか？ ——ブルジョアジーの私利私慾の爲めに——彼等は斯う考へた時に、只、

茫然自失してしまつた。正義の爲めに——彼等は強いてブルジョアジーの口吻を真似てさう考

へてみた。世界の平和を攪亂する不義非道の國は、果してドイツだけであつたか？否々、イギ

リスも、ロシアも、フランスも、イタリーも、アメリカも、世界の平和を攪亂する帝國主義の

國である事には變りはない。世界戦争は、實に惡黨と惡黨の同志打ちであつたのだ。さういふ

名もない戦争の弾除けになる位なら、農民には、プロレタリアには、そして世界の被壓迫民族

には、生命を賭して兄弟の爲めに戦はねばならぬ戦争がある。それは眞の正義の戦争——農民

プロレタリア及び被壓迫民族に對する經濟的道德的殺人犯たる資本主義及び帝國主義への戦争

だ。

國際聯盟が正義の爲め人道の爲めと稱して、ブルジョア同志平和主義の相談をしてゐる。そ

の屋根の下では、かうして社會主義者が、新興階級の、新興民族の新しい戦争の相談をしてゐ

た。マルクスとバクーニンとが、労働者の正義に就いて、火の出る様な議論を戦した時から

此の火は消えないのだ。そして世界戦争は此の燃え上らうとする労働階級戦の焔に、一層油を注ぎかけたのだ。

マックス、エンゲルス等によつて主唱された労働階級のインターナショナル——第一インターナショナルは、世界戦争で立ち消えの姿になり、等二及び第二半インターナショナルはブルジョア戦争に鳴りを静めたのだが、茲にレーニンマルクスの意志を續いで、第三インターナショナルの烽火を擧げた。交戦中にロシアでは軍隊が戦争をサボリ出した。そして軍隊の指揮刀がブルジョアジーの方へ向け替えられた。ロシアでは戦争が社會主義革命の方へと轉向したのだ。

これは因より民族自決ではなく、階級自決である。併しこの第三インターナショナルによる階級自決によつて、世界の労働者は、何が正義の戦争であるかに目覺めた。そして何が戦争を廢絶する力であるかを知つた。世界の労働者の團結！此の力に依つてのみ、人類に平和が齎されるのだと、社會主義者は強く叫んだ。戦争は悪い。しかし、一切の邪惡を世界から廢絶する爲めの戦争は正義であると。

ロシアにおいて、社會主義革命の模範が示された。第三インターナショナル——労働者の團結による國際平和主義は、イギリス、ドイツ、フランス、イタリー等の労働者間に火の様に燃え擴つた。アメリカにも、日本にも、支那にも、世界中に飛火した。第三インターナショナル社會主義共和國ロシアは、資本主義列國の敵國となつた。資本主義列國は、擧つてレーニンの革命政府の施設を不成功に終せようとした。ロシアに對する列國の經濟封鎖が行はれた。國際聯盟と第三インターナショナル國際共產黨とは尖銳に對立した。ロシア革命政府は外列國の經濟斷交と戦ひ、内國內の反革命と戦ひ、飢饉と戦ひ、農民の怠業と戦ひ、四苦八苦、孤立無援の戦ひを戦ひ抜いた。

かくの如くにして、ロシア革命は、帝國主義世界戦争の一產物であることには變りはないが戦争を一期として、資本主義が逆モーションを取り、崩壊過程を辿るべく餘儀なからしめられた所の民族自決の流れに沿つた國民主義的の革命とは何の係りもない。それにも拘らず、資本主義列國の強制的經濟封鎖は、その國內政策をして、必然的に、國民主義的或は民族主義的動向を取らしめた。即ちその革命の形態において、ロシア革命も亦一つの民族自決であり、國家主

社會主義的革命的である。

#### 4 國際主義と國民主義の對立

——國際の經濟的壓迫と國內の經濟的自給——

世界資本主義の逆モーション——國際聯盟の自由主義——民族自決の動向は、國際面において、三つの渦紋を描き出した。ブルジョアの自由主義的國際平和主義と、プロレタリアの社會主義的國際平和主義と、被壓迫民族即ち農業文明國民族の國民主義的或は民族主義的獨立に依る人種平等民族平等主義的國際平和主義である。そうして自由主義的國際平和主義と社會主義的國際平和主義とが鋭く對立しつゝある様に、民族主義的平和主義の上に立つ國際平和主義は自由主義的國際平和主義とは勿論社會主義的平和主義とも鋭く相對立する。

戰爭の結果、ブルジョア自由主義は、國際間に於いて、及び各民族の内部において、遺憾なくその持前の不誠實の馬脚を露し、人類に對するその指導的權威と信用とを失墜した。そして

先づ、自由主義に立つ國際聯盟の不誠實と欺瞞とを曝露し、政黨政治の腐敗と墮落と無能とをアクトの如く一蹴して、一國一黨の國民全體主義に成功したのは、社會主義共和國ソヴェート聯邦である。

ロシア革命は、自ら世界に對して、マルクス流共產主義第三インターナショナル革命と呼號して居るけれども、その國內の實質においては、國民全體主義的であり、或は民族平和主義的である。即ちそれは國民共產主義であり、或は國家社會主義である。それにも拘らず、國外に對して敢て國民主義を立てず、共產主義だけを強調するのは、資本主義列強の内面爆破を意圖するからであり、それが即ち第三インターナショナルの第三インターナショナル的特徴である。戦争に倦み疲れた資本主義列強のプロレタリアートは、國際共產黨の「帝國主義戦争絶對反對」のスローガンに手もなく共鳴した。そしてロシア共產黨のプロレタリア革命の成功は、イギリスの、ドイツの、フランスの、イタリーの、及びアメリカの、日本のプロレタリアートに勞働者が團結すれば、ブルジョアジーの支配を剋除ける事が出来るものだといふ、實例と確信を與へた。ブルジョアジーの政權何物ぞと彼等は起ち上つた。帝國主義戦争には反對だが、

社會主義の戰爭には賛成だ。何故なら、社會主義の戰爭を通してのみ、人類に永遠の平和が齎されるのだ。と、彼等は固く信じてゐるからだ。

イギリスも、ドイツも、フランスも、イタリアも、ブルジョアジーは皆共產黨の勢力の擴大強化に手を焼いた。ドイツは帝制を廢して共和制を布かなければならなくなつた。イタリアの自由主義的政黨政治の無能と腐敗と墮落とは、共產黨の跋扈に對して、施すべき術を知らず、共產黨のなすがまゝに任せた。ゼネストが各産業交通の勞働團體を風靡して、全市民は物質の缺乏と物價の騰貴に悩まれた。全イタリアを擧げて、生産の能率は減退し、輸入は益々超過を告げ、金はどしどし國外へ流出した。かてゝ加へて戰債の壓力があり、全國民は文字通りに塗炭の苦しみに喘いだ。イタリア亡國の危機は、ドイツのそれと異ならなかつた。

茲にイタリアの危急存亡を救ふべく起つたのがムツソリニのファツシヨである。イタリアを亡すものは利己本位のブルジョア自由主義による政黨政治と、國民的結合を階級的に分裂させる共產黨である。ファシスト黒襪衣黨は、斯様な亡國の現存勢力を叩き潰し、國民全體一致團結主義を以て、イタリアを救はなければならぬ。資本家も勞働者も官吏も軍人も農民も教師も

祖國を愛するの一念を以て、イタリア國家の名において、一切の私を去り、協力一致團結しなければならぬ。と叫びつゝ、黒襖衣黨は議會を占領し、共產黨を蹴散して、イタリアに一國一黨の國民内閣を構成し、ファツシヨ獨裁の強力政治を布く事に成功した。

國際共產黨はイタリアに共產主義革命を行はうとして、却つて國民的團結主義に立つファツシヨを成就させた。之れはロシア共產黨の革命が、實質において、國民的團結主義の革命に終つたと同一轍である。共產黨のなす所は徒に理想に走り、戦争の底流をなす民族的生存の要求といふ民族的の生活現實に對する認識を缺いてゐたからだ。

ムツソリニは一個の社會主義者であつた。社會主義者であつたムツソリニが、眞つ向ふから社會主義の主張に反對するものではない。彼れが社會主義第三インターナショナルの革命と對立するのは、前者が民族的生活の現實に對する認識把握の上に立つに對して、後者は民族生存の要求を無視し、國際間に於ける民族的對立の現實を敢て否定するからである。マルクスは單なる國際主義の上に立ち、ファツシヨは國民主義の上に立つ。世界の民族をしてマルクスの國際主義革命を可能ならしめず、却て國民主義或は民族主義革命を可能ならしむる所以のもの



は、國際間に於ける經濟的壓迫といふ民族的現實に依るのである。

國際間における經濟的壓迫は、資本階級或は勞働階級といふが如き、階級によつて利害を異にする性質のものではなく、國內の全民族に、國民生活の全體に及ぼす壓力である。故に此の壓力は階級團結の力をもつてして除去し得べくもない。民族全體、國民全體の民族的生存或は國民的生存の要求に依る民族的團結或は國民的團結の意志のみが、之を解決し得るのである。

ムツソリニのファツシヨ革命の成功は、國際間における經濟的壓迫の情勢に對する民族的團結の意志の把握に依るのである。ロシアにおいて、レーニンの共產主義革命が、國民的團結の形態を取らざるを得ざる様になつた必然性も亦國際關係における經濟的壓迫の現實的情勢に由るのである。

是の民族的團結主義革命情勢の最も切迫せるものは、ヨーロッパにおいては、ドイツ民族をもつてその尤なるものとする。敗戦の上に、ベルサイユ條約による損害賠償金六百六十億圓、それはヤング案によつて百八十億圓にまで負けられたとしても、之れはドイツ民族の上に特に

加重された經濟的壓力である。せめて此の經濟的壓力だけでも刎ね飛ばさなければ、資本家も労働者も農民も、ドイツ民族の浮ぶ瀬はないのである。之れヒットラーの民族社會主義がベルサイユ條約破棄をスローガンとすることによつて、ドイツ民族の意志の支持の上に、壓制的勢力を勝ち得つゝある所以である。

同様の理由から、インドにおいては、ガンデイが、印度民族に對するイギリス帝國主義の多年に亘る過重なる經濟的壓迫から、同胞民族を解放すべく、民族の意志において、インドの獨立自治を要求し、自產自制、無抵抗不服從非協同の運動を展開した。

このガンデイのスワラヂー運動は、その民族全體一致團結主義たる點において、ムツソリニヒットラーの革命運動とその軌を一にするけれども、その經濟的壓迫なるものが、インド本來の農業文明とは全然異質なる西洋近代の資本主義商工文明のそれであり、隨つて、民族の内部において、資本主義を包容しないといふ點で、資本主義に對する民族的革命運動として、最も純粹な、最も徹底的なものである。そしてガンデイのこの民族的非協同運動は實に徹底した資本主義の排撃否定である。インド民族が徹底的に自給經濟の道を立てさへすれば、それで、印度

度民族はイギリスの經濟的重壓から解放され、イギリスの資本主義を仆すことが出来るのである。民族の獨立自治、政治的自由の獲得、經濟的自給の確立、之れがスワラヂーの鮮やかなスローガンである。

インドの農民に寄生するイギリスの資本主義は、インド民族の自治自給の確立によつて、早速完全なる崩壊に立ち至らなければならない運命の下に在る。かくの如くにして、世界の農業民族に寄生する資本主義商工文明國は、世界の農業民族が、自治自給の旗幟を押し立て、アフガンもベルシャも、南洋もアフリカも、南米もオーストラヤも、一齊に起ち上るや否や没落を餘儀なくされる。

茲に資本主義文明國の深刻な不安と、行き詰り以上の最後の斷末魔的藻掻きとがある。そして此の不安と藻掻きとは、資本主義をして國內の經濟的自給をいかにすべきかの方向へと、ひた走りに向はせる。自由主義經濟の最後の段階である。國產獎勵、國產保護、國產愛用——そのために、出来るだけ關稅牆壁を高くすることである。國際經濟に於けるアンチ・インターナシヨナルである。カルテル、トラスト、産業合理化——それも追ひつかぬので、今度は統制經

濟、ブロック經濟——日本では日滿經濟ブロックの創成、支那國民政府の打倒日本帝國主義日貨排斥の緩和に忙しい。ヨーロッパではヨーロッパ合衆國が問題になる。

併しながら、是等の問題は要するに、自由主義の廢絶、帝國主義の没落、資本主義の崩壊を語る以外の何物でもない。そして農本文化の勝利を——民族協同體の建設を——。

かくして世界は、吾等の民族文化史觀を創造してゆく。

かくの如き世界の大勢が、今、日本に渦を卷いて押し寄せて來たのだ。世界も日本も、世の中は今や階級闘争の時ではなくなつた。各民族は舉つて民族の自給經濟を考へ、民族一團となつて、その自給經濟の確立に向つて一路邁進し、國力を擧げてかくの如き民族文化の建設を成就しなければならぬ情勢に迫られつゝある。そしてかくの如き民族文化の文化建設の目的貫徹の前には、戦争をも敢て辭せぬといふ形勢を馴致しつゝある。過般滿洲事變を機として、日本無産運動の陣營が階級闘争のイデオロギーを抛棄し、戦争反對の旗を卸し、所謂ファツシヨ的轉向を餘儀なくしたのも、實に此の事由に外ならぬのである。

萬國の民族、團結協同せよ！

## (二) 日本ファツシヨ運動の現状

### 1 日本ファツシヨの特徴

#### ——東洋流と西洋流と——

「日本ファツシヨ」とは、極めてジャーナリスティックな獨白性のない流行的名稱だが、事實において、日本の現在の國民主義運動は、イタリーやドイツや乃至はインドのそれに比較すると、甚だ微力であり、齒痒ゆいものである。世界のファツシヨ的氣流の大勢につれて、せいぜい流行かぶれした程度のものであるから、「日本ファツシヨ」といふ所が、丁度、日本國民主義運動なるものゝ客觀狀態を如實に現はしてゐる名辭であると云へるだらう。とにかく、今少し日本獨自な壓倒的勢力が日本の國民運動において盛り上るまで、姑らく此の名稱に依る事を許して貰はねばならぬ。

第一に、ファツシヨといふからには、國民的或は民族的團結の事であるが、民族的團結らしい組織的な團結的勢力といふものが、軍隊を措いて、民間のどこかにあるのか？ 有るといへば、どんぐりの背くらべの様な團體なら無数にある。併しそんなものをファツシヨだといつたら、ムツソリニに笑はれるだらう。苟もファツシヨといふからには、既成政黨の勢力を壓倒できないまでも、それに對抗出来る位の國民的團結の實體がなければならぬ。勿論、觀念的なファツシヨ、思想的ファツシヨは幾らでもあるだらう。しかし、ファツシヨは實行が先きで、觀念や理論はその實行の後から來るといふのがその持質である。國民的團結とはその國民的團結の事實をいふのだから、その事實がなければファツシヨとは云へない。まだ、日本の民間ファツシヨの現状の如き、離合集散、小黨分立、群雄割據の態爲では、いかに既成政黨が腐敗してゐても、墮落してゐるといつても、切り崩せないだらう。併し、斯う云つてゐる間にも一夜の中に英雄が躍び出し、この言を覆へさぬとも限らない。

イタリーのファツシヨには、ムツソリニといふ立派な中心人物があり、ドイツのナチスにもヒットラーといふれつきとした中心人物が居るのだが、日本のファツシヨは、一體、誰れが中

心人物なのか？ 中心人物といふものが、運動の中心にできなければ、國民的團結運動といふものは、恐らく永久に不成功に終るだらう。

現代日本の内外の諸情勢から推して考へれば、經濟的にはどの資本主義列國にも、決して退けは取らない窮迫ぶりである。自由主義經濟は全く行き詰りのどん底へ落ちてしまった。金匱は硬塞し、中小商工業は借金で悲鳴を挙げ、農村は納税能力を失つてしまった。剩へ人口過剩、食糧資源は缺乏である。此の難局を打開する力は、ブルジョア自由主義の上に立つ既成政黨ではなく、又かの社會主義一派の階級的團結の力でもなく、實に國民全體一致團結の力である事は、餘りにも明白な事實である。

然るに日本においては、ファツシヨの呼聲のみ徒らに高く、まだ國民的團結勢力の大結成を見るに至らない。之れはまだ國民が痛切にその必要を自覺せず、隨つて國民の要求がまだそこに達しない事を物語るのである。もつともつと日本民族は民族的に窮迫しなければならぬといふのか？ 否々窮迫は恐らくその絶頂に達してゐるといつてよからう。然るに、何故に日本民族は民族的團結を欲しないのか？ 之れは島國であつた關係上、國際關係において、民族的

迫害といふものを、イタリーの如く、ドイツの如く、或はインドの如く酷く受けた試しがないからであらうか？ 他民族と戦へば連戦連捷、未だ曾て他民族と國際間に事を構へて、他民族から民族的凌辱を受けた試しのない日本民族に取つては、戦へば何時でもきつと勝てるといふ安心があるからだらうか？ 血盟暗殺團、農民決死隊、五・一五事件、銀行ギャング等々の白色、赤色のテロリズムが横行しても、未だ國民は民族的に眼を覺まさぬのである。

いづれにしても、ファツショの運動は、民族興亡の瀬戸際に立つて、外、他民族の迫害急にして、民族の自力に訴ふるの外、生くるに途なきどたん場に起るものである。そして日本民族は、今、殆んどそのどたん場まで來てゐるのである。日本は英米の經濟封鎖或はそれとの經濟斷交を覺悟しなければならぬ所まで來た。隣邦國民政府及び南方一圓の日貨排斥は、明かに英米の日本に對する間接的經濟封鎖である。リットン報告亦然りだ。

日本民族は民族的生存の必要から、滿蒙、支那、南洋、南米、濠洲等への進出を絶對的に必要條件とする。それは帝國主義的侵略精神からではなく、又、領土擴張的植民政策からでもなく、民族的生存の必要といふ現實的要求からである。然るに日本の經濟に對する實際上の支



配的勢力は資本主義であり、自由主義であり、帝國主義である。茲に日本の國際關係におけるデレムマがあるのだ。そして茲に又、日本においてファツシヨ運動が起らねばならぬ現實的理由があるのだ。日本民族の滿蒙支那への進出は、資本主義的、自由主義的、乃至帝國主義的要求からであつてはならぬ。それは全日本民族の民族的要求の聲でなければならぬ。

昨年滿洲事變起るや、日本無產運動の闘士達は、その階級的イデオロギーを屏息させ、帝國主義戦争絶對反對の一枚看板を外したることによつて、その指導精神のファツシヨ的轉向を餘儀なくして、陣營内に大動搖を來した。何故であつたか？——それはこの滿洲事變における日支係争は、日本民族が支那民族を壓迫する所の所謂帝國主義戦争ではなく、寧ろ支那民族によつて日本民族が壓迫される所の民族的生存の必要上、止むに止まれぬ戦争だつたからである。そして勿論支那の背後には英米露等の日本民族に對する壓迫があつたのだ。この民族對民族の對立的現實、この現實に當面しては、階級的イデオロギーは、全然その指導能力を抛棄しなければならなかつたのだ。

無產運動のファツシヨ的轉向——滿洲事變を契機として、無產運動の陣營が動搖し決裂し、

社民黨、勞大黨の幹部の大部分が雪崩れを打つて、所謂ファツシヨへの方向轉換を決定したので、ジャーナリズムはそれを面白半分に嗤し立てた。それによつて、今までジャーナリズムから無視されてたる所の（そして又實際、無視されるだけの價值しか持たなかつた所の）國粹主義日本主義、愛國主義の運動が、俄かに表面化した。

それまでも、勿論、共產主義からファツシヨと呼ばれ、右翼と呼ばれ、或は反動と呼ばれる所の所謂愛國運動は、無數に行はれ來つたのである。併し、是等の滿洲事變以前に既存した愛國運動と、滿洲事變を契機として、その前後に起つた愛國運動と、同じく愛國運動とはいへ自らその發生の起因を異にするものがある。前者は内部的事由に因り、後者は外部的事由をその動機とする。そして内部的事由から起つた所の愛國運動の重大な特徴を爲すものは、その思想的根據即ちその指導精神が神道、儒教、佛教等、概して東洋固有の傳統精神にある事である之れに對して外部的事由を動機とする所の愛國運動が持つ著しい特質は、その指導精神の基調が、矢張り外部から押し寄せて來た所の西洋思想にある事である。

混沌として中樞の無い日本現在の愛國運動も、よく整理してみれば、結局、此の二種類の組

合せから成り立つてゐると思ふ。以下此の分類法に基づいて、所謂日本ファツシヨ運動の現狀を解説し、且つ批判を加へる事にしよう。東洋的立場を取るものと、西洋的立場を取るものと併し、勿論、かう區別したからとて、東洋の中に西洋が交錯し、西洋の中に東洋の錯綜しつゝある事實は如何ともする事はできぬが、運動の重心を東洋に置くものと、西洋に置くものとを區別する事は、日本の國民運動の大同團結或はその共同戦線上、根本的な重要事項であると考えられる。

二十世紀における文明のコペルニクスの轉回は、文明の中心が西洋から東洋へと移動する事だ。吾等は此の文明轉同期に立つてゐる。

## 2 東洋的立場を取るもの

### 一 玄洋社、浪人會、黑龍會、生産黨

東洋的立場を取る愛國團體の特徵は、國粹的であり、封建的である事である。その國粹的であり、封建的である所に、實はファツシヨ的要素を多分に持つてゐるのだが、之れをファツシ

ヨと呼ぶのは、是等愛國團體の與らざる所である。それはマルクス・イデオロギーやジャーナリズムが、外部から勝手にくつつけた名稱である。

是等國粹主義團體の多くは固よりアンチ・モダンであり、アンチ・ジャーナリスティックな存在である。寧ろそれを以て誇りとする所の所謂時代錯誤的或は現代の超常識的存在である。隨つて近代文明の洗禮を受けず、時代から取り残された分子も亦多い。近代文明を通過しないから、近代文明の中に居りながら近代文明が解らず、近代文明が解らないから、現代を率ゐて立つ事が出来ないのではないかとも思はれる。新しいものを見ると、事毎に癢に觸り、之れを憎惡し、之れを排撃したがる尊皇攘夷の傳統が濃厚である。近代文明の進展する動向に對して常に消極否定反動の態度を取りたがる。それが下手にすると、自ら新時代を建設創造しようとする努力を抛はすして、時代の尻つほへくつついて行き、徒らに之れに漫罵を浴せかけて痛快がる様なことになる。是等の團體から、一つも新時代に對する權威ある建設理論といふものが出なかつたのも、一つには斯うした傾向にも由るだらう。たまに出たにしても、誰れもそれ權に威を感じて傾聴しようとしなかつた。時代後れの產物として、多くは顧みられなかつた。

之れは東洋的立場を取る愛國團體に共通する弊害或は缺欠を並べたのだが、そこには又、舊弊であり保守的であるだけ、何か一つ神様らしい動かないものを持つてゐる事は、事實であるそれが天皇であるにもせよ、皇室であるにもせよ、とにかく一つの動かないものを持ち、此の動かない力に據つて生きて行かうとする。此處が又、この東洋的ファツシヨ團體の持つファツシヨ的美點である。何か動かない一つの偉大な中心人物が現はれさへすれば、彼等はそれに絶對服従盲目的服従をして踵いて行く、その點是等の國粹團體は、一種の宗教的存在であると云ひ得る。それは勿論、近代的なデモクラティックな様式からいへば舊式な封建的な親分子分の關係で、一つの團體が統一されるといふ形態を取る様になる。併し、それだから、そんな舊式な形態は、時代後れで役に立たないと云ひ切つてしまふことが、今日ではできなくなつた。

近代文明の本質たるデモクラシーは、今や完全に行き詰つてしまつた。その自由主の政治個人主義の産業經濟は、今や全く破産狀態である。そして世界は今、この近代文明崩壊過程に瀕するファツシヨ的氣流の中から、新しい文明形態を創造しなければならぬ必要に迫られつゝある。そして此のファツシヨ的創造の必要は、厭應なしに、吾々をして民族の歴史を見直さ

せずには措かない。時代が逆戻りを始めたといふのではない。文明の中心が西洋から東洋へと移動し始めたことによつて、新しい時代は、民族の歴史の中から生れ出ようとしてゐるのである。當然、親分子分の封建的形態が民族的團結の形態において、再吟味されねばならなくなつて來たのである。それはムツソリニと黒襪衣黨、ヒットラーと鼠の分隊の關係を意味するのである。

東洋的な立場を取る國粹的愛國團體と云つたら、日本では何といつても、その總本山本家本元は頭山滿翁の玄洋社である。その末社末寺と稱すべきものは天下到る所に存在するので、一々枚舉に遑がない。先づ玄洋社の別働隊として浪人會といふのがあるが、之れは名の示す通り天下の浪人國士の會であつて、組織を持つた活動團體ではない。その中心人物頭山翁の事を思ふ者は誰れでも「いま少し若かつたらなあ」と嘆息を洩らすを常とする。「何をいふにも、今正面切つて立ち上るには年を取りすぎてゐる」

頭山翁は誰れかど批評した様に、嘗て日本の「眠れる猛虎」的存在であつた。今も尚、その眠れる猛虎的存在である事に變りはないが、此の猛虎が、その眠から覺めて起ち上る「時」が

まだ來ないのだらう。國情は切迫し、猛虎の起ち上らん事の一日も早きを要望してゐる。

頭山翁が敢て起つを欲しなければ、若き頭山翁が起つて、浪人會を組織づけなければならぬ。浪人會のつはものは、頭山翁の爲めには何時でも一命を抛げ出す用意はあるのだ。此の決死の浪人を組織づけるだけの理論と實行力を持った者が出さうなものだ。人のやる事なら、彼れ此れと勝手な批評はするものゝ、さて、それなら自分達でやるかといふに、誰れもやり切る者がない。

黒龍會の内田良平翁は滿洲浪人支那浪人の親玉として、頭山翁と並び稱せられる一世の偉人國士だが、好漢惜むらくは〇〇〇を棄て得ない。その親分乾分の意氣と情味とは拘すべきものがあるが、黒龍會は時代の要求に應じて再組織されねばならぬ。そこで大日本生産黨が組織されたが、之れは黒龍會そのものが再組織されたといふよりも、日本國民黨と黒龍會とが合併したのである。新しい理論が黒龍會から生れたのではなく、むしろ新しい理論が黒龍會へ持ち込まれた形である。そこで黒龍會は舊態依然たる黒龍會として残つた。

黒龍會は分り易く云へば一個の〇〇〇、新しい言葉を借りて云ひ直せば一個の〇〇〇の〇〇

〇〇である。〇〇〇〇である事が不名譽な事であるといふのではない。〇〇〇〇は新時代の〇〇である。その〇〇〇〇的存在である事が、黒龍會をして、日本主義行動隊として、頗るチャーミングな存在たらしめるのである。東洋流の〇〇〇〇は、義の爲め、道の爲め、常住に捨身の決死的行動を覺悟する所の社會的義人、國家的烈士の團體でなければならぬ。義の爲め、道の爲めに、世間的汚名を浴せられても、それを平然として甘受し、又、卓然としてそれを芻ね返すだけの信念を、その行動の上に持たねばならぬ。

暴力團の存在理由は、固よりその理論に在るのではなく、その實行に在り、信念に在るのである。理論は往々にしてかくの如き行動の信念を鈍らせ、或は去勢する所の邪魔物になる。ムツソリニの黒襖衣黨、ヒツトラーのナチス嵐の分隊、固より一個の暴力團である。黒龍會の再組織はかくの如き意味において爲さるべきであつた。黒龍會には倒閣運動といふ歴史的使命があつたのだ。それはたとへ、或時は政友會内閣を倒すことによつて、民政黨の院外團とされ、或時は民政黨内閣を倒すことによつて、政友會の院外團と呼ばれたにしても、打倒政黨政治は一國一黨の日本の國體から見て、間違ひのない一本道の本筋であるに相違ないのだ。だから、



もつと徹底して倒閣運動に一路邁進する事に、歴史的意義があるのだ。國民黨と合流して、生産黨を組織する事は好い。併し、さうした事によつて、黒龍會の歴史的使命を去勢する事に何の歴史的意義があるか？ 黒龍會がもうさうした歴史的使命を果すべき任務に堪へなくなつた團體であるならば、何故に、涙を吞んでも、かくの如き無用な團體を解消して、新たに組織された生産黨をして、その任務を遂行せしめようとしなかつたのか？ 茲にファツシヨ的實行團體としての理論の不透明と行動の曖昧不徹底がある。

生産黨に對して敢てかくの如き苦言を呈する所以は、生産黨が日本の國粹的浪人團體を統一して、その一大結成を遂ぐる所に、蓋し、その歴史的使命因縁があると思ふからである。さうしなくとも、世間では、生産黨といへば、その過去の運動上の古い因縁關係から、一個の〇〇〇と思つてゐる。勿論、世間からさう思はれてゐるから、さうならなければならないといふ事はないが、世間から〇〇〇と呼ばれたから恥ぢなければならぬといふ理由はどこにもない。〇〇〇と呼ばれて恥ぢなければならぬ場合は、それが私利私慾の上に立つ時だけである。皇軍にしてからが、暴力團と呼ぶなら、立派な〇〇〇である。然るに皇軍の尊嚴なる所以は、民族

の正を養はんが爲めに、不義非道の民族を膺懲皇化する所に至る。同一の精神の上に立つ民間の暴力團は、即ち民族の危急存亡の秋に際して、命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬといふ義人烈士の團體である。かういふ義人烈士の團結の力に俟たなければ、此の國難非常時が打開されるものではない。

斯うした意味から、一束に統一組織化されるべき團體は大民俱樂部、大正赤心團、皇道義會、縱横俱樂部、大日本國粹會、大和民勞會、新日本協會、赤化防止團、滿蒙義團、秋水會、大統社、大日本正義團、大同聯盟、興國青年黨、神農會、明德會、大日本國粹會、大亞義盟、七生義團、愛國社、等であらう。

是等の團體の大部分のものは、世間周知の通り、既成政黨若くは政黨人の支持應援を得て存在する因縁關係から、直接に或は間接に、公的に或は個人的に、何等かの意味で、既成政黨の院外團的勢力たるに過ぎぬものだが、それは皆なが個々に小さく孤立して居り、大勢力を成すに至らぬからである。もし一度び大義の下に大勢力として結成されるならば、何時でも資本主義の走狗は廢め、打倒政黨政治の義軍たり得るであらう。

かくの如き大勢力が、大義の下に結成され、然る後、反資本主義・打倒政黨の烽火を擧げて  
も決して遅くはない。理論的に行くと、是れまでの様に、社會主義や共產主義の叩き潰しばかり  
やつて、資本主義の打倒には一言も及ばないといふ事は、いかに資本家から運動資金を捲き  
上げる手段方便とはいへ、手の中が見え透いてゐて、許されない。資本主義も共產主義も、文  
明の性質から見れば、日本國體に對しては同罪である。資本主義だけはそのまゝにして置いて  
共產主義だけを倒してしまへば、日本國體は安全だなどいふ片手落ちな理論の不透明は許され  
ない。

黒龍會が生産黨になつてから、いやに理窟つほくなり、それだけ實際の行動が鈍くなつた様  
に考へられるのは、運動の實際問題として考へられる事柄である。たとへ理論上にはどんな矛  
盾があらうとも、力と信念とで押して行く者が、實際においては捷目がある。生産黨を組織す  
る様になつてから、黒龍會はたしかに理論的には一飛躍を遂げたであらう。資本主義を肯定す  
る様な議論も巾が利かなくなつたであらうし、政黨との腐れ縁も断たなければならなくなつた  
であらう。しかし、さうなると、運動支持の基礎をどこに置くかが問題である。大衆を基礎に

組織運動を展開しようとするならば、もつと整然たる理論と組織とを持たねばならず、文化運動で行かうとするならば、東洋のことは勿論、西洋の事ももつとウンと勉強する必要がある。といつて〇〇も今更人聞きがよくないといふ風にいかにも新時代のゼントルマンらしく、乙にすましてしまつては、中途半端に出来上つてしまつて、何もする仕事がなくなつてしまふ。最近、生産黨關係の人々によつて滿蒙義塾と云ふのが、つくられた由である。それも時節柄好い思ひつきにはちがひないが、一體それは滿蒙への移民を養成しようといふのか、それとも滿蒙への闘士を養成しようといふのか、いづれにしても滿洲國が成立してみれば、是れまでの様な滿洲浪人の存在は不必要になつて來た。滿洲浪人の鑄直しをやる必要は大いにある。浪人の弱點は、情誼の交合ひだけで、社會的に何の組織をも持たない所に在る。之れからの滿洲浪人は、挺でも働かない様な鋼鐵的組織と訓練との下に行動を進めて行くのでなかつたら何の仕事も出来やしないし、又何の役にも立ちはしない。併し、本質的には、浪人こそ社會の活力素でなければならぬ。そしてこの混亂非常時こそ浪人の最も活躍すべきチャンスであり、縦横の活動舞臺でなければならぬ。ムツソリニのファツシヨ黒襪衣黨は、實に失業者浪人群の

組織化され強力化された政治的一機構である。もし滿蒙義塾なるものが、かくの如き意圖の下に經營されるものであるならば、その歴史的使命たるや極めて重且大なるものありと謂ふべきである。

## 二 國本社、行地社、神武會、日協

國本社の中心人物平沼騏一郎男には、今にも政權がころがり込んで來さうな情勢が、所謂非常時の一廊において讓成されつゝあるので、國本社なるものゝ存在が、始めて社會に知れる様になつた。隠然勢力を持つてゐて、その本部は御殿の様な宏莊なものだといふことである。併し、その會員の構成内容を見ると、役人とか軍人とかいふ者が多い様だ。それも下級ではなく上級の者が多い様だ。

そこで、概して云つてみると、斯様な社會の上級勢力といふものは、生活が安定してゐるから、自然、その氣分が現狀維持に傾き、支配階級の味方をしたがるから、歴史を通じて、永久的隠然勢力として終り、新興勢力にはなり得ない。従つて資本主義支配下の現代では、勢ひ

資本主義擁護をやらざるを得なくなる。ファツシヨ的な果敢性や積極性が期待されない。金は相當に有るだらうから、相當な人員が動員される事は受合ひだが、それは只、金の力で人が動くといふだけで、政黨が投票を買収するのと大差はない。新興なる何物もそれによつて腐らされはしないだらう。

そこへ行くと、元の行地社即ち今の神武會の方が、ファツシヨ的空氣が濃厚である。そのファツシヨ的であるといふ意味は、學生、軍人、教員、會社員等、社會の中間層に多くの會員を擁してゐるといふ點である。

資本主義没落期の最も著しい特徴は、農村の窮乏と勞働者の失業とを除いては、社會の中間層の不安動搖である。中間層は是れまで社會の中堅として、資本主義社會の秩序を最も正しく維持し、所謂堅實なる生活の歩みを續けて來た。然るに、資本主義崩壊期に當面した中間層は、その生活の安定なるものが、絶對に不確實となつた。知織階級は生産過剰で、専門學校大學の學生は卒業しても就くに職なく、徒らに働き盛りをゴロ／＼と寄食して、浪人生活を送らなければならなくなつた。軍人もその中間層は、國際情勢の切迫から戦争氣分に驅り立てられ

しもブルジョアジの現狀擁護の爲めに、名もなき戦ひにのぞんで身命を抛つことの無意義なるを悟り、その職に安んずることができなくなつた。教員も農村の教員などは、村からは月給が取れなくなつた。會社員なども、會社が打ち續く事業の不振で、何時に成になるか分らなくなつた。中小産業は大會社に収益を吸ひ取られて、缺損又缺損、借金又借金、そして借金も出なくなり、首が廻らなくなつた。

神武會の會員は斯うした社會の全く新たな不安動搖の嵐の中に身を置いて居る中間層がその大部分である。彼等は今までの様に紳士的な涼しい顔をして取りすましては居れなくなつてゐる。何とかして一日も早く此の不安極まりない現狀を打開して、新しい基礎の上に、生活の安定を確立しなければならぬと喘いでゐる。彼等には現狀維持は無意義であり、且つ絶望的である。故に、彼等は意識的に社會革命に参加することを欲するのである。即ち彼等は新興勢力たり得るのである。

斯うなると、問題はそのイデオロギーに係つて来る。神武會綱領に曰く――

一、日本建國の精神、日本國家の本質及び國民的理想を闡明し、本末主客を顛倒せる形式

的教育の弊風を改革し、眞個の日本國民を育成すべき皇國的教育組織の實現を期す。

一、天皇親政の本義に則り、黨利を主として國策を從とする政黨政治の陋習を打破し、億兆心を一にして天業を四海に恢弘すべき皇國的政治組織の實現を期す。

一、一君萬民の國風に基き、私利を主として民福を從とする資本主義經濟の搾取を排除し、全民の生活を安定せしむべき皇國の經濟組織の實現を期す。

之れを要約すると、「日本國體原理に基き資本主義制度を改革する」といふ事になる。即ちその立場は皇國的國家主義であり、或は皇國的民族主義である。併し、「國民的理想を闡明し」といひ、「眞個の日本國民を育成す」といふ所からいへば、民族主義よりも國民主義の方を取りたいのかも知れぬ。

それでは民族主義と國民主義と、どう違ふのかといふ問題である。

民族主義といへば、民族は互ひにその民族の獨立を尊重し、民族の文化を敬愛しなければならぬといふ前提の上に立つのである。すると茲に、日本の場合について考へれば、直ぐに問題になるのは、それならば日本は、朝鮮民族の獨立をいかにするかといふ事である。



民族主義で行けば、當然、朝鮮民族の獨立を主張し或は保護しなければならぬ。所が、朝鮮民族は日本民族の旗の下に併合されてしまつた。民族主義は此の點をどう解釋するか？ 之れが日本民族主義の根本問題である。固より、朝鮮民族が日本民族の政治的經濟的統制支配に合流する事を希望し、且つそれに悦服してゐれば問題は起らない。所謂民族自決の原則にも叶ふわけである。

朝鮮民族獨立の問題に關しては、吾々は今の場合、朝鮮民族が民族自決の建前から、日本民族に合流することを希望し、日本民族の政治的經濟的統制支配の下に悦服したものと解釋するより外はない。もし朝鮮民族が、日本民族の政治的經濟的統制支配から獨立することを希望するならば、日本民族主義は進んで滿洲國の獨立を援助し、且つそれに保護を與へた様に、進んで之れを援助し、且つ保護を與へることを吝まないものである。

此の意味で、日本民族主義の建前は明瞭である。所が、日本國民主義は、この日本民族主義の明瞭さをボカしてゐる憾みがある。民族主義は帝國主義とは明瞭に相對立する。然るに國民主義は帝國主義ともさう大して抵觸するものではないといふ様な曖昧さがある。例へば、朝鮮

の民族獨立の問題にしても、成る程民族としては別個に考へられるにしても、朝鮮民族は已に日本國民の中に包容されてしまつたのだから、之れには日本國民としての待遇を與へさへすれば問題はないではないかといふ風なゴマカシが利く、併し、さういふ建前なら、その國民主義は要するに民族併呑主義であり、即ち、帝國主義である。そして國民主義が帝國主義である限り、資本主義は決して之れと牴觸しない。即ち、その國民主義は、資本主義改革の原則にはならぬのである。蓋し帝國主義は資本主義の國際的發展形態であるからである。

民族主義はかくの如き帝國主義的國民主義を根本的に精算し、資本主義乃至帝國主義への革命の原則として出發する。そして各民族は互譲互助聯合協同體において結合する事を國際關係の原則とする。

神武會の綱領はかくの如き民族意識の明瞭さを缺いてゐる。随つて、さういふ不透明な意識で、資本主義が改革されようとは思へない。日本建國の精神とか、天皇親政の本義とか、一君萬民の國風とか、至極尤も千萬な事を並べ立てゝは居るけれども、土臺、それが明瞭に解つて居らぬから、かくの如き觀念の誤謬に陷る様になるのである。

神武天皇御即位の御詔勅に「六合を兼ね、都を開き、八紘を掩ふて宇となす亦可ならずや」とあるのを讀み違へて、それを現代の帝國主義とゴツチャにしてしまふからいけないのだ。六合を兼ね、八紘を掩ふとは、大慈悲の皇道を以て、廣く人類を救済するといふ意味である。即ち仁愛を本とする皇威の下、まづろはぬ民族をしてまづろひあらしめ、民族をして各々その所において安堵を得しめ、又協同の道を得しめるといふ大御心の表現である。そこには帝國主義的な利己本位な私利私慾な何物も混入しては居らぬのだ。そしてそれが純正なる日本建國の精神、日本本有の民族主義であるのだ。天皇親政の本義もそれであるし、一君萬民の國風といふのもそれであるのだ。

それはそれでいゝとして、神武會の中心人物大川周明氏が、その機關紙「月刊日本」において「神武會は政黨に非ず、國民全體の力を以て現存勢力を倒し、國民全體の力を以て建設に當らんとする目的の下に、國民を糾合動員せんとするものであり、他山の石としてレーニン、ムツソリニ、ヒットラーに範を取る」と云つてゐる所は、いかにもファツシヨ的である。國民運動的である。が、その現存勢力なるものを、國民全體の力で倒すにしても、倒し方がある。又、

國民全體の力で建設するにしても、建設の仕方がある。その破壊と建設の過程、手段、方法において、皇國的教育組織といひ、皇國的政治組織といひ、又、皇國の經濟組織といふからにはそこには自ら、皇國のなる獨自な何物かとなければならぬ。それを大川會頭の言を借りていへば、「革新の範圍をロシアの右傾、ドイツの左傾に標準する」といふのだが、之れでは何の事やら要領を得ない。頭には烏帽子を被らせ胴體には洋服を纏はせればいゝといふのか？

國民全體の力を以て、現存勢力を倒すといふのはいゝ。併し「現存勢力」といふ言葉は、觀念體系の明晰を缺いてゐる。此の場合には「現存勢力」といふべきではなく「中間勢力」といふべきである。何となれば、皇國的には、天皇と農民及び労働者との中間に位する非皇國的な支配的勢力、或は反皇國的な指導的勢力を、皇國の國民全體の力で倒すといふ形態を取らねばならぬからである。つまり、皇國の國民全體が力を協せて、何を倒さなければならぬかといへば、天皇農民労働者との中間に介在する所の非皇國的な惡指導的勢力を倒すのである。さういふイデオロギーにならなければ、皇國の社會改革戰線において、皇國獨自の破壊戰術が湧き出て來ない。即ち皇國意識に目覺めた所の革命的國民軍の戰術は、上、天皇仁慈の大御心

と、下農民労働者の忠勤正義との壓力を以て、中間の非皇國的惡指導勢力を板挟みに挟み撃つ事である。之れを皇國的社會戰における皇國的挾撃主義の戰術といふのである。之れで行けば、中間の非皇國的惡指導勢力はベチヤンコに叩き潰せるのである。何を苦しんで、ロシアの右とか、ドイツの左とかいふものを手本とする必要があかるか。

惟ふに、大川氏がロシアの右とか、ドイツの左とかいふのは、社會主義階級闘争の上に立つ無産運動陣營の國家社會主義的轉向を、皇國的國民運動の陣營内に抱き込まうといふ戰術であらう。現に、神武會は、國家社會主義なら、社會主義亦大いに可なりといふ意向で、社民黨の國家社會主義轉向派の中心人物赤松克麿氏と握手し、提携もする様になつた。そして國家社會主義運動機關紙「日本社會主義」(後に「國家社會主義」と改題)には、神武會系の闘士及び赤松氏並びに轉向派闘士が筆陣を揃へて立つたのである。

だから、大川氏の所謂「ロシアの右、ドイツの左」は、さういふ意味での戰術としてみれば一應は成功したものと云はなければなるまい。併し、大川氏にはその先きが無いのである。つまり、それからの皇國的な獨自主建設案といふものがないのである。その「ロシアの右、ドイツ

の左」なる提言が、大川氏の建設内容であるとするならば、それは獨り大川氏だけが救はれないだけではなく、日本國民が救はれない。只何でも破壊さへすればいいのだ。建設はロシアの右、ドイツの左に任せるでは、折角の「皇國的」國民運動が宙に迷つてしまふ。轉向派にしてからが、どうやつて好いのか勝手が分らず、持合せの外國仕入れの國家社會主義（大川氏の所謂ロシアの右といふやつ）か、國民社會主義（大川氏の所謂ドイツの左といふやつ）で間に合せるより外には、手をつけてみようがないといふ事になる。大川氏も自分に格別の案がない以上それで好いとして置くより外に仕方がないのである。

その代り、破壊の方だけは、自分でやると公言したからには、屹度やつてみせるといふわけで、成程、本當に破壊行動らしい行動を實行した。その點は、善かれ惡かれ、流石に天下の豪傑大川周明である。因に、大川氏と軍部との關係、愛郷塾、農民決死隊、大雄峯會（笠木良明氏や、口田康信氏等）との思想上の或は運動上の系統については、事、豫審中に屬するから茲には害けない。

行地社以來、神武會の後を預つてゐる狩野敏氏や生産黨の津久井龍雄氏等が、打倒資本主義

打倒共産主義、打倒政黨政治を鮮かに標榜し、日本社會主義を建前として、全日本愛國者共同闘争協議會（略稱「日協」）なるものを組織した事がある。その機關紙「興民新聞」は、最近姿を没してしまつたがかうした同一系統の運動團體の戰線統一の機關を持つ事は、誰れも熱望しながら、それが不成功に終るのは、客觀化された運動の觀念體系の確立がないのと、それを活かし切る所の中心人物がないからである。大川周明も好いが、好漢情むらくは下情に通ぜず組織に暗い。故に運動が地に着かず、大衆の、農民の、労働者の實生活から浮き上つてしまつてゐる。神武會もいま一息といふ所である。上の方の事や軍部の事などは、皇道といふものさへ、シツカリ掴んで踐み違へさへしなかつたら文句はないのだ。それよりも、農民運動や労働運動といふものに對して、もつと熱意を持ち、正しい理解を持たなければウソだ。それらに對して正しい理解を持つだけでは足りない。夫子自ら、農民運動の、或は労働運動の先頭に立つだけの誠がなければダメだ。それでなければ國民運動ではない。

それをやらないのは、大川氏の場合では、誠が無いといふよりも、皇國的國民運動においてその大衆的組織の點で、確乎たる成算が無いのである。そしてそれは固より大川氏一人の責任

ではない。大川氏を中心として補佐する者の責任でもある。それを等閑に附するは、大川氏をして大を成さしむる所以でない。

### 3 西洋的立場を取るもの

#### 一 國家社會主義的なもの

——北一輝氏の「日本改造法案大綱」を中心に——

猶存社系の巨頭北一輝氏は、急進的國家主義團體の一方の中心人物である。猶存社といつても分らない讀者があるかも知れないから、先づその大體の輪廓を説明することにする。

話は、大正八年頃の事である。當時北一輝氏は支那革命軍の總參謀として、上海に在つて活躍してゐた。大川周明氏は「支那革命史」を讀んで北氏に共鳴し、支那よりも日本の方が危いから歸れと迎ひに行つたものである。



それから此の兩雄は、全亞細亞七億の有色民族を、白色民族の迫害から防衛すべき革命的大帝國を建設するため、先づ日本の腐りかけた魂をどん底から鍛へ直して、日本自らの革命に當らう、といふ所で意見一致し、北氏が同志の岩田富美夫氏（大化會）や清水行之助氏（大行社）や辰川靜夫氏（白狼會）等を作つて上海から歸ると、大川、北、滿川龜太郎（一新社）の三氏が中心になり、茲に初めて日本主義的革命團體が生れた。それが猶存社である。

笠木良明、安岡正篤（金雞學院）、綾川武治、鹿子木員信、岩田富美夫、清水行之助、松延繁次、島野三郎氏等、少壯有爲の革命家が集まつた。

北一輝氏が上海の病室で書いたものだといふ「日本改造法案」が、此の時初めて謄寫に附され、同志の間に配布された。すなはちそれが猶存社同人の中心操典となつたのである。

それには端的に日本改造の過程、手段、方法及び建設行程が示されてある。その大意は學國一人の非議なき國論を定める事、全日本國民の大同團結、亞細亞聯盟、世界聯邦、四海同胞皆是佛子の天道宣布、民主的國家社會主義に立つ急進改造と王道日本の世界征服等である。

此の北氏の日本改造案は、西洋の近代個人主義をそのまゝ日本に生かさうといふ試みであつ

て、日本主義の立場から個人主義を精算しようとするものではない。即ち北氏の日本主義（假りに北氏を日本主義者であるとして）は近代個人主義と對立しないばかりでなく、寧ろ個人主義の上に立つものである。個人の集合體が社會であり、國家であると考へる所は、全く近代西洋文明流である。民主主義も社會主義も近代西洋流の思想は、皆個人主義を基調とするものである。

そこで北氏の天皇觀は、やはり民主的に「國民の天皇」といふことになる。茲に北氏の國體に對する根本的な誤謬或は認識不足がある。之れは勿論、軽い意味で、例へば子供が親父をつかまへて「僕の父うさん」といふ意味で呼ぶのだつたら問題はない。が併し、事柄も國體の根本に關し、且つ國法を創建しようとする者の態度としては許されない。國民を主にし天皇を従とする態度は不謹慎であると謂はなければならぬ。尠くとも、國體の何ものであるか、天皇の何ものにおはしますかに就いて、哲學的考察と認識とを缺いだ心なき者の所業であると謂はねばならぬ。

日本國體に關する限り、吾等國民は「天皇の赤子」である。それは天皇が吾等國民の生命の

大本たる事を意味する。何故に 天皇が吾等國民の生命の大本であるかといふことは、建國以來三十年、今日まで傳統した日本民族の歴史が之れを証明する。此の日本民族の歴史こそは、實に日本民族の民族的生命の流れである。この日本民族の民族的生命の流れを一貫した日本民族の理想においては、未だ嘗て民を主にし、天皇を従とすることを許した試しがないのである。そこには嚴として犯すべからざる哲學が、生命觀が、世界觀があるのである。その森嚴極りなき日本民族の哲學が萬國に比類なき「國體の精華」を日本民族の文化史上に織り成してゐるのである。此の日本民族の文化史觀を把握せず、隨つてその民族史觀の上に立たざる一切の國政、國法の改革乃至改造は、單に意義を爲さぬばかりではなく、恐らくは改惡に終り、改善さへも期待し得ない。況んや革命をや。

是の理を善く辨へたならば「國民の天皇」などいふ民主的改造法案はどこからも湧き出さぬのである。吾々の此の生命は「天皇から與へられたもの」であるといふ觀念が、先づ法案の基調とならねばならぬ。即ち吾々の生命は「天皇からの生命」即ち吾等は「天皇の國民」であり「天皇の國民」たる事が、先づ法案の原則とならねばならぬ。それは決して國民を 天皇の奴

隷として結び付けようといふのではない。生命の尊族を尊族とし、卑族を卑族とする極めて自然なる生命の流れを法の本體とする所の家族主義的見解の發露に外ならぬ。

日本國體の萬國に卓越して優良なる所以は、歐米その他の民主的文明國の如く、國家を以て單なる一政治機構と見ず、實に家族的生活體の延長擴大形態即ち民族的團結の一大家族形態と觀する所にある。故に天皇は單なる政治的中心であるだけではなく、實に此の民族の一大家族の家長にましますのである。それは國民の選擇意志を超越して、國民の上に先天的に運命づけられた宿命的事實である。

北氏の説明によれば「此時（明治維新）ヨリノ天皇ハ純然タル政治的中心ノ意義ヲ有シ、此國民運動ノ指揮者タリシ以來現代民主國ノ總代表トシテ國家ヲ代表スル者ナリ。即チ維新革命以來ノ日本ハ天皇ヲ政治的中心トシタル近代的民主國ナリ。何ゾ我ニ乏シキ者ナルカノ如ク彼ノ『デモクラシー』ノ直譯輸入ノ要アラシヤ。」といふのである。

これほど不透明不謹慎な説明はない。抑も明治維新の目的は、日本をして近代民主國たらしむるにあつたのではない。それは中葉武家政治が行はれてから、皇政が遮斷される様な政治形

態になつてしまつたので、尊皇志士が驟起して、日本を皇政の古へに復さうといふ目的で行はれたものである。それを後繼者等が歐米流の民主政治を模倣して、日本を近代的民主政治の國にしてしまつたのは、當初の維新の精神からすれば、成功ではなくして、全く失敗に終つたものであると謂はねばならぬ。なればこそ、吾等は今日、明治維新の初志を繼承し、天皇政治を確立すべく、昭和維新の斷行を絶叫せねばならぬのである。北氏の説明の如くんば、明治維新の精神を錯誤し、昭和維新の目的を歪曲するものである。

日本の國體において「民主」の許さるゝ場合は唯一つしかない。それは天皇の仁慈の大御心から仰せらるゝ場合だけである。人民の方から民主を唱へるのは、全く支那思想或は歐米思想に據る所の直譯輸入のデモクラシーであり、日本人にして此の言を爲すは、日本の國體の何物たるかを知らず、大義名分を辨へぬ大不敬大無禮である。

天皇の御立場から「民主」と仰せらるゝ所に、日本の天皇が專制壓制の君主でない所以があり、人民の方から君主と仰ぎまつる所に、日本民族の忠誠があるのである。そこに日本國體の上下一心にして一君萬民の精華が發揚されるのである。之れを換言すれば、日本國體の精華

は、天皇は申すも畏し、國民皆個人主義の上に立たず、全體主義の上に立つ事に起因する。民族全體の爲めに我れを忘れる。即ち「無私」を生活の原則とする。そこに國體の精華が有るのである。

無私の原則とは何ぞや？ 忠孝是れである。而して忠孝は、家族生活の中に醗酵する人倫の精華である。故に日本國民生活の法案は、何よりも先づ、この家族的生活體を單位として立てられねばならぬとするのである。個人主義や民主主義を基調とする如きは以ての外の迷妄である。現に、個人主義や民主主義の政治經濟のどこに尊敬に値ひするものがあるとなすか？ それらは今、それ自身の僞文明の故に、没落の過程を辿りつゝある所である。今に及んで斯くの如き僞文明の轍を覆はんとするが如き、時代錯誤の甚だしいものである。

そののみならず、北氏の社會主義的主張は、日本をしてソヴェート社會主義共和國聯邦の亞流たらしめ、その國家主義が國際面において帝國主義の主張となるに至つては、資本主義第二期における十九世紀の夢をそのまゝ持ち續けてゐるものと謂はなければならない。北氏の「革命的大帝國建設」とは、日本をして日本本來の面目において建て直さうとするのではなく、日

本をして一層西洋の亞流たらしめんとすものである。之れを概言すれば、北氏には西洋はよく擱めてゐるが、東洋が、日本が、その最も基本的要素において把握されて居らぬのである。

勿論、部分的には非常に優れた眼光を以て、日本の要素を活かし得てゐる。例へば、婦人々々權の擁護の如きそれである。日本婦人が家庭的にいかになきな使命と役割とを持つてゐるかといふ見識から、婦人の社會的勞働を禁止、婦人參政權の要求に反對してゐる點などは、北氏が爲政者としていかに非凡な頭腦の所有者であるかを語るものである。併し、それが北氏の場合では、個人主義的に活かされようとしてゐる點が、やはり西洋流である。日本流にはそれが家族主義の見地から、益々その美點長所が積極的に活かされねばならぬといふ要求を持つ様にならねばならぬのである。

日本流の家族主義の見解によれば、家族を以て一つの經濟單位的生活體とし、それを以て一つの全體的な生命の流れとするのである。國家はこの家族的生命の流れの民族的に綜合された一大ホームである。之れは個人からは決して生命は流れ出さぬといふ基礎觀念によるものである。だから、個人は社會の或は國家の組織構成の單位にも基本にもならぬのである。近代的な

社會組織或は國家構成の根本的な誤謬は、個人を以てその單位或は基本とする所に在る。單なる個人の集合を以て全體を構成しようとする社會主義の誤謬も亦そこにある。故に、吾々が今日國家の改造或は社會の改革を必要とする所以のものは、かくの如き近代社會乃至近代國家の組織構成上の根本的誤謬の是正の要求に外ならぬのである。

今、日本の社會改革者、國家改造者が、北氏の『日本改造法案』を繙いて、眼光紙背に徹するものがあるならば、北氏が讚美して措かざる國民の美風なるものが、日本の社會組織のどこに發足し、何によつてその長養を得たかを、明確に認識把握し得るであらう。それは家族を以て社會の單位とし基本とする所の日本固有の家族主義に因るのである。日本の家族主義においては、社會の基調を、西洋近代の文明諸國において見るが如く、個人の權利の主張に置かず、實に家族なる全體への奉仕に置くのである。家族は社會上、一個の獨立した生命體或は生活體として、それ自身一個の完全細胞である。個人は此の完全細胞の一部分或は一要素たるに外ならぬ。その家族内の生活權の平等は、社會的に獨立した一個人として平等なのではなく、家族なる生活體の一部分として（一構成要素として）平等なのである。



此の家族主義の延長擴大が取りも直さず、吾等の國家主義でなければならぬ。蓋し、吾等の國家は、この家族の民族的結合體に外ならぬからである。この民族結合體としての國家の元首その家長、その中心、その總代表はすなはち 天皇である。吾等は是の國家内において單なる獨立した個人として生活權が平等であるのではなく 天皇の赤子なるが故に、生活權が平等であるのである。老若男女、日本國民として生活權の平等なる所以のものは、此の理に基くのである。吾等の生命は、天皇の赤子として、國家の一部分、一構成要素である。もつと端的に云へば、吾等の生命は國家の附屬物なのである。その意味で、吾等に取つては國家が一切であり、萬能であり、絶對である。而してその國家が一切であり、萬能であり、絶對である所以のもの、我等が 天皇の赤子たる因縁に基くのである。此の因縁を無視しては、國家は單なる壓制君主の權力機構或は人民の權力意志の爭奪機構たるに過ぎぬこと、支那歐米の過去現在の歴史が明かに之れを語りつゝある。我が國においても、中葉武家政治の所謂戰國時代において、かくの如き失態を示した事もあつた。故に再びかくの如き失態を、わが光輝ある民族史上に繰返すことなからしめんとの大御心から、畏くも明治維新皇政復古の大業が、斷行さるゝに

至つたのである。

今、吾等昭和維新の覺悟は、實にこの明治維新の覺悟の繼承完成たらざるべからざるや論なき所である。單なる支那式、歐米式民主的國家主義革命の無意義なるは歟を要しない。吾等の國家主義は家族主義を以てその基調とするものなるが故に、國內における家族對社會の結合關係が、同時にもつて國際的結合關係の原則となり、家族と家族とが對等平等なる如く、民族と民族、國家と國家とも對等平等がその原則とならねばならぬ。その弱小家族なるが故に、社會的に經濟的にはた政治的に不平等なるべからざるが如く、その弱小民族なるが故に、國際的に不平等が是認せらるべき何等の理由もない。歐米白色民族のアジア弱小民族に對する專横暴を排撃し、弱小民族の獨立を得しめてこそ、大和民族の歴史的使命の實現であると謂はねばならぬ。

その意味で、朝鮮の併呑は、それがたとへ同種族であり、文化的交渉が歴史的に察接であるにもせよ、日本の獨立の爲めに爲さるべきではなかつたのだ。日本は朝鮮が弱小國であり、隨つて事大主義であり、獨立の能力なき民族であるが故に、朝鮮自身の獨立の爲めに、支那及び

ロシアと戦ふべきであつたのである。獨立の能力なき弱小民族なるが故に、之れを併呑するこ  
とを是認し、アジアに一大帝國の建設を夢るが如きは、かのローマ大帝國滅亡の歴史を問ふま  
でもなく、近く世界大戰以後におけるカイゼルの帝國主義、ツアーの帝國主義、イギリス帝國  
主義の没落が實證する所の如く、日本民族の國際的大成を期する所以ではない。若し夫れ北氏  
の意圖する所の如く「亞細亞聯盟ノ義旗ヲ翻シテ眞個到來スベキ世界聯邦ノ牛耳ヲ把リ、以  
テ四海同胞皆是佛子ノ天道ヲ宣布シテ東西ニ其ノ範ヲ垂レ」んと欲せば、日本民族は己れ立た  
んと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達する仁愛の道を本として小弱國の獨立を援け  
ねばならぬ。國家主義が國際間において、帝國主義的發展を意圖するは、國家主義の霸道であ  
る。王道を世界に宣布する所以でない。

尤も此の「日本改造法案」が起草されたのは、大正八年八月の事だといふのだから、その時  
から見ると、今日は己に十餘年を経過してゐるのだから、その間に國際間の客觀情勢と、資  
本主義の逆モーションによつて急速な變化を來してゐるし、その後毎日法華經を誦してゐると  
噂さには傳へられてゐる北氏の事だから、その内面的な深さも増したであらうし、随つて「東

洋の把握」或は「日本の把握」において、この改造法案に示されてゐる所から見ると、一層明確さを加へた事と考へられる。だから之れは今日の北氏の意見として見る時は、そこに自ら或る割引乃至は訂正が加へられて然るべきであると思ふ。

唯、此の改造法案の独自の價値は、マルクス流の社會主義、直譯流の共產主義が、日本改造乃至日本革命の主流として、一世を風靡しつゝある時に、多少なりとも日本國體の尊嚴犯すべからざる意義を認め、及ぶ限りにおいて國情に即しつゝ、民主的國家社會主義の施設を斷行しようとした所に在る。その體系としての價値にいたつては、前述の通り一貫した何ものも持たず、支離滅裂であるにしても、幾分、日本的改造と云ひ得る點において、此の種の全面的改造案なるものが、現時日本の改造に改革に、革命に當ると呼號する有象無象の團體結社のどこにも見當らないといふ時節柄であるから、その意味で北氏の功績は認められなければならぬ。

日本改造の標語として、マルクス流の第三インターナショナルと明白に對立する意味において、國家社會主義なる名稱が唱へられる様になつたのは、猶存社と相前後して發生した故高島素之氏を中心とする大衆社の運動においてである。大正八年の頃、高島氏は當時帝大に憲法の

講座を受持ち、マルクス主義と對立して熱心に國家主義を唱へてゐた上杉愼吉博士と結んで、經綸學盟なる急進的愛國運動團體を組織した事がある。が、之れは、實行團體として終にものにならず、間もなく解消してしまつたが、高島氏の國家社會主義に共鳴して、大衆社に集つた人々には、矢部周、神永文三、小栗慶太郎、石川準一郎、津久井龍雄、北原龍雄、松延繁次、大木雄三氏等がある。今の社會大衆黨の書記長麻生久氏もその頃高島氏の門をたゝいた一人である。高島氏は北一郎、大川周明、滿川龜太郎等猶存社系の巨頭とも親交を結んでゐた。もし高島氏が今日も尙健在であり得たとしたならば、彼れは或は今日、日本のムツソリになり得たかも知れないと思はれる一種新鮮な、可なり根強い空氣が醸されてゐたのである。高島氏の愛國運動の強味は、その大衆社なる看板に示されてある通り、大衆的であつた事である。高島氏は大川氏や北氏などとは違つて、マルクスの研究者だけあつて、絶えず社會の下層——基礎階級に注意の眼を向けることを怠らなかつた。彼れは上の方に對しても勿論相當注意を拂つてゐた様だが、より多く下を向いて、大衆の組織といふことについて、此の派の恐らく誰れよりも、深刻に考へを運らしてゐた。つまり、一言にして掩へば、高島氏の國家社會主義運動

は、大川氏や北氏の運動の如く、組織の無い即ち脚の無い幽霊的な運動ではなかつたのである。そこに日本愛國運動に獨得な高島イズムなるものが生れたのである。併し、その高島イズムも終に一つも具體化を見ずして死んでしまつたのは惜しい事だ。

爾來、高島氏の門下の結束は、運動の中心を失ひ、必ずしも固くはなかつたが、各個思ひおもひの經路を辿つて、高島イズムの扶殖に努め、就中、最も忠實にそれを繼承し來つたのは津久井龍雄氏である。津久井氏は赤尾敏氏等と共に、一時建國會の運動に干與した事もあるが、間もなく脱退して、愛國的勞働運動團體急進愛國勞働者總聯盟を組織した。赤尾氏が社會主義に對して絶對排撃の態度を取るに對して、津久井氏は社會主義を肯定しようとしたからである。この急進愛國勞働者總聯盟は愛國主義に立つ我が國勞働運動團體の随一なものであつた。

## 二 國家社會主義政治運動の勃興

是等國家社會主義者の間では、當然愛國主義に立つ新しい政治運動團體の結成が要求されてゐた。先づ、高島氏の大衆社系には津久井、北原、矢部、神永、小栗、石川の諸氏があつた。

北、大川、滿川氏等の猶存社系には、鹿子木派の中谷武世、綾川武治、笠木派の口田康信、大川派の松延繁次、上杉系の天野辰夫、澤田五郎の諸氏があつた。そこで、天野氏が中心になり、是等大衆社系及び猶存社系の國家主義の上に立つ急進的愛國運動者の合流による政治運動團體愛國勤勞黨が結成された。

同時に、一方において、頭山、内田系の寺田稻次郎、鈴木善一、八幡博道、大邦社系の津田光造、北系の西田税の諸氏によつて、日本國民黨が結成された。

是等の國家主義的政治運動團體において見出された極めて顯著な通有性は、マルクス流共產黨の如き客觀的に確定された組織理論を持たない事であつた。社會主義に對する定説といふものが、客觀的に確立されてゐなかつた。國家主義とはいひながら、或者は社會主義を否定し或る者はそれを肯定した。

此の大衆的組織に對する創造の憊みと旋風の動搖の中から、一つの新しい組織運動が芽生へ出した。それは即ち農本主義の運動である。矢部周氏は福島縣において農本勤勞黨の運動を開始し、津田光造氏は信州松本を中心に興國農民組合の運動を起した。

政治運動も組織運動も、是等の新興勢力は、全く未墾地を行くものゝ如く、低迷困惑の中に埋没されて行つた。そこには何の躍進も見出されなかつた。國家主義運動團體は皆一様に低氣壓に見舞はれてゐた。そこへ起つたのが滿洲事變の惧風である。

空氣は動き出した。日本國民黨は内田翁によつて組織された大日本生産黨に合流した。無産黨の陣營が動搖し出した。戦争を是とする者、非とする者が、指導理論について争つた。赤松克麿、島中雄三、山元龜次郎氏等社民黨の一派が國家社會主義への轉向を企てた。大川周明氏の主宰する行地社は、運動資金を得て、戦線を擴大すべく、解消して茲に新たに神武會を組織した。津田光造氏は下中彌三郎、口田康信、橋孝三郎、長野朗、加藤一夫、矢部周、岡本利吉氏等農本主義の同志と携へ、權藤成卿翁を顧問と仰いで、日本村治派同盟を結成した。高橋忠作氏は下中彌三郎、佐々井一晁、滿川龜太郎、杉田省吾氏等と經濟問題研究會を組織した。下中彌三郎氏はもつと大きな野心を起し、平凡社の窓から「國民の黨」を主唱し、無産黨の國家社會主義轉向を機會に、愛國勤勞黨一派を促し、無産愛國兩派陣營の大結成を圖つた。

下中氏を中心に、日本國民社會黨準備會が組織された。勤勞黨から天野、中谷、小栗、神



永<sup>なが</sup>そ<sup>の</sup>他<sup>た</sup>の<sup>た</sup>有<sup>いうし</sup>志<sup>し</sup>が<sup>さんか</sup>参<sup>さん</sup>加<sup>か</sup>した。社<sup>しゃ</sup>民<sup>みん</sup>黨<sup>たう</sup>か<sup>ら</sup>島<sup>しま</sup>中<sup>なかつ</sup>雄<sup>ゆう</sup>三<sup>さん</sup>、山<sup>やま</sup>元<sup>もと</sup>龜<sup>かめ</sup>次<sup>じ</sup>郎<sup>らう</sup>、平<sup>ひら</sup>野<sup>の</sup>力<sup>りき</sup>三<sup>さん</sup>、瀧<sup>たき</sup>澤<sup>ざ</sup>操<sup>さう</sup>六<sup>ろく</sup>の<sup>しよし</sup>諸<sup>しよ</sup>氏<sup>し</sup>が<sup>あつ</sup>集<sup>あつ</sup>まつた。經<sup>けい</sup>濟<sup>ざい</sup>問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>研<sup>けん</sup>究<sup>かう</sup>會<sup>かい</sup>か<sup>ら</sup>は佐<sup>さ</sup>勞<sup>らう</sup>農<sup>のう</sup>大<sup>たい</sup>衆<sup>しゆ</sup>黨<sup>たう</sup>か<sup>ら</sup>坂<sup>さか</sup>本<sup>もと</sup>孝<sup>かう</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>、近<sup>こん</sup>藤<sup>どう</sup>榮<sup>えい</sup>造<sup>さう</sup>、神<sup>かん</sup>田<sup>だ</sup>兵<sup>へい</sup>三<sup>さん</sup>の<sup>しよし</sup>諸<sup>しよ</sup>氏<sup>し</sup>が<sup>あつ</sup>集<sup>あつ</sup>まつた。經<sup>けい</sup>濟<sup>ざい</sup>問<sup>もん</sup>題<sup>だい</sup>研<sup>けん</sup>究<sup>かう</sup>會<sup>かい</sup>か<sup>ら</sup>は佐<sup>さ</sup>々<sup>さ</sup>井<sup>みづか</sup>、滿<sup>みつ</sup>川<sup>かわ</sup>、松<sup>まつ</sup>田<sup>た</sup>の<sup>しよし</sup>諸<sup>しよ</sup>氏<sup>し</sup>が<sup>くは</sup>加<sup>くは</sup>はつた。別<sup>べつ</sup>に<sup>ちゆう</sup>早<sup>さう</sup>大<sup>だい</sup>教<sup>けう</sup>授<sup>じゆ</sup>林<sup>りん</sup>癸<sup>し</sup>未<sup>み</sup>夫<sup>ふ</sup>氏<sup>し</sup>が<sup>は</sup>馳<sup>は</sup>せ<sup>さん</sup>参<sup>さん</sup>じて<sup>いさい</sup>異<sup>い</sup>彩<sup>さい</sup>を<sup>はな</sup>放<sup>はな</sup>つた。

その<sup>たうせい</sup>黨<sup>たい</sup>誓<sup>せい</sup>に<sup>い</sup>曰<sup>い</sup>く「建<sup>けん</sup>國<sup>こく</sup>の<sup>ほんぎ</sup>本<sup>もと</sup>義<sup>ぎ</sup>に<sup>ちゆう</sup>基<sup>き</sup>き<sup>き</sup>捧<sup>ほう</sup>取<sup>き</sup>な<sup>き</sup>新<sup>しん</sup>日<sup>に</sup>本<sup>ほん</sup>の<sup>けんせう</sup>建<sup>けん</sup>設<sup>せつ</sup>を<sup>す</sup>期<sup>す</sup>す」と。

一、吾<sup>わ</sup>黨<sup>たう</sup>は<sup>かうどう</sup>行<sup>こう</sup>動<sup>どう</sup>的<sup>てき</sup>國<sup>こく</sup>民<sup>みん</sup>運<sup>えん</sup>動<sup>どう</sup>に<sup>より</sup>て<sup>てんわう</sup>天<sup>てん</sup>皇<sup>わう</sup>政<sup>せい</sup>治<sup>ち</sup>の<sup>てい</sup>徹<sup>てつ</sup>底<sup>てい</sup>を<sup>す</sup>期<sup>す</sup>

一、吾<sup>わ</sup>黨<sup>たう</sup>は<sup>にほん</sup>日<sup>に</sup>本<sup>こく</sup>國<sup>こく</sup>内<sup>ない</sup>に<sup>か</sup>於<sup>お</sup>ける<sup>はんし</sup>反<sup>はん</sup>資<sup>し</sup>本<sup>ほん</sup>主<sup>しゆ</sup>義<sup>ぎ</sup>統<sup>とう</sup>制<sup>せい</sup>經<sup>けい</sup>濟<sup>ざい</sup>の<sup>じつ</sup>實<sup>げん</sup>現<sup>げん</sup>を<sup>す</sup>期<sup>す</sup>

一、吾<sup>わ</sup>黨<sup>たう</sup>は<sup>じんしゆ</sup>人<sup>じん</sup>種<sup>しゆ</sup>平<sup>へい</sup>等<sup>とう</sup>、資<sup>し</sup>源<sup>げん</sup>衡<sup>へい</sup>平<sup>へい</sup>の<sup>げん</sup>原<sup>げん</sup>則<sup>そく</sup>の<sup>うへ</sup>上<sup>うへ</sup>に<sup>しんせ</sup>新<sup>しん</sup>世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>秩<sup>ち</sup>序<sup>じよ</sup>の<sup>さう</sup>創<sup>さう</sup>建<sup>けん</sup>を<sup>す</sup>期<sup>す</sup>

之<sup>これ</sup>が<sup>その</sup>綱<sup>かう</sup>領<sup>りやう</sup>で<sup>ある</sup>。

か<sup>おも</sup>と思<sup>おも</sup>ふと、國<sup>こく</sup>家<sup>か</sup>社<sup>しゃ</sup>會<sup>かい</sup>主<sup>しゆ</sup>義<sup>ぎ</sup>の<sup>りろん</sup>理<sup>り</sup>論<sup>ろん</sup>構<sup>こう</sup>成<sup>せい</sup>宣<sup>せん</sup>傳<sup>でん</sup>機<sup>き</sup>關<sup>かん</sup>と<sup>して</sup>、日<sup>にほん</sup>本<sup>ほん</sup>社<sup>しゃ</sup>會<sup>かい</sup>主<sup>しゆ</sup>義<sup>ぎ</sup>研<sup>けん</sup>究<sup>かう</sup>所<sup>じよ</sup>が、石<sup>いし</sup>川<sup>かは</sup>準<sup>じゆん</sup>十<sup>しち</sup>郎<sup>らう</sup>

氏<sup>し</sup>に<sup>よつて</sup>造<sup>つく</sup>られ、機<sup>き</sup>關<sup>かん</sup>紙<sup>し</sup>「日<sup>にほん</sup>本<sup>ほん</sup>社<sup>しゃ</sup>會<sup>かい</sup>主<sup>しゆ</sup>義<sup>ぎ</sup>」が<sup>はつ</sup>發<sup>はつ</sup>行<sup>かう</sup>さ<sup>れて</sup>行<sup>い</sup>つた。亞<sup>あ</sup>い<sup>で</sup>そ<sup>の</sup>延<sup>えん</sup>長<sup>ちやう</sup>擴<sup>くわく</sup>大<sup>だい</sup>とし

て<sup>にほん</sup>日<sup>に</sup>本<sup>こく</sup>國<sup>こく</sup>家<sup>か</sup>社<sup>しゃ</sup>會<sup>かい</sup>主<sup>しゆ</sup>義<sup>ぎ</sup>學<sup>がく</sup>盟<sup>めい</sup>が<sup>うま</sup>生<sup>う</sup>れ、機<sup>き</sup>關<sup>かん</sup>紙<sup>し</sup>は「國<sup>こく</sup>家<sup>か</sup>社<sup>しゃ</sup>會<sup>かい</sup>主<sup>しゆ</sup>義<sup>ぎ</sup>」と<sup>わふ</sup>普<sup>ふ</sup>通<sup>つう</sup>に<sup>あらた</sup>改<sup>あらた</sup>め<sup>られた</sup>。幹<sup>かん</sup>事<sup>じ</sup>長<sup>ちやう</sup>は

林<sup>りん</sup>癸<sup>し</sup>未<sup>み</sup>夫<sup>ふ</sup>博<sup>はく</sup>士<sup>し</sup>、石<sup>いし</sup>川<sup>かは</sup>準<sup>じゆん</sup>十<sup>しち</sup>郎<sup>らう</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>じむ</sup>事<sup>じ</sup>務<sup>む</sup>主<sup>しゆ</sup>事<sup>じ</sup>、下<sup>しも</sup>中<sup>ちゆう</sup>彌<sup>み</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>、島<sup>しま</sup>中<sup>なかつ</sup>雄<sup>ゆう</sup>三<sup>さん</sup>、大<sup>おほ</sup>川<sup>かは</sup>周<sup>しゅう</sup>明<sup>めい</sup>の<sup>し</sup>三<sup>さん</sup>氏<sup>し</sup>は<sup>こもん</sup>顧<sup>こ</sup>問<sup>もん</sup>、佐<sup>さ</sup>

々<sup>さ</sup>井<sup>みづか</sup>一<sup>いち</sup>晃<sup>かう</sup>、近<sup>こん</sup>藤<sup>どう</sup>榮<sup>えい</sup>藏<sup>ざう</sup>、矢<sup>や</sup>部<sup>べ</sup>周<sup>しゅう</sup>、小<sup>こ</sup>池<sup>ち</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>らう</sup>、赤<sup>あか</sup>松<sup>まつ</sup>克<sup>く</sup>實<sup>じつ</sup>、平<sup>ひら</sup>野<sup>の</sup>力<sup>りき</sup>三<sup>さん</sup>、山<sup>やま</sup>名<sup>な</sup>義<sup>ぎ</sup>鶴<sup>つる</sup>、津<sup>つ</sup>久<sup>く</sup>井<sup>みづか</sup>龍<sup>りゆう</sup>雄<sup>ゆう</sup>、松<sup>まつ</sup>延<sup>えん</sup>

繁次、狩野敏、五十嵐隆の諸氏が幹事になつた。

その後日本國民社會黨準備會は「國民日本黨」の旗の下に、愛國派無産派の大結成が出来ようといふ所で、兩派役員の顔觸れが問題になり、とう／＼決裂の餘儀なきに立ち至つた。そこで社民系の赤松派だけで國家社會黨を押し立て、下中派は愛勤黨、勞大黨及び經濟問題研究會だけで結び付き、新日本國民同盟を組織した。委員長に下中彌三郎氏を、書記長に佐々井一晁氏を、組織部長に近藤榮藏氏を据えた。

かくして下中氏の左右兩翼反資本主義勢力の大結成運動は大成せずして小成に終つた。その原因がどこにあるかといふに、轉向派の云ひ分によれば、幹部の割當が不公平だといふのである。どこに不公平があるかといふに、兩派から同数の委員を出すことに不公平があるといふのである。何故かといふに、愛國派は轉向派ほど大衆の上に組織化された勢力を持つてゐないからだといふのだ。つまり、勞働組合、農民組合といふ組織大衆を多く持つてゐる轉向派は、それを持つてゐない愛國派よりも多くの委員を中央において持つのが當然だといふ主張である。即ち、轉向派が愛國派から口先きだけの力で引き廻はされるのは御免だといふのである。

之れは轉向派としては當然な要求であつて、どうにも仕方がない。愛國派がこの轉向派の要求を容れて譲歩すればだが、それも面白くないといふので、兩派決裂の止むない破目に立つたのだが、此の兩派の確執はそのまゝ新日本國民同盟にまで持ち越された。分裂したの轉向派の社民系赤松氏一派だけが、勞大系の近藤氏一派は下中氏の手許に残つて労働系の中谷氏等と一緒に働いてゐた。そして近藤氏はその組織部長といふ重要な役割を占めて居るばかりではなく、坂本氏等と共に労働組合總聯合を牛耳つてゐる。随つて、同盟の實勢力は近藤氏等一派にあつて、中谷氏等愛國派は時々顔を出すだけであつて、自然に同盟の活動から浮き上つてしまつた。

組織運動なるものゝ、いかに重要なものであるかを覺つたのは中谷、天野氏等、愛國派の面々である。と同時にその組織運動が果して轉向派の持參組織形態即ち無産黨傳來の社會主義の産物たる組合組織の形をそのまゝ適用すれば、それは皇國的國民主義團結が成就されると云へるかどうかと、愛國系の人々に取つて、新しい深刻な一つの問題となつた。

國家社會主義運動が必然に達着すべき此の國民的團結の組織結成に關しては、大要、北氏の

「日本改造法案」の批判の所で觸れて置いた通りである。無産黨の社會主義或は社會民主主義的精神の產物である組合組織は、固より階級闘争の機關として役立たしめるのが目的である。それがたとへ組合の内部からの愛國的要求によつて、國民的團結の方向へその組織力が轉換されしにても、その結成の基本精神が、個人を社會の單位と考へる所の西洋流の精神である限り、それを以て直ちに皇國的な組織形態と認めるわけには行かない。そこに愛國勤勞黨系の組織運動における新しい悩みがあるのだ。

然らば、どういふ組織形態を取ることが、皇國적であると謂へるか？——此の疑問に答へ來つたのが日本村治派同盟の運動である。農本主義へ、農本的民族協同體の建設へ！そして愛國勤勞黨は皇國農民同盟を組織し「皇道日本の再建は農村より」のスローガンの下に、農民運動への主力的轉向を斷行した。

## 4 農本的位置を取るもの

### 一 日本村治派同盟の誕生

日本村治派同盟は、かの五・一五事件以來俄かに表面化される様になつたが、一體それはどういふ因縁と精神とから生れたものであるか――

皇國歴朝の大御心に從へば、皇土の民は等しくおしなべて天皇の赤子であり、皇民である。而して之等の赤子皇民の中、最も社稷に功勞あるものは農民である。故に肇國天皇長くも詔して宣はく、農は天下の大本也と。日本國に於ては、社稷體統の主たる負擔者は農民である。國民生活の支柱は農民であり、國運々行の樞軸は農村である。従つて我が國家安泰の基礎條件は先づ農民の生活をして安泰ならしむることである。大御心を安んじまつるといふことの具體的意味は、農民生活を安固ならしむるより外にない。

農民といつても、自らは一粒の米も作らず、耕作農民から不勞利得しつゝある地主の如きは

その數に入らぬのは勿論である。正確には自ら額に汗して耕作し、社稷の成立に取つて最も重要な貢獻を爲しながら、而も自ら奉ずる所最も薄く、今日の衣食に窮しつゝある現代の貧農を意味する。此の貧農の生活をして安樂なることを得しめざるにおいては、斷じて大御心を安んじ奉り得ないのである「一夫耕せば、天下或はその餓を受けん」とは、皇國歷朝百世の遺謨である。

單にそれが歴朝の宏謨だからといふだけの理解で現下の農村問題の重大性があるといふわけではない。更に社會的な觀點において、吾々の此の生命、此の肉體は、一體何によつて支持されてゐるのか？——日に何萬粒かの米を食ふことによつて、斯うして生きてゐられる吾等國民の生命、毎日農民の生産した食糧のおかげを蒙らなければ、絶對に此の壽命を存続し得られない吾等の肉體、それはもし農民がわたしの如き不耕作者に、食糧の供給を拒否したならばどうの昔しに、太陽の前の朝露の如くに消え失せてしまつたのである。然るに不思議にも、わたしはこの二十有餘年が間、自ら一粒の米をも耕すことなくして、此の生命を持続し得たのである。

これは誰れの賜物であらう？——偏へに之れ農民の賜物と申すの外はない。農民の賜物であるが故に、われらのこの生命は、今や全く農民からの拜借物である。借りたる物は成るべく早く返すに若かず、とは古來社會の鐵則である。つまり、吾々が天皇に對する御報恩の、社會的意味は、吾々の此の最後の私有財産たる肉體を農民に返還する事である。沉んや諸餘の物質的財産をやだ。

現代農村問題の重大性は、蓋し此處に在るのだと思ふ。つまり、現代の都市人は、殆んど計量すべからざるほどの莫大な債務を農村から負つてゐるのである。農村が都市から負つてゐる所の債務實に七十億と云ひ、無慮百億と稱する所のものは、都市人の無慚無道傍若無人專横無比の欺瞞であり、デマである。

併しながら、かくの如き欺瞞は、それが欺瞞であるが故に、終に何の意味をもなさず、一沫のナンセンスたる外はない。もし債務の事を云ふべくんば、都市は農村にその全財産を擧げて返済に應じて、まだその個々人の肉體に借りが残る。もし農村が同盟して、都市人の肉體に差し押へに來たらどうする？ さういふ事は現實に有り得ない事ではない。又、不可能な事柄

でもない。そして都市人はそれに對しては全く無能力である事を知らねばならぬ。軍隊でさへそれに對しては無力である。何となれば軍隊構成の主體條件が農民だからである。

農村問題の重大性は、國際問題の方面からも考へられ、數へ立てればきりはないが、凡そ都市人のそれに對する理解がこゝまで來れば、農村問題は固より、世界の都市文明の一切の行き詰りが平和の裡に解決する。要は都市人が是れまで農村から奪ひ取つた財産の一切を擧げて農村に推し譲り、都市中心の唯物文明を解消して、農村から盛り上つた文化を創造することである。奪ひ取つた産業經濟政治教育を、農村に返還分散することである。

## 二 日本村治派同盟の運動

日本村治派同盟の運動は、大體、以上の如き因縁と精神とから生れたものである。

村治派同盟は、先づ同志を都市に求めた。そこで「何だ、農民運動を都會でやるのか」といふ冷嘲や侮蔑を幾度も受けた。

固より常識的には、農民運動といふからには、農民から或は農村からの運動であるべき筈だ



都市人から或は都會からの農民運動は、村治派の運動でなく、町治派の運動になりはせぬかといふ注意が、權藤成卿翁からもあつたのだ。しかし、村治派の運動といふものは、斷じて左様に常識的な量見の狭いものではないのだ。尠くとも、今日の農村問題といふものは、農村だけの問題ではなくなつたのだ。之れを都市といふものから切り離しては考へられ所の相離々係因縁關係の下に存在する所の全國的問題であり、全世界的問題であるのだ。即ち、農村問題即都市問題であり、全國内問題であり、全國際問題であり、全人類の文化問題であるのだ。愛郷塾の橋孝三郎氏の如きも、十五年も農村に在つて此の問題をひねり廻してゐたが、結局之れを都市問題化し、全國的運動にまで展開しなければ、どうにもならんといふので、率先參加したものである。

かくの如く、農村問題の重大性は、農村に在るばかりではなく、現代の都市人の都市生活自壞作用が、如何に重大な農村問題の反面を爲すかを知らねばならぬ。即ち、都市生活の中においても、立派に農民運動は成立し得るばかりではなく、それを都市生活の中において成立たせようとするのが、村治派運動の一つの大きな存在理由でもあつたのだ。

此の故に、農民運動には、村治派の流儀に従へば、都市から農村へと、農村から都市へとの二つの形態が成り立ち得るのである。農村から都市へだけが、農民運動の唯一の形態である様に考へたら、それはマルクス亞流の考へ方に外ならぬ。

斯ういふ見解から、日本村治派同盟へ加盟した人々は、犬田卯（農民文化聯盟今關壽磨（北平今關研究所——北方支那の村治學派の紹介者）岡本利吉（農民協働學校）加藤一夫（農本村塾）風見章（愛鄉會後援者）橘孝三郎（愛鄉塾頭）高須芳次郎（日本學園）辻潤（老子式村治派）土田杏村（評論家）津田光造（本同盟主唱者）長野朗（農村新聞）滿川龜太郎（興亞學塾）室伏高信（農本主義思想家）武者小路實篤（新しい村）村井弘侑（口田系同志）小野武夫（農學博士）口田康信（王道農本黨主唱者）矢部周（農本勤勞黨）山川時郎（岡本系同志——後岡本氏と別れる）古谷榮一（日本主義思想家——本同盟シムバ）今春聽（佛教青年聯盟）權藤成卿（自治學會）江藤源九郎（口田系同志——陸軍豫備少將）雨谷菊夫（農本尊皇水戸學研究者）澤田五郎（上杉系國體學者）宮越信一郎（國民解放社）下中彌三郎（本同盟名附親）森田重次郎（百姓愛道場主江渡狄嶺氏推薦）等であつた。

是等の人々の全部が農本主義者といふカテゴリーの中に入るかどうかは疑問だが、前にも述べた様に、一般に、既往農民運動の指導者は、上から下への農民運動といふものは、農本主義ではないといふ風に考へてゐたので、村治派同盟の内部でも、その點で、イデオロギーの上のギクシャクした交錯と軋轢とがあつた。日本村治派の本統のイデオロギーを云へば、上から下への大御心の體現が「農を本とする」といふ形態を取るのである。それは社會組立ての秩序を意味するのである。方今、社會の秩序が混亂してゐるのは、本來農を本にして組立てらるべき社會が、工を本にし、或は商を本にする様に、本末を顛倒してゐるからである。茲に社會組織の上で、農本主義が八釜しく叫ばれなければならぬ理由があるのだ。

つまり、日本村治派の謂ふ所の農本主義なるものは、日本民族の指導原理たる皇道を體現せんとする士の社會組織の標語であるのだ。然るに、皇道といふものが確かに把握されてゐない爲めに、資本主義によつていたく歪曲された現實の法律制度に煩はされて「天皇」の本質に對する考へ方が、外國人程度の或はマルクス主義乃至アナーキズム程度の「××」のシムボルとしてしか理解されず、それが太陽として、民族生命の大本として、社會正義の原理として理解さ

れてゐない農本主義者も、日本村治派同盟には加はつてゐた。そして此の種の人々（茲に名前を擧げることは、その人の名譽の爲めに避けるが）に取つては、天皇を社會正義のシムボルとして仰ぎまつることは、いきなり「ファツシヨ」といふイデオロギーの中へ叩き込まれてしまふことであつた。ファツシヨでも構はぬが、それは農本主義ではないといふ意味であつた。何のことはない。此の人々はマルキシズムの都市勞働者本位の立場を農民本位といふことにスリ替へただけの話で、其の實唯物史觀のイデオロギーからは一步も抜け出て居らず、日本村治派の立場とする民族文化史觀の上に立つてゐなかつたのである。

斯ういふ觀念形態上の不一致があつた上に、その中心人物として押し立てた委員長の下中彌三郎氏が、國民社會黨創立の政治運動をやり出したといふことが、アナキーの色彩の強い農本主義者達をして、同盟の前途に對して尠なからず危惧を懷かせずに措かなかつた。即ち村治派同盟の運動は忽ちに暗礁に乗り上げてしまつた。

農民運動に取つて一番大切なことは、神の把握である。勿論、官僚政治家や政黨者流や資本主義者の搾取の好餌として存在する神、いかなる苦痛も虐壓も、すべて宿業因縁と諦めさせ

只管民衆を去勢するために存在する邪神の如きは、否定されねばならぬ。併しながら眞實の神は、農民を搾取するどころか、それは農民の父たる太陽、農業の母たる大地である。

此の故に、眞の農民は決して眞の神の否定者ではない。眞の神（太陽、大地）を否定しては決して農業は成り立たない。單なる無神論の如きは、眞の農民の心を知らず、農業の何たるかを辨へぬ所の不耕作者都市人の僻言であり、妄語である。だから、眞の農民運動者は、眞の神の信者であり、最も敬虔なる宗教家でなければならぬ。たとへ生滅流轉する此の世の一切の事物人物に不信なりとも、最後に眞の神だけは信じなければならぬ。神を信ぜざる農民運動者の如きは、當世の流行語に従へば、インチキ運動者・ダラ幹の類ひである。

### 三、村治派と民主的農本主義

農村から都市への農民運動の形態にのみ固執する所の民主的農本主義者のいま一つの誤謬は極端に、盲目的に農民の要求といふものを神聖視する事であつた。

資本主義によつて支配されてゐる現代の農民の要求そのまゝが、本來の純朴な農民の要求そ

のものであると考へたら大間違ひである。資本主義機構の中に生活する現代の農民は、其の性單純であるだけ、その考へも單純に資本主義化してゐる。彼等が最も切實に要求する所のものは、單純に金であり、儲けであり、資本主義者の要求そのものである。現代農村窮乏の最大原因が、この資本主義的要求を以て要求とした所にあるといふ事に目覺めた農民は少い。そのために、現代の農村は、資本主義により、都市人によつて、實に物質的にだけでなく、精神的にも征服し去られたのである。農民が金を欲しがる様になつたから、彼等は手もなく資本主義の欺瞞の民にかゝつたのである。さうして都市人に欺されゝした結果が、今日の身動きもならぬ窮乏を招致したのだ。農村に金廻りがわるくなつたから、農村が窮乏したのではない。農村に金の觀念が入り過ぎた事によつて、『勤勞の資本』を失つたから、農村が窮乏したのである。此の故に現代農村の救済は、農村の金融を好くする事を考へる事ではなく、それとは全く反對に、農村においては金を不必要にし、無價値なものにする事を考へる事である。

此の主張が『都市文明の超刻』といふ村治派の第一の標語となつて現れた。

だから、村治派では、都市に對する金呉れ運動即ちかの議會請願運動なるものはやらない事

にしてゐた。所が、長野朗氏は信州波多村の和合恒男氏等と共に、自治農民協議會を結成して議會請願運動をやり出した。之れは農村問題を全國化する手段としても是非必要だといふ長針氏の意見によつたものである。長野氏は合法的な穩健手段を先づ取らうとしたのである。そして實際、長野氏の合法運動はそれだけの効果を齎らした。

村治派としては、併し、斯ういふ見解である。――

金が無ければ成り立たないといふ農村は本當の農村ではない。金に依つて經濟を支配される農村は、永久に都市の壓制搾取から解放されぬ運命の下に立つ農村である。農村の經濟は、農産物そのものに依つて支配されねばならぬ。農村の經濟は、農産物が金の支配を驅逐する様に構成されねばならぬ。その爲めに農村は、都市の經濟、金融に對して非協同戰線を布かねばならぬ。さうすることによつてのみ、農村の經濟的獨立、自給自足の確立は可能である。

之れは勿論、都市文明非協同のガンデイ式戰術であるが、橋氏はこの途を擧げずして、もつと積極的に、塾生の中から農民決死隊を組織して、都市襲撃爆破のテロを實行してしまつた實際、自ら額に汗して生産した食物さへ、自分の自由に食ふことができず、自分の意志で自

由にそれを統制する權能さへも剝奪されてしまつてゐる農民に取つて、農民から此の自由を奪去勢した都市文明（シヴィリゼーション）が何の價値があるか？ 何の役に立つか？ 何の幸福に値ひするか？ 都市文明からの金融と金肥と機械と教育と支配とは、現在の農民に何の存在理由が有るか？ それによつて農民はいかなる恩恵に浴したか？ 否、それ有るが故に、農村は現在の窮迫と不幸と苦痛のどん底に叩き込まれたのだ。

故に、是等の都市文明機構を刎ね除けることによつてのみ、農村は救はれる。都市の唯物的搾取文明が死滅する時に、農村はその過重な無益な負擔から解放され、その本來の面目において更生する。

橋氏等の直接行動は、一朝にして此の窮迫せる農村問題を表面化し全國化してしまつた。新たに起つた問題は、都市によつて叩きのめされ、ヘタバツて卑屈になつてゐる農民も、今度、金融も金肥も機械も電氣も教育も政黨も納税も、一切の都市的存在を塵の如くにながかり棄て、何時でも起ち上り得るといふ事實である。

併し、村治派のやらうとした事は、かくの如きテロ、直接行動ではなく、村塾の全國的普及



である。運動の中心を飽くまでも文化運動に置いて、全国的に改革の空氣を農村から盛り上げる事である。つまり、上からの政治的革命に備へる地ならし、基礎工事をして置かうといふのである。即ち、その運動の大綱を爲すものは、

- 一、村塾を立て、農本文化建設の基礎とする。
- 一、農業を本として經濟組織を改革する。
- 一、家族を生活單位として民族協同體社會組織を構成する。

### (三) 農本的民族文化史觀の勝利

#### I 農本的民族協同體組織原理

#### 一 皇道日本の再建

皇道とは何ぞや。一言にして掩へば、太陽の道の義である。皇は白王、白王は王の上の王即ち太陽の義である。太陽の道は此の世の一切衆生に對して偏愛なく、又、吝惜する所なく、满腔の熱と光りとを投げ、生々發育厚生の道を得しむに在る。

是の太陽の心そのまゝが、吾が皇國においては、畏くも代々天皇の大御心である。故に吾等は吾等の天皇を日の御子或は天子様と仰ぎまつる。この大御心を儒教流に説明すれば仁愛の心であり、佛教流には大慈悲である。而して此の大御心を體現し、之れを地上に誠にするのが皇

民の本道である。此の皇民の本道を政治に道德に經濟に社會に教育に外交に軍事に、一切の文化的施設の上に實踐具現するのが、吾が國體の精華とする所の忠道である。故に忠道は上下一心にして君臣の間は勿論、一切の社會關係においても、一つの文化機構と他の文化機構との間においても、二心あるまじきものである。

教育勅語に「爾臣民克忠ニ克孝ニ億兆一心ヲ一ニシテ世世厥ノ美ヲ成セルハ之レ我カ國體ノ精華ニシテ」と仰せられたる御聖旨に鑑み、吾等は皇道民族全體一心同體主義たる所以を覺り、個人主義に胚胎する近代の西洋文明（唯物的都市文明——資本主義及び社會主義の文明）に追従を事とすることの反國體的たる所以、反皇道的たる所以、隨つて非日本民族的たる所以を覺らねばならぬ。而して吾等が反國體的反皇道的非日本民族的たるべからずして、國體的皇道的日本民族的たらざるべからざる所以のものは、吾等が日本民族として生をこの皇國に享けたる一大事因縁に由る。此の一大事因縁を無視して、吾等の生命と隨つて生活乃至生存は有り得ない。此の一大事因縁を覺ることによつてのみ、吾等日本民族の生存の意義と價值と隨つて使命とが成立する。

吾等は先づ日本民族として皇國に生を享けたのである。生を皇國に享けたるが故に、吾等の生命は全皇國の生命である。皇國のものは皇國に返さねばならぬ。吾等の全生命を擧げて之れを皇國に返す事、之れを忠と謂ふ。吾等が皇國に生存する究極の意義は斯の忠節を盡す所に在る。而して吾等が、天皇に忠節を盡さざるべからざる所以は、天皇が吾等日本民族の總名代であるからである。吾等の生命が、天皇の生命たる所以、隨つて吾等が天皇の赤子たる所以はこれにある。吾等が全生命を天皇に投げ出した時に忠である。それは抛け與へられた生命を抛け返す彈力作用に外ならぬ。天皇に忠節を盡すとは、この生命の最も自然なる彈力作用、本有の反射作用で、それは獨り軍人だけの職分ではない。天皇の赤子としては、行往坐臥、諸作忠節を以て一貫されねばならぬ所である。それは教育だけの、或は道德だけの專賣でもない。産業に經濟に、社會に外交に、一切の文化的活動に於て、上下一貫して忠でなければならぬ。堅に忠の道立つて後始めて横に信の道が行はれる。

忠はかくの如く無私の行動である。無私なるが故に、宗教の心は以て政治の心となり、道德の心は直ちに經濟の心となり、世上の行事一貫して億兆一心たり得るのである。個人に二心を

生じ、或は個と個、國と國との間に二心を生ずるは、職として是れ一貫して忠なきに由る。教育勅語に「朕爾臣民ト俱ニ脊脊服膺シテ咸共德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ」とある大御心のほど畏しとも畏き次第ではないか。

民族一體同心の日本、これが本來の日本民族團結の姿である。此の日本民族本來の團結の姿が、西洋近代個人主義文明の我が民族生活への壓倒的侵潤によつて、著しくその民族的團結の中心が不鮮明になり、隨つてその民族的組織形態を稀薄ならしめ、その團結力をして微弱ならしめたのだ。勢ひの赴く所、衆口金を溶かすとは單なる譬喩ではなく、皇道日本は今、上から下まで、その團結の心棒が、皇道が、忠孝が、根こそぎ形なしにされようとしてゐる。茲に吾等は皇國非常時の非常時たる所以のものを認識せねばならぬ。換言すれば、吾等は今、民族的團結の崩壞期に直面してゐるのだ。

「皇道日本再建」の運動を起さざるを得ざるの要こゝにある。

皇道日本の建直しは、此の故に、先づ忠の道を立て、忠の組織を造り、忠の團結を確立することから始まらねばならぬ。而して忠道確立の基礎條件は孝道の確立に在る。孝は忠の鏡である

忠の反映が孝であり、孝の發展（或は反射）が忠である。國家の縮圖が村落であり、村落の單位が家庭である（皇國においては國家或は社會の單位が個人ではない）故に國家は個人の集合體ではなく、家庭の發展であり、或はその擴大である。是れ忠孝一本にして同體一心たるゆえんである（異體同心ではない）忠は孝の統一原理であり、孝は忠の分身的表示である。

この意味において、吾々の家庭生活は國家生活の分身である。家庭生活における吾々の家長は、國家生活（或は民族生活）における、天皇の鏡である。家庭生活において家長（即ち父母）に孝たるは、民族生活において、天皇に忠なる所以である。父母に孝なる者が、天皇に忠ならざる場合は在り得ない。もし父母に孝にして、天皇に忠ならざる事ありとすれば、そは孝に非ずして不孝と謂はねばならぬ。忠にまで一貫しない孝は不忠である。不忠にして孝たるべき道はなく、不孝にして忠たるべき道はない。所謂「忠ならんと欲せば孝ならず、孝ならんと欲せば忠ならず」といふ二心は反皇道的である。家庭生活における家長は、天皇の分身として常住に忠たらざるべからざるが故に、不忠なる家長に對しては、その子たる者は身を挺してその親を忠たらしむるのが孝である。

是の故に皇道の實踐と民族の團結とは、孝道を中心とする家庭生活に始まる。孝道の團結は無私の團結であり、全一的團結であり、全體主義團結、民族主義團結の基礎である。此の意味で孝は百行の本である。此の孝道を中心とする家庭的團結が一貫して皇道に統一せられたる民族的團結の組織形態が、皇道日本本來の國家形態である。かくの如くにして皇道日本は三千年の古へにおいて、無私無我の精神を基調として、民族的に團結し、又統一された國家的建設の大業を成就し、今日に至るまで所謂皇統萬世一系にして、天壤無窮の繁榮を持續したのである。此の光輝ある國體精華が、西洋近代の都市文明の如き貨幣と機械との搾取機構の外に尊嚴なる何物も持たぬ所の唯物的な、輕佻浮薄な、低調卑俗な、惡性惡質の文明によつて取つて替はられたならば、吾等は腹を十文字に斷ち切つて、祖先に詫びても追付かぬのである。

茲に吾等は祖先傳來の絶大なる弾力性と團結力を以て、此の唯物的都市文明に對抗し、個人主義的社會機構と自由主義的經濟組織とを超刻すべく起ち上らなければならぬ理由がある。精神的及び組織的に見て、皇道日本は今、殆んど此の西洋文明に壓倒し去られてゐる。その意味で日本は西洋の屬國であると謂つても過言ではない。即ち日本は民族的團結を去勢された

亡國狀態なのである。故に茲に今日、皇道日本が吾等によつて「再建」されねばならぬ重大な理由があるのだ。

然らば、如何にして皇道日本は再建されるか？ 今、日本が亡國化したといつたが、それは日本民族の中間層を成す指導階級の大勢を意味し、その民族的團結の中心たる最高王尊（天皇）と民族生活の根柢たる基礎階級（勤勞農民層）とが亡國化したことを意味しないのは勿論である。そこに吾等は皇道日本再建の可能性を認めるのだ。上、天皇を中心とし、下、勤勞農民を團結組織の規範とすることによつて、わが民族の中間層を皇道化することの可能を吾等は信じる。

すなはち今日、吾等の最も憂慮措く能はざる所は、此の亡國化せる中間層指導階級によつて異くも、天皇の大御心が中斷され、御威光が遮ぎられ、爲めに最下層の勤勞農民に徹せず、民族全體が忠道を一貫した直日の結びを得ない事である。故に吾等の改革は主として此の中間層に向け加へられなければならない。蓋し、中間層の指導精神が、西洋流の個人主義（或は自由主義）に流れ、忠道から脱線した所に亡國化の根本的病源がある。此の中間層の亡國的指導精神



が、わが民族生活の上に亡國的生活組織を（政治に經濟に産業に教育に）植付けたのだ。現在の日本の政治形態乃至社會組織は、この中間層の亡國の指導精神の現れである。故に、皇道日本<sup>ほん</sup>の建直しは、先づこの中間層<sup>ちゅうかんそう</sup>の亡國の指導精神<sup>しやうどせいしん</sup>の建直しでなければならぬ。

組織<sup>そしき</sup>の改革は先づその精神<sup>せいしん</sup>の改革でなければならぬ。中間層<sup>ちゅうかんそう</sup>をして先づその精神<sup>せいしん</sup>の誤りを自覺せしめ、現在の組織<sup>そしき</sup>が中間層<sup>ちゅうかんそう</sup>の私情<sup>しじやう</sup>に基づく私の組織<sup>そしき</sup>であり、忠道<sup>ちゅうどう</sup>に本づく皇國<sup>くわうこく</sup>の組織<sup>そしき</sup>でない事を自得せしめねばならぬ。蓋し現在の日本の社會<sup>しゃかい</sup>に行はるゝ西洋流<sup>せいやうりゆう</sup>の組織<sup>そしき</sup>は、天皇<sup>てんかう</sup>及び農民<sup>ふしん</sup>の與らざる所であり、隨つてその改革は中間層<sup>ちゅうかんそう</sup>自身の責任<sup>せきにん</sup>でなければならぬからである。然らば、かくの如くにして皇道意識<sup>くわうどういしき</sup>に目覺めた中間層<sup>ちゅうかんそう</sup>は、その組織<sup>そしき</sup>の建直しにおいて、その具體<sup>くたい</sup>的な團結<sup>だんけつ</sup>の規範<sup>くわんぱん</sup>と典據<sup>てんよ</sup>と足場<sup>あしは</sup>と單位<sup>たんい</sup>とを何處<sup>どこ</sup>に求め、何に置くか。吾等<sup>われら</sup>は此の問ひに對して端的<sup>たてまつ</sup>に答へる。それは勤勞農民<sup>きんらうのみん</sup>であると。蓋し勤勞農民<sup>きんらうのみん</sup>の生活<sup>せいかつ</sup>のみが、最も皇道的<sup>くわうどうてき</sup>な皇民<sup>くわうみん</sup>的團結<sup>だんけつ</sup>の要件<sup>ようけん</sup>と同時に形態<sup>けいだい</sup>を具備<sup>じゆうび</sup>してゐるからである。

皇道日本<sup>くわうどうにほん</sup>再建<sup>さいけん</sup>の運動<sup>うんどう</sup>は、何より先づ皇道の道德<sup>くわうどうのたいてき</sup>の再建確立<sup>さいけんかくりつ</sup>の要求<sup>ようきう</sup>の上に立つ運動<sup>うんどう</sup>でなければならぬ。吾等<sup>われら</sup>は先づ中間層<sup>ちゅうかんそう</sup>指導階級<sup>しやうどかいきふ</sup>をして、國民<sup>こくみん</sup>の中誰<sup>うちたれ</sup>れが最も道德<sup>たいてき</sup>的であるかを再吟味<sup>さいぎんみ</sup>再認識<sup>さいにんしき</sup>

識せしめなければならぬ。マルクス主義によればそれは誰よりも機械工業労働者である。併しながら吾等は、國民の中最も道德的な生活者を勤勞農民と爲す。最も嚴格なる意味に於て、勤勞農民だけが吾等民族の生命の支持者である。勤勞農民だけが誰れよりも最も優れた勤勞者である。勤勞農民だけが、吾等民族の生存と發展とに取つて、最も大切なもの——最も價値ある物を貢獻してゐる。而も自分ではカスを取り、人には一番正味の善い部分を推譲し、誰れよりも重い負擔を堪へ、みす／＼やれば損になる仕事をも只厚生に役立つといふ理由だけで都市人の恐らく誰れもが堪へ得ない苛酷なる壓制にも堪へ得る忍辱の大力有る者は、勤勞農民である。かくの如く優秀なる道德的生活者を規範とせずして、また誰れかを規範と爲し得よう勤勞農民の生活は實に斯くの如き道德規範者たるばかりでなく、また皇道的社會組織の典據でもある。

皇道的家族制度の社會組織は、近代西洋の個人主義的機械工業文明の輸入と共に破壊され、マルクス主義の侵入と共に、益々その破壊の度を加速度的たらしめつゝある。而もその間に在つて尙、今日においても、個人を社會の單位とせず、一家庭を社會の單位とする皇道的家族制

度が、その神ながらの完全なる形態を持続せる所以のものは、一に懸つて勤勞農民の保守的生活に由るのである。もしこの家族制度が破壊されたならば、如何に抽象的な皇道精神を羅列しても、社會組織に於て、全く西洋流個人主義に征服され、吾等は今日、皇道的社會組織の足場を失ひ、機械工業勤勞者を立場とするマルクス流社會主義に合流するの外、施すべき術を持たぬことになるであらう。吾等がマルクス流社會主義に對抗して、組織の點でも必勝を期し得る唯一の強味は、吾が國の勤勞農民が、個人を社會の基調とせずして、一家庭を基調とする所の全體主義の家族制度に據つて産業を経営し展開しつゝあるの一事である。

マルクス主義は社會主義或は共產主義の名において、個人主義を止揚して全體主義の上に社會組織を展開するが如く装ふけれども、その實、そのコムミュンの社會の基調とする所は個人なるが故に、社會成立の根本に於て、資本主義とその性質を同じうし、彼等が空想するが如き全體主義の社會は永久に實現し得べくもない。今假りに、社會主義乃至共產主義を全體主義と呼び得るならば、わが皇國の家族制度こそ、神ながらに社會主義共產主義を實現し來たのである。その意味で、社會主義共產主義は、我が國社會制度に關する限り、新しい思想ではなく

古い思想なのである。

之れを要するに「皇道日本の再建」の一項は、吾等の民族的團結運動の全般を掩ふものなるが故に、國內的建設の組織の細目に亘つては、別に「建設要綱」において述べる事にする。

## 二 皇道的アジア聯邦の實現

皇道の大要は上述した所であるが、皇道と屢々混同されて使用されつゝある觀念體系は王道である。

皇道の「皇」は已に述べた通り「王の上の王」即ち太陽の人格的具現化である。故に天皇は太陽と共に萬世一系であり、皇道は天壤と俱に無窮でなければならぬ。皇位は太陽が此の世を照らさん極み、大海に漫々たる水の漾ふ限り、人間の智力を以て之れを測るべからず、或は人民の腕力に訴へて之れを改廢すべからざるものである。神意を以て皇位に即きたまへる皇統の直系のみが、神ながらに皇位を繼承し給ふ大義名分が此處にある。即ち皇位は神位であつて人位ではない。天皇は人にして同時に神にまします所以である。謂ふ所の現人神是れである。然

り而して吾等はこの天皇現人神の赤子である。故に、天皇に忠義を盡すことによつて、吾等は神たり得るのである。吾等が祖先の中、天皇に忠義を盡せるもの、皆神として崇め祀らるゝ所以である。是れ皇道日本に於ける祖先の遺風である。

皇國にのみ是の遺風があり、外國には絶えて無い。之れを吾等は國體の精華と呼ぶ。

斯の國體の精華は、支那から漢文明が渡來してから後始めて我が國に成立したものでなければ、印度から佛教が傳來してから後始めて我が國に存在し得たものでもない。實にそれは皇國獨自獨得の美風である。

此の點、日本文化とは、嚴密に云へば、皇道文化の義でなければならぬ。而して此の皇道文化は、日本獨得のものであるが、日本民族だけの私有獨占すべき文化ではなく、世界共通に踐み行はるべき人類の本道である。

教育勅語に「是ノ道ハ實ニ我皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所、之レヲ古今ニ通シテ謬ラス、之レヲ中外ニ施シテ悖ラス」と畏くも宜はせ給ふ聖旨を實踐體現する所に吾等日本民族の歴史的使命がある。

支那文化に傳へられた王道は、その源を堯舜湯禹文武周公の治國平天下の理想に拘むものだが、王位は萬世一系を理想とせず、禪讓放伐を理想とし、且つそれを實現した。即ち王位は神意によつて決定されるのではなく、人意を以て選定されるのである。人民の中萬人の信望を負ふ所の有徳者が、王によつて選定され、先王は之れに王位を譲るといふ禪讓の禮が堯舜によつて傳へられた。又國王暗愚にして治國の明なく、或は暴戾にして民を安んずるの徳無き時は、人民の中の有徳者が起つて王位を放伐し、取つて替るを是とするの風が武王によつて傳へられた。

つまり、支那流の王道には王位といふものはあるが、皇位といふものがないのである。王道が仁愛を本とするはいふ迄もないが、それは飽迄も人間の心が持つ仁愛であつて、超人的な絶體の力——神の懷ろから湧き出たものではない。勿論、王道においても、一つの絶體力——天を認めるけれども、王位は皇道の如く天位ではない。王道における王者は神人ではない。それは「天」或は「神」とは永久に一つになり得ない「人間」である。故に王侯將相何ぞ種あらんやである。彼れも人也、我れも人也である。そこには王者が萬民蒼生の生命の大本たる因縁も

理由もない。

此の故に、王道においては、眞の意味における忠義なる道徳は成立しない。忠義が成り立たぬから、随つて眞の意味での孝行——如何なる場合にも忠義と衝突しない大孝は有り得ない。唯そこには「身體髮膚之れを父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり」とある如き家庭的意味の小孝が成立する事あるのみである。

家庭的な親子の關係は單なる現世的事實で、此の生命が親から與へられたものであることは、紛ふ方なき事實だから、誰れにも父母の恩の山よりも高く、海よりも深い事の道理は解る。此の洪大な親恩に報わねばならぬといふ報本反始の道徳は、皇道の場合と同様、王道の基礎條件であるが、王道の場合では、それが一家一家庭一家族内の範圍での所謂一大家族即黨的小團結を形成する綜合力たり得ても、一民族乃至一國家を結合する大團結の大綜合力たり得ない。支那の民族社會が、小黨分立群雄割據の間斷なき連續であつて、そこに民族的大綜合大統一が確立されぬのは、茲にその癥がある。

故に王道は小王の道であり得ても、大王の道であり得ない。王の上の王即ち大王の道は、唯

一の吾が皇道あるのみである。

アジア有色民族が、歐米白色民族の帝國主義的壓力から解放されねばならぬといふことは、吾等日本民族は固より、滿蒙支那印度の全アジア民族に共通の多年の宿望であり、念願であり要求である。この宿望、この要求を達成するには、先づ全アジア民族が同一の綱領の下に統一された鞏固な文化的結合が必要とされる。この結合が得られない限り、日本も支那も滿洲も蒙古も印度も完全には救はれない。随つてアジア民族が皇道的に結合されない限り、東洋永遠の平和なるものは永遠にあり得ないばかりでなく、人類の眞の平和も亦有り得ない。蓋し現代世界の禍亂と人類の不幸の原因は、農業搾取に依存する近代西洋の商工文明、即ち所謂白色帝國主義文明の支配より甚だしいものはない。

東洋諸國は、古來、日本も、支那も、滿洲も、蒙古も、印度も、シベリアも、一括して皆農業國であり、随つて農業文明を民族生活の傳統とする農業文明國である。そして最も嚴密には農業文明だけが、推讓厚生の道德的要求を満足し、随つて平和の實現を願求する宗教的要求にも合致する所の最高至尊の文明である。之れに反して、商工文明は農業に依存寄生する文明な



るが故に、本質的に侵略搾取の上に立つ悪性悪質の文明であり、人間の道德的要求乃至宗教的要求は、此の文明から遊離し、或は確執して、絶體に協同の道はなく、又共立も不可能であるもし兩者が同時に同一の場所を占有しようとするならば、一方が他方を剋服するより外はない東洋が西洋に剋服されたのは、一に此の理由からである。東洋民族よ、アジア民族よ！此の事實に目覺めよ！もしアジア民族が此の事實に目覺めて起ち上つたならば、アジア民族の聯邦的結合は、決して不可能でもなければ困難でもない。そして此の事實に目覺めて、農藝文明國としての道德的及び宗教的要求の上に先づ起ち上つたのが、印度民族である。かのガンデ

イ一派のスワラジに據る國民的獨立運動である。

孫文一派による南方支那の國民主義革命運動も亦ガンデイ一派のスワラジと全くその文化的性質を同じうする。孫文の意圖する道德的要求の實現は、要するに漢文明の傳統たる王道文化の建設に在るのだが、その王道文化の建設は取りも直さず、ガンデイのスワラジ（自産自

制）の建設であり、商工的帝國主義の排撃、農藝搾取の侵略主義への非協同である。近く滿洲國が王道文化建設の理想の上に打建てられたのも、同一の理由からでなければなら

ぬ。王道は仁愛を本とし、搾取なき社會の建設を理想とする。而してかくの如き王道文化建設の大業は、日本民族は固より、印度民族の、漢民族の、蒙古民族の、スラヴ民族の衷心よりの要望する所である。此の全アジア民族の衷心よりの要望が、今や凝つて一丸となり、茲に滿洲國の建設を見るに至つた。即ちアジア聯邦實現の機運は、此の事實を通して、今全アジアの聲として、着々として促進されつゝあるのだ。

吾等は茲に「皇道的アジア聯邦の實現」を綱領とした。かくの如く王道文化建設に對する要望の聲轟々たる眞只中において、何故に「皇道的アジア聯邦」を以てせず、敢て「皇道的アジア聯邦」としたか。それは前述せし所によつて明かなるが如く、王道固より西洋流搾取文明を止揚して、搾取なき新社會を建設する指導原理として優秀なる道たるは争ふの餘地なき所なるも、畢竟するに王道は小玉の道であつて大王の道でなく、分立割據せる諸民族を能く綜合統一して、大聯邦を成就するに堪へざることとは、何よりも支那の歴史が之を證明して餘る所である。王道に缺けたる所は、横の社會關係ではなく、豎の綜合統一力である。支那には社會がある。そこには恐らく中華の名に相應しい文化生活と社會組織とがある。けれどもそこには

その豊富なる文化生活と饒多なる社會生活とを一つの綱で引き締める國家的統一がない。換言すれば、皇道に君臨すべき皇道がないのだ。搾取する専横者を打ちのめし攘ひ除けるに、神意の絶體力を以てせず、民意の相對力を以てする所に横しまがあり、王道の不徹底がある。そして此の横しま、此の皇道の不徹底が、支那四百餘洲を絶え間なき政權爭奪の禍亂の渦中に投じ來つたのである。故に支那四百餘洲をかくの如き政權爭奪の禍亂の禍中から救ふものは、王道に非ずして、實に皇道でなければならぬのである。

王道は文字の上で無私を説くけれども、絶體無私の本質が明かにされない。そして王道が絶體無私の本質を明かにするや否や、それは皇道に吸收され、その宗教的要求は直ちに政治行動となり、その道德的要求は直ちに經濟的活動となり、理想は現實と一元的に合體する。斯の境地を覘つたのが陽明學派であるが、それが支那に於て生かされず、却つて日本へ來て始めて活路を得たのは、日本は昔から皇道の實現された神國だからである。王道は結局、皇道に救ひを求めよる外に、それ自身の活きる路はない。支那に皇道の實現されるのは、いづれにせよ今後に屬する問題だが、彼れをして此處に到らしむるの途は、兩國民族間におけるかくの如き文化

的理解に依るより外はない。

皇道の宣揚は、此の意味に於て、今や武力の問題であるよりも、より多く文化の問題でなければならぬ。皇道に據つて武力的に支那を叩きのめさうとする事が、支那を活かす途でもなければ、皇道を宣揚する所以でもない。對支問題に關する限り、皇道日本の生きる本道は、最早武力的膺懲ではなくして、文化的救済である所以を知らねばならぬ。兩國が互ひに武力的に相對峙するのは、兩國が互にその文化の本質的理解を缺き、眼前の利害問題だけに眼が眩んだ所爲である。日本が暴戻支那を膺懲せよといふ立前で、武力を持つて立てば、支那は横暴日本を打倒せよといつて武裝して立つだけである。そしてその結果はどうなるかといへば、支那は少しも膺懲されず、日本は徒らに奔命に疲れ、米露等の乗する所となるだけである。

敢て武力を棄てよといふのではない。對支發展に關する限り、武力を立て前とせず、文化的救済を立て前とせよと謂ふのである。

勿論、文化的救済といふからには、先づ日本自らが名實共に皇道日本に建て直らなければならぬ。國の政治に與るものが、財閥の走狗であつたり、政權爭奪に日を暮らしてゐる様では、

支那と何の撰ぶ所もなく、支那の救済者たる資格がない。

印度に對しても同様である。日本は印度に對しては支那ほど經濟的に密接な關係はないが、文化的には支那に優るとも劣らぬほどの深い關係の下に、古來存立を續けて來た。

印度に發生した佛教文化は支那を経て日本に移植された。而して此の佛教文化は、本國の印度よりも、途中の支那よりも、日本において始めてその滿腹の繁榮を遂げ、永くその道統を持續して今日もなほ絶たず、世界唯一の佛教國として、人類の間に印度文化の譽れを高からしめてゐるのは、是れ偏へに皇道の賜物でなければならぬ。蓋し、大乘佛教を單に文の上において文學として活かし得るだけでなく、生活において、行動として倫理的宗教として生かし得るの道は、世界の中、唯皇道あるのみだからである。そしてガンデイの宗教が實に此の意味の倫理的宗教なのである。この意味に於て、日本に皇道の絶えざる極み、印度文化は滅びないのだ。此の故に、支那を救ひ、支那を活かす者が皇道日本である如く、印度を救ひ、印度を活かす者も亦皇道日本でなければならぬ。近代西洋の機械工業文明に對するガンデイの非協同運動は同時に吾等皇國農民同盟の都市文明超刻運動であり、北方支那の村治派運動は同時に吾等の村

治派運動であり、滿洲王道樂土建設運動は、同時に吾等の皇道日本再建運動でなければならぬ。是等の運動は、白色帝國主義の政治的及び經濟的壓力を、東洋の天地から刎ね除ける事において、其の動向を同じうする。されば、是等の運動には、白色帝國主義打倒の共同戦線の必要から、皇道を中心とする一貫した組織が與へられなければならぬ。此の皇道を以て組織されたアジア民族共存互助厚生的一大同盟國を、今假りに「皇道的アジア聯邦」と名づける。

以上は皇道日本がアジア聯邦の盟主たるの資格を語るものである。併しながら、皇道は無我の大道である。無我の大道は仁者の道である。「仁者は己れ立たと欲して人を立て、己れ達せんと欲して人を達す」故に皇道日本が皇道を支那に立てんと欲せば、支那の心になり、仁愛の道を立て、王道を立てねばならぬ。日本が王道に同化することによつてのみ、王道が皇道に吸収されることの道理を辨へねばならぬ。皇道日本が皇道をいきなり支那に強いるのは、親の心をいきなり子供に強いるものである。親が子供に云ふ事を聞かせようとすれば、親は先づ子供の心になり、子供の心の中に溶け込まなければならぬ。この親の無我即ち慈悲が、子供の心をして親の心にまで吸収し得るのである。之れが眞の皇道であり、此の王道を東洋に復興するの

が、アジア聯邦の盟主たる皇道の使命でなければならぬ。

### 三 皇道的新世界の創成

皇道は「之レヲ古今ニ通シテ膠ラス、之レヲ中外ニ施シテ悖ラサル」世界人類の大道であるから、吾等の皇道日本再建運動の究極の意味は皇道的新世界の創成でなければならぬ。

皇道を世界に敷くは、建國以來日本民族の歴史的使命とする所である神武天御即位の御詔勅に「上は則ち乾靈國を授くるの徳に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘む。然る後六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ふて宇となす亦可ならずや」とある。

吾等は土地が狭いからとか、人口が過剰だからとか單なる經濟的な要求から、滿蒙支那印度にまで手を延ばし、世界を統一しようといふのではない。日本民族の海外に發展せんとする歴史的使命は、實に皇道を世界に敷かんとするに在る。人類はキリストが、ソクラテスが、釋迦が、孔子が人類の救済者であると思つてゐた。しかし是等の救世者によつて、人類は結局何の救ひを得たか。却つて是等の救世者が日本へ來て、皇道によつて始めて救ひを得たのではな

つたか。

是の因縁を知る者は、ひとり皇道だけであつて、日本人の間においてさへ、この一大事因縁が閑却されつゝある。況んや他國人の間においてをやだ。現代日本人の一大不幸は、この世界人類の救世者の上の大救世主が、自國に直く眼の前に、しかも神ながらに、儼として存在してゐるのを見失ひ、此の國に世を救ふ者なしと思ひ、他國に之れを求めつゝあることである。世界の他の人類も、今や自國に斯くの如き「救世者の上の大救世主」を求め得ず、他國に之れを求めてゐる。自ら世界の先進國民を以て任じたキリスト教國の民衆共が、今やキリスト教によつて救はれ得べくもない大苦惱を嘗めつゝあるのだ。現代人類の大不幸は、救世者の上の大救世主——皇道を見失つたことである。乃ち今日の世界人類は、人類の唯一人の父——皇道を探し求めてゐるのだ。日本人が是の父を見出し得た時に、全日本人が救はれ、人類が是の父を発見し得た時に、全人類が救はれる。一日早く発見すれば一日早く救はれる。それまでは日本人も世界人類も、修羅場の巷に彷徨することあるのみだ。どうして人類は是の父を見失つたかそれは營利に汲々として他を省る暇の無い餓鬼道の小人の眼に入るべく、その慈悲の大御姿



は餘りにも大きすぎるからだ。太陽は日々暗を照らし、空氣は刻々生を恵めど、此の廣大無邊なる徳を徳と思はず、三文の價値なしと思ひ居れるが如きものである。是れ他の毒藥唯物文明を飲み、本心を失へるが故である。本心を失はざる者のみが、皇道にめぐりあへるのである。此の意味で、皇道の大御姿を最もよく説明し得た救世者は釋迦である。妙法蓮華經如來壽量品において、彼れは次の如く説いてゐる。

「其の人諸の子息多し（中略）事の縁有るを以て遠く餘國に至りぬ。諸の子後に他の毒藥（茲では西洋文明の意）を飲み、藥發して悶亂し、地に宛轉す。是の時其の父還り來つて家に歸りぬ。諸の子毒を飲んで、或は本心を失へる、或は失はざる者あり。遙かに其の父を見て皆大に歡喜し、拜跪して問訊すらく。善く安穩に歸りたまへり。我等愚痴にして、誤て毒藥を服せり。願くば救療せられて、更に壽命を賜へと。父、子等の苦惱することは是の如くなるを見て、諸の經方に依つて、好き藥草の色香美味皆悉具足せるを求めて、擣き徒ひ和合して、子に與へて服せしむ。而して是の言を作さく。此の大良藥は色香美味皆悉く具足せり。汝等服すべし。速かに苦惱を除いて、復た諸の患ひなけん。其の諸の子の中、心を失はざる

者は、此の良藥の色香俱に好きを見て、即ち之れを服するに、病ひ盡く除り癒えぬ。餘の心を失へる者は、其の父の來れるを見て、亦歡喜し問訊して、病ひを治せんことを求むと雖も、然も其の藥を與ふるに、而も肯て服せず。所以はいかん。毒氣深入つて本心を失へるが故に此の好き色香ある藥に於て、美まからずと謂へり。父是の念を作く。此の子愁むべし。毒に中られて心皆顛倒せり。我を見て喜んで救済を求むと雖も、是の如き好き藥を而も肯て服せず。我れ今當に方便を設けて、此の藥を服せしむべし。即ち是の言を作く。汝等當に知るべし。我れ今衰老して死の時已に至りぬ。是の好き良藥を今留めて此に在く。汝取つて服すべし。差えじと憂ふること勿れと。是の教へを作し已つて、復た他國に至り、使を遣はして還つて告ぐ。汝が父已に死しぬと。是の時諸の子、父背喪せりと聞いて、心大いに憂惱して、是の念を作く。若し父在しなば、我等を慈愍して能く救護せられまし。今は我を捨て遠く他國に喪したまひぬ。自ら惟るに孤露にして復た恃怙なく、常に悲感を懷ひて心遂に醒悟し、乃ち此の藥の色香味ひ美きを知つて、即ち取つて之れを服するに、毒の病ひ皆癒えぬ。其の父子の悉く己に差ゆることを得つと聞いて、尋いで便ち來り歸つて、咸く之れに見えしむ。

かくの如くにして本心を失へる日本人及び世界人類をして、咸く皇道に見えしめ、その化育に浴せしむるのが、即ち「吾等の皇道的新世界の創成」である。

此の目的を達するために、吾等が取らねばならぬ組織建直しの大原則は農本民族協同主義である。人類は今太陽の尊さを見失つた如く、農業の尊さを忘れたのである。農業が人類生活の大本であるといふ此の色香味美なる報本反始の良薬は、地上の一切の苦惱を皆癒するものであるが、而し商工本位の都市文明に本心を失へる現代人は、肯て之を服まうとはせず、「美くない」と謂つてゐる。

「我今當に方便を設けて、此の薬を服せしむべし」だ。即ち「農村は衰老し死滅せり。最早都市文明を支持せず、又都市に食糧を供給せざるべし」と。

此の方便によつて、都市文明の毒薬によつて本心を失へる者共をして、自ら孤露にして復た恃怙なきを悲觀せしめ、農業の尊さを醒悟せしめなければならぬのだ。

都市人といふものは、雀の涙ほどの金を出しさへすれば、食糧は何時でも簡単に上臈の上に載るものと考へてゐる。その三度の食事によつて生命が支持されてゐる日々の大恩を思はず

反つてこの生命の支持者たる農業を引合はぬ商賣として輕蔑してゐる。利害を超越して、尙且つ存在する農業の尊さを見失つてゐる。

かくの如く本心を失へる都市人をして本心に立ち還らしむる方便として、都市人に對する食糧の斷絶（滅度）が絶體に必要である。

農民は世界の父である。父が利害打算を超越して、能く我が子を生育するが如く、農民も亦利害打算を超越して能く人類に奉仕する。母が我れを忘れて子の成長を思ふが如く、農民も亦社會の親馬鹿チャンリンである。佛である。渺くとも佛の道を遠々劫から實踐し來つた所の本化地涌の菩薩である。

都市人に對するその糧道斷絶は、壽量品に謂ふ所の「醫の善き方便を以て、狂子を治せんが爲めの故に、實には在れども而も滅す」と言ふのである。農業は永久に實在して死滅することはないのだが、方便を以ての故に死滅と言ひ、糧道を一時斷絶するのである。

「我れも亦これ世の父」とある。その父が農民である。「諸々の苦患を救ふ者」である。「凡夫の顛倒せるをもて、實には在れども而も滅す」と言ふのである。常に我れを見るを以ての故に

而も矯恣の心を生じ、放逸にして惡道の中に墮ちなん」とある佛語を味到せよ。茲に皇道の大慈悲があるのだ。

皇道は人類救済の原理である。世界人類を擧げ、農業に従事せしめようとするのではない。又農業者をして一切の世務に當らしめよといふのでもない。「我れ常に衆生の道を行じ道を行ぜざるを知つて、度すべき所に隨應つて、爲めに種々の法を説く」のである。觀世音菩薩普門品である。その衆生救済の意圖は、衆生を同一の型に箝め込もうとするのではない。衆生をして各々其の所において協同し、安堵を得しめんとするのである。之れが如來の大慈悲による協同生活の實現——取りも直さず皇道的新世界の創成である。

此の故に皇道の國際的生活單位が民族主義なのである。各民族をして民族固有の文化形態（言語風俗習慣）の獨自性獨立性を認めての上で、その所において協同し、各々をして安堵を得しめんとするのである。

此の意味において、滿洲國の建設は佛國土の建設——最も皇道的なる王道樂土の建設を意圖せるものでなければならぬ。民族協和主義がそれである。民族協和主義は、一民族の文化を以

て、他民族を一色に塗り潰さうとするのではない。民族がその各々の民族的固性を保持することにおいて、協和結合しようとするのである。之れは實に王道アジアの縮圖的聯邦形態たるのみならず、同時に亦吾等の實現せんとする皇道的國際聯邦の理想形態でなければならぬ。

## 2 西洋對東洋の文化抗爭

### 一 東洋文化擡頭の必然性

昨今我が國無產運動陣營内における指導理論の大動搖は、善い意味にせよ、悪い意味にせよとにかく吾等の日本民族主義に時代の大勢が押し寄せて來た事を語るものである。社民黨の分裂——國家社會主義への轉向——それは確かに一部のリーダーシップや政權獲得病者丈の舞踏ではなく、大衆的現實の要求からの動きであらう。それは今まで忘れられてゐた「日本」なるものゝ再認識と、隨つて日本人（或は日本民族）なる者の新發見からの止むに止まれぬ國民

的要求の動きであらう。併しながら日本の大衆よ、フツツシヨとか國家社會主義とか云つてゐる有象無象のデマに欺されるな。彼等はまだ眞の日本民族主義には遠いのだ。政權獲得の爲めのその偽裝には、日本の大衆的現實を正視し、日本の大地の上に立ち上らうとする者の誰れでもが感じずには居られない齒の浮く様な薄つべらさがある。人間の組み立てる理論といふものは、その組み立てる者のシテユエーシヨ（居所）が先づ決定して、然る後物の遠近法が決定する。日本の現實をシテユエーシヨとして物の遠近法を決定する場合と、歐米諸國の現實を、シテユエーシヨとして物の遠近法を決定する場合とは、そこに決定された二つの遠近法において大變な相異がある。現代日本の論客が歐米諸國を近代文明の先進國と考へる事には少しの異論もないが、彼等が歐米先進國をその先進國たる故を以て、立國の立論のシテユエーシヨをも歐米諸國の現實に取り、その歐米の現實からの遠近法を公式として、日本の現實を之に當て箝めようとするに至つては、實に滑稽千萬である。昨今日本のフアツシヨ運動は、ヨーロッパのフアツシヨ運動に由るヨーロッパのフアツシヨ——外國の國民主義であつて、それはまだ日本の土に足が着いてゐない。即ちそれは日本の土から立ち上つた日本の國民主義では

ない。だからそこにはまだ、日本からの遠近法としての遠近法の確立がない。況んや同一シテユエーシヨンの遠近法も、時代の相異によつてその點景に相異を生ずるをやだ。

マルクスの「階級闘争」や「プロレタリアの獨裁」は前世紀資本主義第二期の段階即ち近代資本主義文明の成長發展期において、イギリス文明の大衆的現實をシテユエーシヨンとする遠近法として、獨自の價値と權威とを保持する理論であつて、現代の資本主義第三期の段階即ち資本主義文明沒落期において、殊にこの現段階における日本の大衆的現實をシテユエーシヨンとする場合において、その遠近法の誤謬歴々たる事は、夙に、その公式の實踐に忠實なる日本のプロレタリアートが、階級闘争の實際において體驗しつゝある所である。資本主義沒落期における階級闘争は、資本家をして産業の合理化を強行せしめ、徒らに労働者を失業へと驅逐する所のプロレタリアの敗北主義となつた。勞資協調の社會民主主義の如きも、イギリスの如き工業國においてのみ第一義的指導理論たり得たが、それさへ今その本國のイギリスにおいても、指導的權威を失墜した。況んや日本（廣く東洋）の如き農民を人民の最大多數とする農業國においては、多數決を權威とするプロレタリア議會主義の敗北に非ずんば、農民への欺瞞に



外ならぬ。

資本主義が行き詰つたといふ事は、要するに都市本位の中央集權的工業主義文明が行き詰つた事である。随つて都市プロレタリアート（工業労働者）を中心とする共產主義乃至社會民主主義の大衆指導理論も亦敗北主義たらざるを得ないのは當然である。此のプロレタリアの敗北主義は、プロレタリアが資本家に敗北した事を語るものではない。近代の都市中心的工業文明が農業搾取の最大限度に達した事を意味するのだ。一般農民の購買力過少は、都市工業の生産過剰を必然ならしめ、一般産業を不況に陥れる。産業の不況は労働者を失業せしめ、失業労働者は歸農を餘儀ならしめられる。是れは工業の農業搾取に對する農業の工業への復讐である。東洋の農業文明を征服した西洋の工業文明が、今度は東洋農業文明の支配を受けねばならぬ時が來たのだ。農村の咽喉を押へてゐた都市が、今度は農村に咽喉を扼められる時代が來た！ 茲に日本民族主義の勝利の必然性があり、世界のコペルニクスの轉廻がある。

此の意味で都市中心、工業労働者本位のマルクス主義インターナショナルに立つ階級闘争の時代は過ぎ、現代は正に資本主義都市文明に對する民族的農本的文化闘争の時期に入つたのだ。

東洋文明と西洋文明とは、根本的にその文明の性質を異にする。東洋の文明は土の文明であり、農業文明であるに對して、西洋の文明（近代の都市文明）は金の文明であり、工業文明である。農業文明は「天道を賛成する」文明であるに對して、工業文明は「自然を征服する」前者は自然を母胎とするに對して、後者は人工即機械を母胎とする。而して眞の意味での無産者の文明といふものは、農業文明の外にない。蓋し、地水火風等の生産條件は、如何なる無産者にも恵まれるものであるが、機械といふ生産條件はブルジョアに限られる（機械が共産化した場合でも、それが農本的存在たらずる限り、そのブルジョアの性質には變りはない）而して土地の財産化は即ち土地のブルジョア化であり、機械化である。不勞所得する地主は、土地を自然と見ず、農民と合せて生産の一種の機械と考へる。だから土地が機械としての効用と利潤とを發揮しなければ、この地主は何時でもそれを手放したがる。然るに眞の耕作農民は、利潤を得ると得ざるとに拘らず、土を手放したからない。土から離れ得ない。農民に取つては産物の生産が直接の目的であつて「利潤」は農業の第一義的本然的要求ではない。是れ土地は本質的に耕作者の所有に歸すべきものだといふことを立證するものである。都市の工業労働から失業

したプロレタリアの落着く先きは農である。是れ無産者の究極の生業は農の外に無いからである。内地に農耕の土地が無ければ海外に之を求めねばならぬ。是れは明かに民族的要求である。日本の民族主義は、此の意味で農を本にして新たに日本の大地から弾ね上る所の民族的生命線獲得の聲でなければならぬ。

かくして都市の經濟恐慌と資本主義産業の行詰りとは、工業労働者をして階級闘争を不可能ならしめ、マルクスのインターナショナルの戦線を逸脱せしめる。而して此の資本主義第三期の不況は、産業資本家と労働者の共食ひを廢止させる事によつて、産業資本家と労働者とは協調し、グルになり、その全面的壓力を農村の上に載せかける。プロレタリアの資本家に對する勞銀値下げ及び失業解雇の反對は、原料生産者たる農民への經濟的壓力を倍加する。故に此の資本主義没落期の現段階に於て、プロレタリアが農民の前衛的役割に立つ方向へと、無産運動の階級闘争の戦線を轉換しない限り、ブルジョアジーとプロレタリアートも亦農民の敵である。茲に昨今のファシヨ運動と呼ばれる都市中心中央本位の國家社會主義の欺瞞がある。而してプロレタリアートが農民の前衛として立つ事は、最早單なるマルクスの階級闘争ではな

く、それは明かに原料生産者即ち貧農本位の農本主義文化抗爭の態度である。かくの如き原料生産者本位の農本主義文化抗爭の態度は、資本主義現段階においては、プロレ

タリアートの上加へられた資本の壓力が更に農民への壓力に轉化するといふ大衆的現實の認識把握に出發する。此の壓力は大地に支へて逃げ場を失ひ、その壓力に正比例した彈力に轉化して大地から彈ね上る。この彈力こそは、農民的自給經濟のスワラヂイである。或は民族的自產自製の排外貨運動である。西洋の工業文明によつて征服された東洋の農業國が擡頭して、搾取文明の虚偽の機構を彈ね返す彈力的文化抗爭の大信力である。

此の意味で資本の壓力は今やこの新しい經濟的文化的抗爭の前衛闘士の拍車となつた。經濟恐慌産業不況がブルジョアジーをしてプロレタリアートを工場から追ひ出させる。併し如何なる經濟恐慌も産業不況も、農民を大地から追ひ出す事は出来ない。是れ工業労働者は資本主義社會に於ける機械の附屬物であり、その機械の所有者たるブルジョアジーの附屬物であるに反して、本來ブルジョアジーは農民の附屬物であり、或は寄生蟲であるからである。ブルジョアジーの産業及び經濟は、農民の生産力及び消費力に支配される。ブルジョアジーの存在といふも

のは、農民にとつて經濟的壓力ではあり得るが、本質的には決して經濟的支配力ではない。此のブルジョアジの經濟的壓力に堪へかねて、農業を棄てブルジョアジの搾取機構に加擔し工業文明に降参したのが（日本及東洋の農業國の現實に關する限り）近代のプロレタリアートである。だから、ブルジョア産業の不況時代に失業する者は都市プロレタリアート及び都會的農民である。いかにブルジョア産業が不況であつても、眞の農業に失業といふものはない。もしあるとすれば、それはブルジョア機構に降参したブルジョアの農業だけである。

都市プロレタリアートはブルジョア文明に降参した意氣地のない非農民の一團であるだから無産運動が即ち農民運動となり、プロレタリアートが農民の前衛的役割を果す様にならない限り、英國の無産運動がそのブルジョアの性質から脱却することが出來ぬ様に、日本の無産運動も亦たとへ如何に國家社會主義といふ看板に塗り替へて見た所で、ブルジョアジの走狗的役割を果すだけに終るだらう。

英國は工業國であり、農業搾取を立國の國是とするより外には民族的な或は國家的な發展が期し得られない所の、殆んど生れながらのブルジョア國であり、山賊海賊の國であるから、そ

の無産運動が同時に農民運動たり得ないのは是非もないが、そして英國没落の根本の原因が此處に在ると考へられるが、元來農業國たる日本の無産運動が、都市プロレタリアートを中心にしてゐる社會民主主義とか國家社會主義とかでは、何としても足が地に着かない。宙に迷つたものである。それでもそれがマルクスの公式一天張りでなく、日本の大衆的現實に忠實にならうとする點は、日本のマルキシストやコムニニストがロシアのコミンテルンなどを中心にしてゐるよりよいかも知れぬ。日本の無産運動の指導理論は何よりも先づ日本の大地から生れ出ねばならぬ。

## 二 機械工業の搾取性

資本主義第三期の現段階に於ける最も著しい大衆的現實は勤勞否定の精神である。勤勞否定はブルジョアの機械文明の本質であり、特徴であり、その一般的精神である。額に汗し、手にタコを寄せ、ヒビ赤切れを切らせて生活の必需品を生産するのが勤勞の本質であり、特色である。然るに近代のブルジョアジーは斯様な勤勞の嫌惡者であり、輕蔑者であり、廢止者であ

る。勤勞を嫌惡し、廢止して、尙且つ富を獲得するの途は、かくの如き勤勞者の勞働及びその勤勞の結果を仲介取引販賣するブローカー即ち都市商業者たるの外はない。都市商業者を一括して實業家と呼びなされてゐるけれども、實は彼等は勤勞の忌避者であり、否定者であり、ブローカーであり、嘘業家である。嘘を業とするのが近代の實業家である。農産物（乃至加工産物）の取引上、嘘をつかなければ、絶対に富を集める事が出来ないのが近代の商業である。嘘をつき人を誤魔化す術に巧みであればあるほど、多くの富を集められ、その反對に嘘をつき事の不調法な正直者や、人を誤魔化す事の不器用な善人であればあるほど、富を集められず、貧乏する。

是等近代の商業者の間では、富を集める事の上手な者が惻巧者で、その反對に下手な者は馬鹿者である。だから、富を集める事の下手なプロレタリアは馬鹿者で、その反對に富を集める事の上手な者はブルジョアである。即ち、ブルジョアは近代の都市生活における成功者でありプロレタリアは敗北者である「ブルジョアとプロレタリアとはその生産形態及び經濟關係において利害相反一致しない」などいふ事は、舊式な唯物論者の愚痴であり、時代錯誤の社會主義の

泣き言である。ブルジョアとプロレタリアとが利害一致しないどころか、ブルジョアの好況時代にはプロレタリアも好況な事は、餘りにも自明な經濟關係ではないか。近代の都市商工業者の間における此の二つの階級者は、本質において農業労働の廢棄者であり、金持になつて樂をしたといふブルジョア生活の禪讀者であり、随つてその生活態度の根本においては、兩者利害一致する同類者であるのだが、人間の性質として、ブルジョアになる者は天性人を騙すのが上手であり、プロレタリアは人を騙すのが下手であり、一は惡人系であり、他は善人系であり前者は利口者であり、後者は馬鹿者であるといふ宿命的存在たるに過ぎぬ。その生産形態及び經濟關係において、絶対に根本的に利害相一致しないのは、額に汗して勤勞する所の農業者とその農産物の搾取なしには絶対に生活に不可能とされる是等ブルジョア及びプロレタリアの集團によつて組成されたる近代の都市商工業者との經濟關係である。

近代のブルジョア及びプロレタリアは、勞働に關して、根本的に「勞働は神聖也」といふ思想も「稼ぐに追付く貧乏なし」といふ考へもない。それは本質的には古代的農民の勤勞精神による考へである。プロレタリアは本質的に勤勞の忌避者であるから、さういふ精神の所有者で



あり得る筈がない。只、それを必要とするのは、農民の勤勞を搾取の第一條件とするブルジョアジーだけである。現代では農民の勤勞精神は、ブルジョアジーの搾取精神に轉化されつゝある。農民はブルジョアジーによつて、實に物質的に搾取されてゐるだけではない。今や完全に精神までも搾取されつゝあるのだ！ 近代ブルジョアジーの虚偽文明の搾取的全面の壓力が、農村の上にのしかゝつてゐる。

それでも「稼ぐに追付く貧乏あり」が、都市プロレタリアートだけの生活の現實であり、その勞働否定の精神である間はまだよかつた。ブルジョア文明が次第に農村を侵蝕し、農業の經營方法が家族的傳統を離れて、ブルジョア機構化され、機械的企業化され、或は機械工業化さるゝに至つて、近代の農民殊に資本主義現段階に於ける日本農民の大部分も亦都市プロレタリアート同様な經濟關係の下に置かれる様になつたから、その傳統的勤勞精神たる「稼ぐに追付く貧乏なし」が廢棄され「稼ぐに追付く貧乏あり」の現實にまで轉化した。農民はブルジョア文明のために、勤勞精神まで搾取され、スボイルされたのである。農民は昔は働きさへすればよかつた。然るに今は働けば働くほど損になるといふ經濟的現實を如何ともする事ができな

い。多收獲を志し、晝夜兼行寢る眼も寢ずに、大量生産をするればすほると農産物は益々その價格を低下され、肥料代も拂へないといふ引き合はない經濟的現實を如何ともする事ができない。

かくの如き近代農民の經濟的現實は、農民をして働く事は悪い事であり、懈ける事が善い事であるといふ思想を抱かせずには措かない。そして是れはブルジョアに取つては實にその本質的な精神であるにも拘らず、農民に是の思想を起される事は、實にブルジョアの致命傷である。何となれば此處に至つては最早ブルジョアは其の生存條件の第一義たる搾取を不可能とされ、經濟的に没落を必然ならしめらるゝからである。此の働らく事は損だといふ大衆的現實こそは、實に資本主義文明行き詰りの現實である、ブルジョア没落期たる特徴である併しながら此のブルジョア没落期の特徴は、現段階において始めて現はれたブルジョア文明の特徴ではない。それは抑もブルジョア文明の中樞たる近代機械工業の根本精神である。近代の機械工業は勤勞廢業のブルジョア精神の産物である。近代機械工業は勤勞を驅逐し或は勤勞せずして、成るべく多量の産物と利潤とを獲得しようといふ極めて横着な極めて狡猾な勞働

否定と同時に、勞働搾取のブルジョア精神の產物である。かくの如き惡性なるブルジョア文明即ち機械工業文明をいきなり無批判に是認し、これに加擔したのが、抑も農業者の最大不覺である。農業文明とブルジョア文明とは、本質的に利害相容れないものである。故に農人はブルジョア文明に反抗し、之れを超刻しない限り、農人の浮び上る瀬がないと同時に、人類の救はれる日は來ない。そして吾等はいかくの如き農人のブルジョア文明の超刻は即ち近代機械工業文明の否定或は農本的機械文明の再造である事を、ガンデイと共に、最も深刻に自覺し意識しなければならぬ。

此の意味で吾等はガンデイの近代の機械工業文明に對する非協同の農民運動に絶大の敬意を表する者である。今後に於ける農民解放運動は、プロレタリアを中心とするマルクス主義の機械工業化的階級闘争とは全く手を絶ち、對勞的手工業を加工の本體として自給自足する所の農人の自産自營をモットーとし、營利的機械工業の製產品は一切之れをポイコットする非協同戦線を張るべきである。而して金貨本位のブルジョア經濟に對しては不服従を聲明し米價本位（日本にては）の經濟を立つべきである。此の農人の自産自營の徹底確立によつて、始めて是れ

まで都市に喉首を押へてられ居た農村が、都市の喉首を抑へる事が出来る。此の用意と覺悟とができ、然る後その農本的機構の中に機械工業を溶け込ませることによつて、機械の搾取性を剝奪し得るであらう。

農村において斯くの如き自給自足の經濟生活の基礎確立すれば、必ずしも軍事行動に出ずして、ブルジョア文明と戦つて之れを克服する事が可能である。何となれば此の農民解放の戦ひにおいては、農民は固より他の産物を必要とせず、況んや人の産物を搾取する意圖は持たぬからである。

斯うなれば、ブルジョア軍はその本性を露骨に發揮してプロレタリアを買収し、之れを手先として農産物を掠奪に来るかも知れぬ。是の農業對工業の文化抗争において、都市プロレタリアートは果して農民の前衛たり得るであらうか。ブルジョアジーに反逆する事がプロレタリアートの建前であるとすれば、プロレタリアートは農民の前衛とならねばならぬ。ブルジョアジーと妥協するのが建前であるとすれば、ブルジョアジーの手先たらざるを得ないであらう。吾等のイデオロギーから云へば、プロレタリアートこそ農民に據つて立つ所の農民の前衛でなけ

ればならぬ。プロレタリアが農民の前衛たる場合においてのみ、プロレタリアは農民の搾取者でなくなる。

### 三 維新前後の民族史觀

前述の如く、已にマルクスの時代と現代とは世紀を異にし、随つて資本主義工業文明は著しくその形態を異にしたばかりでなく、英國と日本との大衆的現實なるものは、之を考察批判の現實的對照として見る時に、一はブルジョア國であり、他は農民國であつて、互ひにその社會の成員と立國の基礎を異にし、その國情において大きな開きがある。日本をブルジョア的工業國と見るのは、日本の少數成員たる都市住居者ブルジョア及びプロレタリアを中心とした現實意識からであつて、それを以て全日本成員の現實と連斷する所に、都市中心主義者の獨斷があり、西洋追從的公式主義者の謬見がある。

吾等は資本主義の現段階において、農民國日本の第一義文明即ち農業文明を考察批判の對照として、第二義の從屬的工業文明の行詰りを打開する根本方策とその指導理論とを更に進んで

立體的に創設展開せねばならぬ必要に迫られつゝある。

吾等をして先づ明治維新前後の日本文明の指導精神について考察せしめよ。

佐幕か倒幕か——それは徳川の幕末、封建制度治下の浪人志士の階級闘争の合言葉であつた徳川三百年の太平が続き、武士は漸く戦争から失業状態となり、その民衆の指導階級の地位の失格を來さざるを得なくなつた。戰國の世なればこそ、武士の存在理由があり、武人は需要も多く、随つて世人の尊敬にも價ひした。士農工商といふスローガンは、一體、我が國社會秩序の基礎條件だが、戰國時代の人間の需給關係による經濟原則から割り出された評價の格付とも見られる。武士といふ指導階級に立つ人間が需要の最高位を占めてゐたといふパロメーターでもある。

それが泰平の世になると、則ち戦争が無くなるから、武士は社會の需要線に異狀を來し、社會支持の必要線から蹴落される。各藩では武士は藩の穀つ潰しになるから「武士は食はねど高揚子」であつた。農工商に對する搾取と苛斂誅求とは、士道の邪道に外ならぬから、平和は實に武士に取つての致命的世相である。平和の世に武士階級が存在は、百姓町人等の大衆層への

壓力である（此の武士の百姓町人等の大衆層への壓力が、武士階級の没落となり、町人ブルジョア階級の擡頭となり、此のブルジョア階級の資本の獨裁が、プロレタリアートへの壓力となり、プロレタリアートへの資本の壓力が更に轉化して今は農民に對するブルジョア及びプロレタリアの全面的壓力となつたのだ！）民衆は平和を好む。然るに武士は戦争を好む。世の中に戦争が無くなれば、則ち食へなくなるのが、武士である。反對に武士に戦争ばかりされて居ては瘦せてしまふのが農民である。兵農分離が武家政治の致命傷である。

藩侯が民政を重んじ、民望を聚めんと欲せば、藩政合理化は武士の失業を餘儀なからしめる軍備縮少と一將功成つて萬骨枯る種類の特權階級擁護の戦争の反對とは何時の時代でも平和を愛する農民労働者の切實な要求である。平和の時勢に武士といふ不生産穀つ潰しが一人でも少なくなれば、それだけ農民の負擔は軽減されるといふ經濟關係は、二より一引く一残るといふ算術の公式と同様、動かすべくもない藩政の公式であつた。而も此の軍縮の公式に逆行して、武士は大小をダテに帶込む無聊に堪えかね、漸く社會から無用の長物視されつゝあるに氣を腐らし、元來民衆の楯となり、民衆生活の前衛たる建前に於いてこそ揮ふべき日本刀の鋒先が「

武士の權威の爲め」の見せしめとして、屢々逆に民衆の方へ向けられた。この見せしめこそ、武士の失業の見せしめに外ならなかつた。

藩侯から與へられた碌を食み、米は天から降るものと心得「米は地から——農民の手から」といふ大衆的社會認識を缺いてゐた彼等が、一旦失業して浪人すれば、則ち木から落ちた猿であつた。民意を輕蔑する事に慣れてゐた彼等は、民衆を如何に指導すべきかの指導理論を構成する文化的實力を持たず、民衆の前衛であり得なかつた。彼等は徒らに百姓町人と衝突して徒らに社會の不信を招いた。

上に用ゐられず、下に容れられず、只管没落の過程を辿りつゝあつた彼等は、則ち不平滿々の徒であつた。何とかして持前の武力を振ふべき機會を捜し求めてゐた彼等だつた。そこへ國學者が現れて、幕府御用の漢學者の指導精神に楯を突き、尊皇大義名分を説き、天に二日なく地に二君ましますべからざるを説き、皇政の古へに復すべきを説き、浪人武士の不平を吸収し皇政の名において古代日本の農政を説く事によつて農民の前衛となつた。此の國學者の尊皇論に與する事によつて、浪士達は新たにその生きる方向と理論とを得たと同時に、その死所をも



つたのである。

是の勢ひ侮るべからざるものあるを知つて、敢からず危惧を抱いたのは幕府だつた。尊皇は即ち倒幕形態を取るに至つたから、當然の處置として幕府は國學者並に浪人尊皇派に對して彈壓の手を下した。此の彈壓は一部の浪人をして反動的氣勢を捲き起さしめた。飯に食ひはぐれたひもじい浪人根性も手傳ひ、反動派浪人は院外團式に佐幕の旗を押し立てた。倒幕か佐幕か——左か右か。

亂世を待ち設てけゐた退屈な浪人に、働き榮えのある機會が恵まれた。無用な人間が俄かに有用になり、功名手柄の機會が與へられた。善につけ惡しきにつけ、戰場で死ぬ事は疊の上で死ぬよりも名譽なこととされ、浪士達は活氣づいた。左傾と右傾のチャンバラ時代、赤化彈壓暴力團捕物時代の出現である。

そこには勿論、念の入つた指導理論も、明確な國際的客觀的情勢の認識把握もあつたわけではない。藤田東湖一派の水戸學は反國際的な攘夷論を構成し、佐藤信淵一派の農政復古派は滿蒙露支統一による大亞細亞經國の雄圖を策して當局に睨まれたがの見物だが、之れ等は只、

永い間の徳川の鎖國主義——幕府の愚民政策のおかげで、日本の知識階級が如何に國際的に無知暗昧であつたかを語るに過ぎぬ。併し、國際關係に對する國是外交方針は、幕府の肚では決まつてゐた。開國の止むべからざる情勢は迫つてゐたのだ。然るに民間知識階級をして過激な攘夷論に向はせたのは、幕府自身の極端な秘密外交主義、一般的鎖國主義による愚民政策の破綻である。嘉永年間浦賀の沖に黒船現れ、外交問題迫ると見るや、國論一時に沸騰、上下混亂して拾收すべからざるに至つたのは、蓋し幕府の傳統的鎖國主義の破滅である。だから井伊大老の開國主義の斷行は幕府の根本政策の崩壊であり幕府政治の終末となつた。幕府は決して尊皇攘夷の運動によつて倒れたのではない。尊皇攘夷の國論を喚起せずには、措かなかつた所の幕府自身の政策によつて倒れたのである。英國はガンヂーの國民運動によつて倒れはしないだらう。併し、印度人をして其の印度の獨立を渴望せしめ、國民運動に熱狂せずには居られなく仕向けた所の資本主義機械工業文明の指導精神の根本的缺陷によつてその没落を餘儀ならしめられつゝある。

それはとにかく、尊皇攘夷と、進取開國の二大精神の大旋風の中から維新日本は生れ、日本

は今日在るを得たのだから、吾等は此の二つの指導精神を注意して吟味清算する必要がある。

前にも觸れて置いた通り、尊皇派は國學派である。而して國學派は神道派であり、神道派は農本派（或は農業派）であり、農業派は保守派であり、保守だからそれは國際關係において無知である限り、外交上、手前味噌になり、攘夷派になるのは餘りにも當然な歸結である。而して又佐幕派は漢學派である。漢學派は固より開國派であり、開國派は工業派（或は商工派）であり、工業派は進取派である。それが今日の日本に何を教へるものであるか。今日の日本は尊皇攘夷の國學派的指導精神が、漢學派の開國進取主義によつて壓倒されつゝある。そして農本派が商工派によつて埋没されつゝあるといふ意味で、現代は第二の幕末時代の再現である。只極端な鎖國主義が極端な開國主義に置き替へられ、武士階級がブルジョア及びプロレタリアの商工階級と入れ代つただけの相異である。

明治維新や皇政維新といふけれども、政治の形態が天皇の御親政といふ事になり、封建政治が立憲政治といふ西洋流の近代的中央集權——産業經濟上の資本主義——都市本位の重商主義の形態に變化したので、政治の實質が古代日本の皇政の如く兵農主義に建て直されたのでは

ない。その意味で、明治維新は農本文化の商工文明への降参である。もし復古といふべくんば寧ろ徳川幕府の自給自足的農本政策の傳統をそのまゝ繼承しようとする尊皇攘夷派の主張が正道であつたのだ。西洋に模倣追従して農本主義の日本を商工主義の日本にすり更へる事は、決して皇政の復古ではない。それは只、近代の西洋文化に對する日本文化（或は東洋文化）の收北主義を意味するだけだ。

そこで明治の改革は、徳川幕府の傳統的根本政策の改革方針たる開國進取主義を繼承し、その傳統的國是國策たる農本主義を抛棄して、歐米先進國の商工文明の指導精神の前に拜跪してしまつたのだが、今度は日本人もいよく肚をきめて立たねばはらぬ破目に至つた。それは資本主義の行詰りから諸外國の國際的諸情勢が國民的自給經濟の方針を取るに至つた客觀的な世界の大勢からばかりではなく、日本民族にはどういふ蟲が居るのか、外國文化になり切れない所がある。外國の指導精神に服従し切れない氣持（ナシヨナリズム）がある。儒教佛教を取り容れても、神道だけは立てゝゐる。追従してゐるかと思へば反撥してゐる。西郷南洲と岩倉具視とが征韓論で反撥し、伊藤博文や森有禮などがダンスをやつて追従し、中江兆民が自由民

權思想にかぶれ、徳富兄弟がクリスチャンになるかと思へば、三宅雪嶺が國粹論を昇ぎ出し、高山樗牛が日蓮主義を高唱する。

斯様な日本民族の傳統主義的及進歩主義的性情は、求心力と遠心力との物理作用で説明できるかも知れぬ。日本民族の精神が求心的に内に向つて働らく時は、一切の外のものを弾ね返しそれが外へ向つて働らく時は、一切のものを吸収する。攘夷は一面國際的無知と島國根性の現れでもあらうが、日本民族の性情を推して考へれば、それは慥かに農本的な求心力の現れである。開國はその商工的遠心力の現れである。反撥はナシヨナリズムの現れであり、追従はインターナシヨナリズムの現れである。日清日露二大戦役の勝利は、ナシヨナリズムの勝利であり、支那化、印度化、歐米化及びロシア化はインターナシヨナリズムの優越である。此の兩側面を打つて一丸とした所に、吾等は日本民族の指導理論の原理原則たる日本民族主義が在る事を覺らねばならぬ。

#### 四 國際的日本の雷同性

ナショナルリズムを基調とする社會改造の指導精神は、マルキシストによつて、社會的ファツシヨと呼ばれる所であるが、地に着いた精神なり思想なりは大概はマルキシストによつてファツシヨのカテゴリの中へ組み入れられてしまふ。マルキシストの謂ふファツシヨはナショナルリズム（國民主義）の事であらうが、民族主義といふものは如何なる民族においても、恐らく宿命的存在である。宿命的である以上、それは絶對的なものである。吾々は日本人として日本といふ土地に生れ、黄色の皮膚を持つてゐるといふ事實は、如何に否定しようとしても否定する事の出来ない事實である。で、吾々は白色の皮膚を持つ歐米人から、黄色人種として蔑まれれば、理窟なしに不愉快である。その代りに、もし吾々の持つ文化が白色人種の持つ文化の上に優越すれば、きつと吾々は愉快を感じるに相違ない。之れは單に人種的感情に支配されるからではない。東洋の天地が生んだ農業文化と西洋の自然が生んだ工業文明との文明の性質の相異にも由るのである。不幸にして吾々は現状の白色人種の手によつて造り出された、科學萬能の工業文明によつて壓倒されてゐる。それが吾々の意識的或は無意識的反感であり、不快である。白色人の科學萬能的工業文明からの指導精神を、吾々は表面いかにも欣んで遵奉し

てゐる様に見えろけれども、一皮剥ぎ、日本人の肚を割つて見るなら、要するにそれは、一つの歴史的進行過程における一時の便宜と必要とからの妥協によるので、本心からさうしてゐるのではない。

日本が國際の舞臺へ乗り出してから、僅に半世紀を出ない間に、世界の劣等國から一躍一等國にまで出世した。しかし、之の一等國日本を少しく冷靜に客觀的に展望し得る日本人に取つては、それが何と氣恥しい一等國である事よ。メリケンの場末の如き都市を模造して、薄汚い無數のプロレタリアを粗製濫造した事ほど左様に世界の驚異である所の一等國日本の文化の現状を見よ！ 何といふ殺風景、何といふミゼラブル・オンパレードぞや。

かくの如きメリケンの場末式な一等國日本或はソヴェート・ロシアの出店にならうとする一等國日本なるものが如何にして生れたかといふに、それは世界一の模倣上手な猿真似氣質の妥協追従的インターナショナリズムと民族的生存の必要といふナショナリズムとに由つてである併し何でも世界一な處がありさへすれば、その點で一等國と謂へない事はない。イギリスの様な世界の農業國の産物を、近代的な機械仕掛けで巧妙に掠奪して、一代の富貴を極めた所のブ

ルジョア國——もう少し農本的に露骨にいへば、カツバラヒ上手な海賊國が、世界の一等國として巾を利かせてゐる時勢であつて見れば、世界一等の猿真似民族が、世界の一等國であつた所で、固より怪しにむ足りない。

一等國であるかないかの尺度になつてゐる近代のブルジョア文明においては、人間の價值といふものを金で計量し、或は月給とか年俸とかいふものゝ多寡で評價する事になつてゐる。そして金が無ければ如何に高潔の士と雖も、朝から晩まで生産に勤勞する所の正直で善良な人間でも、否、さういふ種類の人間であればあるほど、人間として生活するにどうしても必要な衣食住さへも與へられず、正直な善人は白旗を掲げて逃げなければならぬ様な虚偽の文明が、歐米の白人種共が造り出した所の此の唯物的ブルジョア文明である。斯様なブルジョア文明の中においては、金があるかないかによつて、紳士的であるかないかと決定される。だから、アメリカの様な金力自慢の紳士達をつかまへて、メリケンとかヤンキーとかいふ事は、唯心的なナシヨナリズムに立つ吾等の甚だ愉快とする所である。それが動物でさへもかくの如き愚劣な文明は生まなかつた所の人非人的人面鬼心的文明と人にと對する適切な稱呼たるのみならず、



また吾等のナシヨナリズムにおける文化の優越を示す所以だからである。

然るに、かくの如き動物以下のヤンキー共の猿真似をして、而もホガラカにも得意になり、妥協苟合而して追従隷屬日も維れ足らぬ日本人は、まあ何といふお人好しな國際人であることよ！——それだけなら尙恕すべしとするも、日本共產黨の黨員と稱する手合は、ソヴェート・ロシアの猿真似の坂を通り越し、その唯物的都市中心的社會主義施設なるものに心酔するの餘り、コミンテルンの指令なるものを絶對權威とし、それに絶對服従して行動することを、最も妥協なき共產主義の實行也と考へてゐる。成程、日本民族がユダヤ民族の云ひなり氣なりになるのは、妥協ではなく、全く臣従だ！日本ブルジョアジーのインターナショナルは、ブルジョア文明への追従であつたが、日本プロレタリアートのインターナショナルは、ソヴェート・ロシアへの服従だ。

ブルジョアジーの、最も忠實な走狗はチンドン屋である。コミンテルンの最も忠實な走狗はコムニニストである。無産運動の陣營内で、チンドン屋とコムニニストとが走狗の本家争ひに耽る所以である。どちらが本當の走狗であるかといふ問題について、互ひに「イー」と牙を向

き出し合つてゐるのが、現代國際日本のカリケチュアーである。

之れに對するナシヨナリズム裁判所の判決は次の如くである。――

チンドン屋はブルジョアジーの走狗には相違ないが、その代りに日本の金で日本ブルジョアジーの提灯持ちをしてゐるのだから妥協的でない。然るに、コムニストはブルジョアジーの走狗ではないかも知れぬが、その代りにロシアの金で日本に宣傳してゐるのだから妥協的である。

インターナショナル裁判所の判決は左の通りである。

チンドン屋は日本の金で運動してゐるのに、ロシアの分まで宣傳してやつてゐるから妥協的だ。然るにコムニストはロシアの金で運動しようとしてゐるだけに、ロシアのコミンテルンだけに忠誠奉公しようといふのだから妥協的でない。

ナシヨナリズムを建前とすればナシヨナリズムの立つ様に裁くのが當然で、インターナシヨナリズムを建て前とすれば、インターナシヨナリズムの建つ様に裁くのが合法的である。併し、シヨナリテはその民族に掛け替へのない一つの嚴とした存在である。然るにインターナシ

ヨナルはその民族のカムフラージだ。それは民族的生存の便宜、手段、方法であるに過ぎぬ。日本人は支那人ほどに國際人ではないが、そのナシヨナリテーターが單純でアツサリしてゐて、且つ小島國でコジンマリと統一される所から、その思想も行動も共に簡單にインターナシヨナルになり、外國崇拜になり、猿真似になり、而して遂に文化的追従になる。雷同性、然り、それが現代の國際間に發揮された日本民族の一特性である。併しながら之れは日本民族のナシヨナリテーターの恐らくは最も短所とする一面の現れである。幣原ブルジョア外交の軟弱と日本コムニニストの服従とは、日本民族の最も不見識なる文化的貧困の暴露である。日本民族よ、汝自身の文明の本來の姿に眼を醒せ！そしてそこから吾等は吾等の最も優秀なる他の反面及のナシヨナリテーターにおいて、ブルジョア商工文明及びマルクス勞働文明のインターナシヨナルの世界を、文化的に武力的に刻服する兵農日本民族協同主義文化抗爭を堅忍持久確乎不拔に戦ひ抜かねばならぬ。

吾等の前には最早、闘争か降伏かの二つに一つより外に、世界に處すべき途はない。日本民族、團結協同せよ！

### 3 農本的民族協同體建設要綱

#### A 文化

- 一 都市文明の超剋
- 二 農本文化の建設
- 三 學校の村塾還元

#### ——(總括的説明)——

#### 民族的團結組織の基本としての村塾運動

現代の日本人は何を措いても先づ此の一事を知らねばならぬ。即ち日本民族團結の基本原理は皇道であるといふ事を。吾等の道德の規範は、皇道の道德的原理たる忠孝の大道である。然るに現代はこの吾等日本民族の道德的規範、隨つて吾等の民族的團結の組織の根幹たる忠孝の

大道廢れ・唯物的利己心のみが一切を支配してゐる。此の唯物的利己心は、個人主義及び社會主義の上に立つ都市文明の據つて立つ基本精神である。

吾等は茲に今日の都市文明の行詰れる原因と及び現代人心の荒蕪の根源とを認める。而して此の人心荒蕪の認識を通して日本民族の「非常時」を意識する。蓋し吾等日本民族の心田がかくの如く荒蕪に委せられては、一朝有事に際して、鞏固なる民族的團結を期し得べくもないからである。鞏固なる民族的團結なくしては、今日の如き内外共に民族的苦難振古未曾有なるに當つて、能く民族の存立繁榮を期し得べくもないからである。而も現代の人心をしてかくの如く荒蕪に至らしめたものは、唯物的個人主義の文明、自由主義的政治經濟機構による都市文明である。就中、かくの如き不良惡質なる都市文明に追従して、民族の子孫を驅つて、之れに參加する資格を得せしむべく、一意惟れ専心し來れる學校教育の結果であり、罪惡である。

日本民族を擧げて個人主義的、自由主義的存在たらしめ、かくして吾等の民族的團結の核心であり、且つその組織の根幹たる忠孝の道德を根柢から去勢すべく、年額無慮數億圓宛の教育費が、而も國民の膏血を以て償はれ來つたのだ。吾等はかくの如く國本を枯らし、民族的團結

力を去勢する亡國的教育を支持せねばならぬ理由を、何處にも見出し得ぬのである。

是れ吾等が今日において、民族的教育と民族的組織再建の緊要を訴ふる所以である。もし、民族的團結の基礎が鞏固であるならば、現代は決して吾等に取つて非常時ではないのである。現代において吾等が「非常時」を痛切に意識せざるを得ざる所以のものは、民族的團結の基礎が崩れてゐるといふ事實に由るのである。吾等の皇道日本再建運動は、この意味で、民族的團結の基礎の建直し運動でなければならぬ。随つてこの意味で吾等は、民族的教育の建直しを、先づ最も重大且つ緊要事とするものである。

民族的教育の眼目は、吾が日本民族の歴史的使命の實踐的高揚を企圖し、その民族的理想を達成すべく、民族の生長發展力を強大ならしむるに在る。此の目的を實現する爲めに、民族的結合の機根を培養し、以て民族的團結の基礎を確立し、その上に、緊密なる民族的組織を構成せねばならぬ。と同時に他面、民族的解體の禍機を助長する個人主義的自由主義的教育並に民族の内面爆破を目的とする唯物的社會主義教育の撥無に努めねばならぬ。「學校の村塾還元」は、かくの如き吾等の教育再建、民族教育樹立の標識である。

村塾教育とは、吾が民族生活の據つて立つ忠孝勤勞の傳統的精神を根幹とする勤勞主義教育の義である。忠孝は至誠の大道、興國の基調である。忠は孝の本體であり、孝は忠の鑑である。孝道は忠道より派生して忠道に歸一する。又、忠道は孝道に淵源して孝道に還元する。民族は忠を樞軸として團結し、家族は孝を心棒として結合する。而して勤勞はかくの如き忠孝の體得實踐の道德的形態である。忠なくんば民族なく、孝なくんば家族なし。然り而して民族をして忠あらしめ、家族をして孝あらしむるは、一に皆是れ勤勞の體現に依る。即ち忠孝は民族團結の規範、道德の大本であり、勤勞は之れを固め、之れを培養し、之れを成長發展せしむる民族長久の道德的經營である。此の故に、村塾教育は何よりも先づ、教師と生徒とが勤勞によつて立つ教育でなければならぬ。

村塾は月給取りを養成する場所ではなく、勤勞者を養成する道場である。勤勞する事の中に人生の最高無上の快樂と光榮と感謝とを見出し得る人間の養育所である。即ち村塾は忠孝勤勞を以て資本とし、又忠孝勤勞を以て目的とし、師弟共勵自營自活する誠の實業練習所である。此の村塾の建設の資本、忠孝勤勞は、祖先傳來にして、各自がその民族的生命の内部において

不求自得せる所である。故に吾等は建設の資本として、先づ此の民族の無上寶珠を發掘せねばならぬ。

現代の教育は、出發點が金であり、その目的とする所も亦師弟共に金である。茲に民族の傳統精神崩壞の根源がある。故に吾等は村塾教育を通じて、此の民族的没落の根源たる現代の都市中心資本主義教育を根こそぎ打倒せねばならぬ。即ち今日の師弟共に月給を取ることを目的とし、教育をその手段とする所の學校教育を即時廢止し、教育をして村塾の勤勞主義に還元せしめねばならぬ。皇道日本再建の資本は斷じて經濟力ではなく、道德力でなければならぬ。

子弟を導くに、口よりも身を以てせねばならぬ教育者が、月給取りであり、月給を取ること生活を目的とし、自らは勤勞せず、却つて勤勞を輕蔑するが故に、かくの如き現代の學校教育者が、その子弟に勤勞輕蔑の風を助長し、忠孝の犠牲献身的道德的生活の尊貴なる意義を沒却するに至るは、餘りにも當然なる歸結である。勤勞によらなければ立たない日本農村が、身に餘る多額の教育費を負擔して、勤勞輕蔑者を雇傭し、自家の子女に勤勞輕蔑の道を教えつゝある。之れで日本の農家が疲弊し、日本の民族が亡國の民とならなければ、地から雨が降り、



天に草が生えるであらう。

そこで、村塾教育においては、教師自らが耕作し、農民とその生活の苦樂を共にし、農村を利導し、民族の安榮を期するを以てその教育の大綱とする。村塾は民族文教道徳の根源たるは勿論、有ゆる村治の中心、民族的經綸の指導的權威でなければならぬ。

然るに從來の學校教育は、民族の政治經濟の絶對的指導權威たる忠孝勤勞の道徳の上に立たざるが故に、政治經濟の支配下に置かれてゐる。そこに教育の無權威と墮落とがあるのだ。村塾教育においては、此の教育對政治經濟の地位を顛倒して、教育者が政治經濟の指導者とならねばならぬ。況んや吾等の皇道日本再建の組織運動は、氏神を中心とする全村一結運動なるが故に、村塾は氏神の權威的存在たらねばならず、随つて村塾が吾等の皇道日本再建運動の淵源とならねばならぬのである。それは古代日本の「みやつこ」制度への還元を意味し、又その復活をも意味する。此の意味で吾等の運動は祖先の遺風顯彰の行動たらねばならぬのである。

此の民族教育を通じて、民族的團結組織の基本細胞たる村落更生委員會が、家族的生活體を經濟單位として創設されねばならぬ。と同時に又、此の委員會の活動を助成する自衛團（皇國

農民軍團）を、村の既成組織細胞から醸酵せしめねばならぬ。

かくの如くにして、近代の個人主義及び社會主義の上に立つ唯物的都市文明は超刻され、吾等の農本的民族協同主義文化が建設される。

### 村塾開設者への老婆心

一、金をかけてやる式の方法を廢す——教師は村民より一文の金も取らず、又他にも之れを仰がず、神代の昔吾れ一人豊葦原の荒地に天降りしものと覺悟し、勤勞を唯一の資本として草分けする決心が肝要なり。即ち、先づ一村に根を下し、此の地の氏神たる決心にて塾の經營に當るべし。

二、村塾は全村運動の中心なり——その中心は建物に非ずして人に在り。人を得れば建物は村の誰れの家にてもよろしかるべく、寺院神社が適用されてもよろしかるべく、學校教育を廢止すれば、その校舎を之れに充つることを得べし。それらのものが得られねば、田の中にも、林の中にも、樹に下にもよろしかるべし。

三、村内の事は村内の者の力で——講師は中央からも出来るだけ手傳ひに參るべけれど、成る

べく人手を借らずにやる事也。寄附も金を集めることをせず、吾等の再建運動を進んで支持せんとする有志より食糧を出してもらうがよろしかるべし。随つて開塾主意書の如きも、印刷物は必要なるべく、口から耳へと直接に談合するが最も効果的たるべし。商工文明的な道具は一つも使はずして出来る運動が、本當の農民運動といふものなるべし。

四、無産運動の誤謬を清算せよ——協議會とか講演會とかいふ催しをする場合に、金がなければ出来ぬ事ならば見合すべし。金を使はずとも自然に集るほどの會合にならねば無益と知

るべし。無産黨の運動が農村に伸びざる理由は、一々枚舉に違なけれど、金を使はざれば出来ぬ様な會合を即ち都市的なブルジョア政黨的な會合を、農村に展開したるが如き誤謬を敢てしたるに負ふ所の最も多きに居るものなり。

五、政治運動的たる勿れ、道德的要求の上に立つべし——吾等の皇道日本再建運動は、從來の政黨運動とは異り、民族精神再建の文化運動を中心とする生活組織の改革運動なれば、壯士の如き或は運動屋の如き輕佻なる態度を取るは大禁物なり。經濟の改革を行はんと欲し

て、經濟的要求の上に立つは無產黨的なり。經濟的要求を本とせば、その運動はわたくしの運動に墮する虞れあり。茲に經濟一天張りの無產運動の墮落あることを思ふべし。故に經濟の改革も政治の改革も、一切合切道德的要求の上に立つべし。苟も皇道を再建せんと欲する者は、經濟をして經濟たらしめず、經濟をして道德たらしむるが、吾等皇道再建の眼目なればなり。一

## B 政治

- 一、自由主義的黨派政治の絶滅
- 二、社會主義的階級支配の掃蕩
- 三、一君萬民の皇道政治の實現

——(總括的説明)——

互助協同體組織運動發展形態

村治の改革に當つて、外部よりの物質的援助は、害多くして益尠し。故に眞の村治改革は村の内部より湧き出た自覺自力に俟つの外なし。二宮翁の言葉に「一人の心 新たになれば、地の荒蕪は百萬町歩ありとも憂ふるに足らず」とあり。寔に味ふべき金言なり。

一、村治の改革は氏神を中心とすべし——村治の改革に當らんとする者は、氏神の神意の代表者として立つべし。氏神は神様なれば、物申されねど、神に代つて忠誠の言動を爲す者にあらざれば、眞の村治の改革は成就し得ざるべし。故に皇道の行者は村内に在つては氏神の權威的存在たるを要す。氏神の權威的存在として、各村落に村塾を復興すること——是れ村治改革の第一要件なり。

二、學校教育即時廢止のこと——租税公課の重壓に堪えざるは、方今日本農村の一般的實情なり。然るに村税の大部分が學校教育費に投ぜられてゐること奇怪千萬なり。現代の學校教員の如き勤勞輕蔑者を雇ひ、農村の子弟を驅つて不勤勞者たらしむる學校教育を、而も血税を拂つてまで支持せざるべからざる理由何處に在りや。斯くの如き冗費は速かに村税より廢止すべし。かゝる冗費の負擔をも敢てせるが故に、農村は窮乏せるにあらずや。學校

教員は無月給にて奉仕し得る者のみ學校に留むべし。無月給の教員と雖も、農民と勤勞を俱にし、自耕自活するの決意なき者は斷るべし。教育者自らが身を以て勤勞を説くに非れば、農村の更生は百年河清を俟つものなり。

### 三、共同倉庫を創設すべし——

不勤勞教育廢止によつて教員の全部或は大部分は不必要化し、

一大整理行はるべし。従つて學校はから空きとなるべし。その校舎を村塾及び共同倉庫に

適用すべし。共同倉庫には村内の食糧の中少くとも各戸全所得の一半を保管すべし。各

戸債務の有無に拘らず、村内一年分の飯米は一粒も倉庫の外へ持出すべからず。飯米の餘

額を以て租税公課等公共の用に充つべし。而して各戸所得の一半を以て私用に充つべし。

### 四、

更生委員會を組織すべし——農村更生の中樞機關として更生委員會を作り、農村更生に關

する一切の權能を全村の信義に於て之に委任すべし。委員會は村内における最も忠誠な

る皇道の行者、吾等の同志を以てすべきは勿論也。地主、自作、小作の如何を問ふべから

ず。全村一結して之れに當るべきものなり。

### 五、

負債は五ヶ年間無利息にて据置くべし——

苟も計畫を立て村内の更生を斷行する以上、

七、

村内が充分健康體に立ち直る迄、既往借金の如きは無利息にして据置くのが皇國祖先の遺風なり。各戸の負債整理に關しては、之れをすべて更生委員會に一任すべきものなり。

皇道を中心とする家族的生活體を以て民族的團結の經濟單位とし、村落更生委員會を以て民族的團結の基本細胞とすべし——個人を以て組合その他社會共同生活體の經濟單位とするは、西洋流にして國體と合致せず。日本民族の團結は單なる個人の集合であつてはならぬ。此の民族的生命の流れを成す基本條件は個人に非ずして家族或は家庭たるや明かなり。家族生活體において皇道を中心として團結するが故に、國家生活において忠道を中心として吾等民族は一致團結し、茲に忠孝一本の民族的團結が、成就さるゝ也。故に村落更生委員會は一家族を經濟單位とする民族團結の基本的組織細胞となり、家族的生活體は此の基本組織の單細胞たらざるべからず。

自衛團（皇國農民青年部）を組織すべし——此の皇道的單細胞及び基本細胞は、同一組織體に於ける他の反皇道的或は非皇道的細胞組織、即ち自由主義的黨派政治及び社會主義的階級支配の細胞組織と戦つて、之れを克服せざるべからず。現在日本農村における組織

細胞は、村會と組合と殆んど一切が反皇道的或は非皇道的也。茲に農村及び民族の病態略型化の病源がある。吾等は吾等の皇道の組織細胞をして、政黨的な或は營利的な或は階級的な有ゆる非皇道的なる是等の組織細胞に打ち克たしめざるべからず。そのために、此の吾等の基本細胞は、宜しく白血球の役割を果す所の自衛團（皇國農民青年部）を持つべき也。

八、自衛團は、既成組織細胞たる村會、在郷軍人團、産業組合、青年團等の中より、その良質精英分子を引き抜き、之を同化して結成すべし。

九、委員會は政府、自衛團は軍隊及び議會の役割を果す様、三位一體式に組織すべし。

十、村塾は是等の皇道的組織細胞の活動體（地涌菩薩）に對し、絶へず活潑なる指導理論を供給する所の上行、無邊行、淨行、安立行の四大菩薩たるべし。

十一、各村落更生委員會及び皇國農民青年部は他の非皇道的なる政治的經濟的細胞分子即ち自由主義的黨派政治及び社會主義的階級支配の勢力と戦つて之を皇化する必要上、互ひに協力聯合して郡聯合會を組織し、共同戰線を布くべし。



十二、各聯合會は一縣内において一つに結合し、皇國農民同盟縣本部を構成すべし。

十三、各府縣本部においては左の要綱の下に縣内のまづろはぬ舊勢力と戦つて之れを掃蕩すべし。

イ、縣立諸學校即時廢止

ロ、縣營諸事業即時打切

ハ、知事公選の即時斷行

此の皇國自治運動における組織發展形態は、天皇を中心として一國一家を結成し、次の如き一君萬民の細胞組織發展形式を取る。更生委員會は先づ皇國の組織的單細胞たる一家族を經濟單位とすることによつて、經濟生活の基礎條件として一家族の耕作能力相應の耕作土地に對して、その家族をして作付の自由と一家の自給とを得せしむることを原則として、土地問題を解決すべし。土地問題の解決は更生委員會において、更に土地委員會を設け、この土地委員會をして之れに當らしむべし。

更生委員會は此の經濟單位としての村内各家族をして、氏神を中心に結合して、一村一家族

を結成せしめ、民族的團結の基本的組織細胞即ち所謂村落自治體を形成すべし。

此の一村一家的自治基本細胞體は、更にその政治的及び經濟的團結の必要から、自然的に及び人爲的に結合して、一鄉若しくは一郡内において、自治細胞聯合體を組織すべし。

此の自治細胞聯合體は、更に生長して縣聯合體（縣會）を組織すべし。縣會は知事を公選して、縣内自治を統一すべし。

知事は地方を代表し、天皇を中心として國會を構成すべし。

天皇は國會の意を徴して、有司をして内閣を組織せしめ給ふ。

茲に中央政府が構成され、一國一家族的民族團結の組織は完成し、一君萬民の皇道政治は實現する。

## C 經 濟

- 一、貨幣搾取經濟の驅逐、利用厚生經濟の確立
- 二、村落自給、一村一家主義の徹底
- 三、産業大權による經濟の國家統制

——(總括的説明)——

### 互助厚生の經濟組織建設形態

資本主義は行き詰つた。そして今茲に厚生經濟の時代が來た。何故資本主義が行き詰つたか金が儲からなくなつたからだ。何故金が儲からなくなつたか。買ふ方に購買力がなくなつたからだ。何故購買力がなくなつたのか。金融資本家に搾取されたからだ。小資本家は大資本家に搾取され、かくして我が民族の金は少數金融財閥へ吸ひ取られてしまつた。

金融財閥は多數の飢餓線上に彷徨する農市民を尻眼にかけ、獨り徒らに懷ろを膨らし資金は

ダブついてゐるのだが、多年民族の膏血を搾り來り、今や搾りつくしてしまつたので、どんな事業を企んでも、搾り甲斐がなくなり、結局、投資したくても出来なくなつてしまつた。國家民族に取つて有用有益なる事業は枚舉に遑がないほどだが、それには金を出さうとしない。何故か、公益になる事業といふものは、由來、利潤（金儲け）にはならぬからだ。

これによつて、吾等は資本主義經濟の行き詰らざるを得ない根本の原因が何處にあるかを明確に認識することが出来る。つまり資本主義經濟は利潤を目的とする營利主義經濟だから行き詰つたのだ。故に此の行き詰りを打開するには經濟の方針を根柢から一變し、全く新規な經濟組織を打建てるより外はない。

然らば如何なる方針の下に經濟を立て直すか。元來經濟の目的は利潤を生むこと（搾取）に在るのではなく、生を厚ふることが經濟本來の目的だ。この生を厚ふする所の厚生經濟の「生」は實に一身一家の生には止まらない。それは同時に民族同胞の生、世界人類萬人の生を意味する。然るに搾取經濟の利潤は一身一家の生に止まる。厚生經濟が全體の厚生を基準とする全體主義經濟であるに對して、搾取經濟は一身一家の利益のみを基準とする個人主義經濟であ

る。つまり資本主義經濟は此の個人主義の故に行き詰つたのだ。故に、吾等は此の個人主義經濟を皇土から掃蕩驅逐絶滅しない限り、而して之れに代へるに利用厚生全體主義經濟を再建しない限り永久に祖國更生の日月を仰ぎ見るべくもない。

全體主義と云つても、吾等のそれはかのマルクス流のインターナショナルを意味しないのは勿論である。吾等の全體主義は民族主義である。及びその擴大を意味する。故にその單位とする所は個人ではない。一家庭の擴大としての一村一家、一國一家である。かくの如き民族主義の發展において、結局、世界の民族を擧げて一家族たらしめんとするのが、即ち吾が皇國の皇道である。

そこで、吾等の皇道日本再建運動は、先づ日本民族全體の更生運動でなければならぬ。さて、資本主義は何故に搾取經濟を立てなければならぬ様になつたか。——此處が吾等の皇國農民同盟運動方針の關ヶ原である。

資本主義が搾取經濟たらざるを得ない根本理由は、それが都市に繁榮する商業を本にして經濟を立てた所にある。商業の目的は一つの物品を甲から乙に移動させることによつて、その間

においてカスリを取る所にある。カスリ即利潤であり、儲けである。一つの物品を甲から乙（生産者から消費者）へ移動することは、厚生經濟においても勿論必要であるが、厚生經濟においては移動することそれ自身が目的で、その間に利潤を得ることを目的としない。

だから、吾等の厚生經濟においては、利潤を得なければ成立しない所の現在の商業（資本主義商業）の如きは、當然止揚或は解消されねばならぬ。随つてその意味で、現在の都市は一應解消されねばならぬ。それでは、かくの如き我等の更生經濟は、吾々の衣食住を充足するに必要とする農工商の生産業の中、何を本として經濟を立つべきか。それが我等の皇道日本主義民族運動の成敗の岐るゝ肝要事である。

厚生經濟は己に商業を本としない。然らばマルクス主義の如く工業を本とするか。

工業は確かに利用厚生の重要な産業部門である。然しながら、それは農業ほどに根本的にして且つ重大なる利用厚生 of 産業部門ではない。少くとも、利用厚生を經濟の主眼とする限り農業が工業に從屬すべきものでなく、工業が農業に從屬すべきものである。資本主義經濟の破壊は、その商業主義たると同時に工業主義たる所に胚胎する。厚生 of 根本たる農業を商工業に

從屬せしめ、厚生産業たる農業を營利産業化し、厚生機の機能を經濟の根本から去勢したことに  
よつて、自縄自縛の行き詰りに到達したのだ。

だから此の資本主義經濟の行き詰りを根本的に打開し得るものは、マルクス流の工本主義に  
立つ共產主義ではなく、實に吾等の農本主義あるのみである。農業を本として經濟を立てるこ  
とによつてのみ、厚生經濟は本來の面目において更生する。マルクス主義は共產主義の名にお  
いて、厚生經濟の如く見せかけるが、その工本主義たる所にインチキ性があり、それ故に資本  
主義の綻破を根本的に救ふに堪えない。

かくの如く吾等の皇道日本主義民族運動は、農本的厚生經濟の上に展開されねばならぬ。こ  
の吾々の農本主義厚生經濟は已に商業に従屬せず、工業にも従屬せず、その本質において、農  
村自力更生の原則であり、隨つて皇道日本再建の基調であらねばならぬ。吾等の皇道日本再建  
運動は、茲において、表面單なる一個の農民運動の様な觀を呈すれども、その實それは、全面  
的國內問題の解決を意味すると同時に、全面的な國際問題の解決をも意味する。吾等は吾等の  
農民運動を通じて、一切の國內問題は勿論、國際問題をも打開せんと欲する。

斯様に我等の皇道日本再建運動は農民運動形態を取るに至つたが、我等の農民運動は又、一時に全面的に國內の全農村に働きかけようとはせず、集中的に二三の代表的農村に働きかければ、以て全日本の農村を更生し得るのである。

然らば我等はいかなる方法を以て、此の疲弊窮乏その極に達せる農村を更生に導き得ると爲すか。

それには先づ第一に、村落に村塾運動を起し、村落更生の任に堪ゆべき青年闘士を養成すべきである。村塾はその實踐的意味において、當然、更生委員會の形態を取らねばならぬ。即ち村塾の目的は更生委員會なるものを行動の主體條件として持つものである。

そこで此の更生委員會なるものは、いかなる構成内容を持つか。先づ、その構成の主體條件として更生委員たる者の人格の如何が重要問題である。

我等の農民運動は、全村を一家族とする家族主義の皇道運動であるが故に、更生委員たるべき者は政黨本位の人物や階級闘争の信者の如き分裂主義者であつてはならぬ。出來得べくんば



全村の信義の上に立つて、獨裁を強行し得る所の有力者たるを要する。斯うした人物はいかにして獲得されるか。そこに村塾運動の重大なる使命の存する所以を知らねばならぬ。現在、村落を牛耳つてゐる所の村内の有力者なる者は、多くは政友、民政の勢力下にある黨人である。而して村役場、村會、農會、信用組合、産業組合及び學校等、村治の重要な機關は、すべて是等黨人の勢力範圍たるを常とする。是等の機關が都市金融資本の搾取の毛細管的作用を爲し或は政黨利權の手段として、忠勤を勵み來れる結果、農村をして今日の如き身動きならぬ窮境に追ひやつたのである。故に、是等の現存する所謂農村自治機關が、最早農村更生に取つて無力たるのみならず、寧ろ有害なる存在たる事は掩ふべからざる事實である。

是等農村更生にとつて有害無用の長物を止揚超刻清算解消することによつて、農村更生に役立しむるは、偏に是れ村塾運動の力に俟つ。我等はこれによつて農村更生のイデオロギー（我等の指導精神と指導理論）を農村に確立し、全村の信義を之れに集め、之れによつて立つ我等の農村土着の同志をして、金剛不壞の更生委員會を誕生結成せしめねばならぬ。

抑も村落自給、一村一家主義の徹底は、一家族を經濟單位とすることに始まる。

一、先づ一家族の耕作能力相應の耕作土地に對して、その家族をして作付の自由と一家の自給とを得せしむることを經濟の原則とすべし。

二、一家族は孝道を中心として團結し、一家自給を確立すべく勤勞すべし。

三、一家自給は村落自給の確立に俟つ。村落の土地は他町村居住者の所有管理に委すべからず土地委員會は村落の土地をその村落の居住者の手にのみ、使用管理權が委ねらるゝ様、土地問題を解決すべし。かくすることによつて村落自給の基礎確立する。村落自給の基礎確立して、初めて一家自給の道は開かる。

四、村落自給は一村一家の團結に須つ。一村が一家となつて團結するに非れば、何を以てか村落自給の道を得べき。茲を以て我等は一家族の團結を民族團結の單細胞となし、一村一家の團結を民族團結の基本的組織細胞と爲す所以也。

五、一村一家の團結は氏神を中心として、氏神に忠勤ならんとする忠道の結合たるべし。我が民族の大本が皇室なるが如く、氏神は村民の根元なれば也。此の故に村内各家族は、村内土地より收穫したる生産物の一半を氏神に供へ、他の一半を以て私用に充つべし。

六、氏神に供へられたる一半の生産物は、之れを共同倉庫に納むべし。更生委員會は此の共同倉庫所藏の一半を村内公益の用に充て、更に一半を氏神の祖宗即ち民族の祖宗たる天照大神に供へ奉るべし。是れを以て縣稅及び國稅に充つべし。その天照大神に供へ奉るは、

民族祖宗萬世一系の天皇に供へ奉る所以なればなり。

七、一村一家の團結成らば、村内の自力を以て公益の百事成すべし。耕地用水山野の土木事業を起すべし、利用厚生自給自足の見地に立ち、製糸紡織染色等の輕工業その他諸副業も起すべし。鍛冶もやるべし。水力電氣も起すべし。諸機械も出来るだけ之れを吸收利用すべし。但し借金して都市より機械を買ふべからず。投機的企業は斷じて行ふべからず。もし公益の爲めに一村以上の協力を必要とする時は、隣村と協力聯合して行ふべし。同様にして縣營にする事の有利なる事業は、縣聯合體の力を以てし、重工業、軍需品製作業、遞信交通の諸事業は國營にすべし。

八、かくの如き諸産業の公營乃至國營も、その自給經濟の確立に至つては、所詮、全民族一致團結の力に須つ。是れ産業大權による經濟の國家統制を必要とする所以なり。産業大權によ

る經濟の國家統制とは經濟の統制を他力に須つの意に非ず。忠孝一本の道德による全民一致團結の自力統制の竟極を意味する也。一村は一村内の統制を要し、一郡は一郡内の、一縣は一縣内の更に一國は一國內の經濟の統制を要す。統制は即ち全民經濟の利用厚生を徹底する所以なり。故に村落自給、一村一家主義の徹底は、結局、忠孝一本の産業大權の下、全民族一致團結の力による經濟の國家統制の實現に須つ。もし之れを國際的にまで擴大すれば民族自給經濟を單位とする經濟の國際統制を必要とする。之れを大にしても、之れを小にしても、忘るまじき事は、經濟統制の原則が擄取にあらずして、全民族乃至全人類への厚生たらざるべからざるの一事也。

## 4 結

### 語

## ——アジャ消費組合の確立——

# 皇道樂土の建設終

さて、上述の如き擄取なき利用厚生經濟が、國際間に實現する爲めには、先づ「國際消費組合」の確立に俟つ。

昨今、滿洲國獨立と共に、日滿經濟ブロックの問題、日滿經濟統制の問題が俄かに喧しく論議されつゝある所なれども、斯の問題解決のキイは、要するに「日滿消費組合」の確立に在るべし。消費組合の理論が、未だ國際間の經濟統制に活用さるゝに至らざるは一奇と謂ふべし。吾等は將來、日本民族がアジア民族聯邦の盟主たるの使命を帯ぶる立場よりして、茲に「アジア消費組合の確立」をスローガンとして提唱する者也。

昭和八年三月一日印刷  
昭和八年三月十五日發行

皇道樂土の建設

定價金七十錢

著者 津田光造

東京市神田區中猿樂町十五番地

發行者 佐藤勝之助

東京市神田區表猿樂町十九番地

印刷者 藤本茂雄

東京市神田區中猿樂町十五番地

發行所

軍事教育社

電話九段一二八三番  
振替東京七五九八六番

